
星空を、もう一度。

熊川修

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星空を、もう一度。

【Nコード】

N5599X

【作者名】

熊川修

【あらすじ】

人類による最終戦争が世界を包み、『西暦』という時代が終わりを告げる。

戦火の爪痕は人類から『星空』を奪った。

大戦から数百年後。ある小さな島に暮らす、4人の少年少女達。

だが、永遠と思われた彼らの平穏は唐突に崩壊を迎えようとしていた。

【少年少女の友情と恋愛とファンタジー的なお話です】

私が所属している同人サークルのHP上に掲載した小説を加筆・

修正したものです。(作者本人による)

プロローグ

『神の火』が世界を焼き尽くし、『西暦』は終わりを迎える。

戦火の爪痕は、晴れない曇天となりて残り。

世界から、『星空』は消えた。

世界の、東のはずれに位置する小さな島がある。

特別な観光地でもなく、そこに暮らす島民の数も決して多くはない。

面積のほとんどを森林と山岳地帯が占める、四方を海に囲まれた孤島。

ある夜更け。

この島にいくつも存在する、なんの変哲もない丘。

その丘の頂上を目指して歩を進める、3人の男女の姿があった。

1人は青年。1人はその青年の妻。そしてもう1人は、彼らの幼い愛娘。

3人は手を取り合い、時に励まし合いながら、やがてその丘を登りきる。

「あなた……空が」

「うん……」

軽く弾んだ呼吸を整えながら、夫婦は空を見る。

かつて、見上げればそこにあったはずの『星空』。

『西暦』と呼ばれていた時代、『古代』^{こたい}の終わりに起きた、人類による最終戦争。

『神の火』と呼ばれた戦火の炎が地上を焼き尽くし、世界中の空が曇天となって数百年。

未だ空を覆う雲は晴れることなく、もはや人々は伝承の類でしか『星空』を知る術はなかった。

「見てごらん……」

青年は娘の手をとり、空を見るよう諭す。

いつもと同じと思われていたこの夜。

皆が寝静まったこの島の上空で、奇跡は起きた。

「……あれが、『星空』というモノだよ」

父に促され、少女は空を見上げた。

そこには、空を覆い隠す雲の僅かな切れ間。

その向こう側に、たしかに見える、『星空』という名の輝く世界。

「ほしぞら……」

少女は産まれて初めて目にしたその景色の名をつぶやく。

やがて、流れを止めぬ雲が再び星の光を隠しても、彼女は空を見上げ続けていた。

それは、10年前の夜。

少女がたしかに見た、小さな島での、小さな奇跡。

島の少年たち 1

世界の、東のはずれに位置する小さな島。

人口3万人にも満たないこの島は、その面積のほとんどを森林と山岳地帯が占めている。

特別な観光地でもなく、主な産業は農漁業。

そこに、この島でしか採れない珍しい樹木の船交易が加わり、島民たちの暮らしは成り立っていた。

「ハッ……ハッ……！」

この島の中心から少し外れた丘陵地帯を駆ける、1人の少年。彼は滑るように丘を下り、森の中に飛び込んだ。

「ハア……ふう……」

森に飛び込み、大木に背を預けた少年は一息つき、木陰から後方をうかがう。

「……撒いたかな？」

しかし彼の期待に反して、丘の上から次々と降りてくる人影。少年を逃がさんとする、この島の大人たちである。

「……やっぱりそう甘くないか」

どっちに行った!?

たぶん森の中だろう……身を隠すにはうってつけだ

横に広がれ! 木の陰にいるかもしれん!

「……ちえつ。バレてら」

大人達は先の号令で横並びとなり、海岸に波が迫るようじこちらに向かつてくる。

「しょーがない……またひとつ走りか」

この場所に隠れてやり過ごすことは出来ない、と。

そう判断した少年は先手を打って木陰から飛び出し、追っ手から逃れるため森の奥へと走り出した。

いたぞおお! 逃がすな!

見失うなよ!

いいかげん捕まえろ!

少年の予想通り、彼の後姿を見つけた大人たちは口々に叫び、逃すまいと追いかける。

誰も彼も日頃の重労働で鍛えられた肉体だらけの、恰幅のいい大人たちだ。

捕まったあかつきには、相当な仕置きが待っていると考えてよいだろう。

無論、少年が捕まればの話だが。

(へっ……そう簡単に捕まっちゃんないよ！)

その影だけを目で追うならば、獲物を追いかける猛獣かと錯覚してしまいそうな機敏さ。

瞬間的な加速力はもとより、彼はその速度を持続させた状態で木々の間を走り抜けていく。

全速力を目指しつつも、木々にぶつからないよう走るのが精一杯な大人たちでは追いつけという方が無理な話だろう。

ふと気付けば、追っ手の大人たちの声も影も、ずいぶん遠いものになっていた。

「……へへっ！」

草花に足をとられることなく、最小の動きで木々を避け、時に枝から枝へ飛び移りながら、少年は圧倒的な速度で森の中を駆け抜ける。

どれほど走っただろう。彼はいつの間にか、森の出口へとたどり着いていた。

「全然来ないな……おっちゃんたち」

森を抜けたところで立ち止まり、振り返るが人影はない。

森の中では大人たちが今も必死に追いかけているのだが、すでに少年との距離は開きすぎていた。

「んー……」

少年が振り返れば、彼の前方には平野が広がり、その先には川が

見える。

ここからでは遠くてほとんど見えないが、あの川を越えた先には少年の暮らす村がある。

少年が立つこの場所から、あの村まで。

目にしただけでため息が出そうな距離だと人は言うかもしれないが、彼の足ならばそれは大した問題にならなかった。

むしろ、これだけの距離を全速で駆けることが出来るのは、少年にとっては悦びだった。

「……よしっ。もうひとつ走りっ！」

少年は顔を上げ、前方に見える川を目指して再び駆け出した。

島の少年たち 2

大人たちに追われ、森を駆け抜けた少年が村外れの川を目指していた頃。

その川には2人の少女がいた。

彼女たちは会話をしつつ、かごに山積み状態となっている大量の衣類を洗濯している。

「ええっ……！ そんな物があつたの？」

感嘆にも似た声をあげた片方の少女、名を『イリヤ』という。

彼女の外見を言葉で喩えるならば、「癒しの花」とするのが適当だろうか。

まだ幼さは残りつつ、女性らしい柔らかな雰囲気は既に充分纏っていると言っている。

頭髪は黄金が溶け込んだかのような淡いブロンドのショートカット。やや長く伸びた前髪の一部は小さな髪留めで止めている。

整った目鼻立ちは少女としての幼さと愛らしさ、それでいて今に花開かんとする、少女から女性へと向かう美しさの双方が調和されていた。

「そうよ？ 古代人の技術ってのは、それはもう凄かったんだから」

イリヤの驚愕の言葉に、得意気に返す赤髪の少女『メル』。

イリヤと同じように例えるなら、こちらは「美しいがトゲのある花」と言えよう。

炎のように赤く、長い頭髪を左右で2つに結った髪型が特徴的だ。ややつりあがった目尻。その瞳の透き通るような色合いと美しさはまるで瑠璃色の宝石。

動きやすさを重視した、少々露出の多いラフな服装。同年代の少女達と比べて発育のいい身体のライン。

イリヤとはいい意味で対照的であり、活発な印象と女性としての魅力を共有している。

「ゼーんぶ勝手に洗濯してくれるのかあ……いいなあ」

会話は続けながらも、作業の手は止めない。

汚れた衣類を川の水で濡らし、洗濯石を擦りつけて汚れを落とし、再び川の水に浸けて洗い流す。

カゴの中の汚れた衣類を全て綺麗にするまで、ひたすらこの作業の繰り返しだ。

もちろん、全て彼女たちの手作業である。

「それだけじゃないのよ？　なんと洗い終わった洗濯物を乾かすトコまでやってくれるんだから」

「え……ええっ！？　どうやって？　どうやって？」

「あ、うーんと……」

メルは言葉に詰まってしまった。

この情報は物知りの友人から聞いただけで、彼女自身もこれ以上深くは知らないのだ。

「ね。ね。どうやって？」

「んー、えつと……」

イリヤからの追求に彼女も必死に頭を働かせるが、汚れた服を全て自動で洗濯し、あまつさえ洗い終わった服の乾燥まで行う工程など思いつけない。

とはいえ、まるで自分が発見したかのように伝えてしまった以上、簡単に「それ以上は知らない」と認めるのも彼女としては情けない気がしてならない。

「えーつとね……その……ん？」

どう答えたらいいものかとメルが頭を捻っていたちようどその時、彼女たちが洗濯をしている川の上流方向から、聴き慣れた少年の声があった。

それも心底楽しそうなはしゃぎ声である。

「この声……『アル』？」

「アイツか。ま、べつに……」

べつにいいけど……そう言って流そうとしたメルだったが、そうはいかなくなつた。

彼女たちが洗濯をしている川の上流……2人が「アル」と呼ぶ少年の声がした方向から、泥やら葉っぱやらで汚れた水が流れてきたからである。

これではここで洗濯を続けても洗っている意味がない。

「……………」

「……アルのことだから、遊んでて汚れた服でも洗ってるのかな……？ はは……」

「……………」

「メ、メル……？ あのう……」

瑠璃色の宝石だったメルの瞳は、怒りに燃え上がる蒼炎の火へと変わっていた。

「行くわよ」

「でも、洗濯がまだ……」

「……………」

「う、うんっ。そうだね！ 行こう行こうっ！」

無言の気迫に圧されたイリヤは慌てて洗濯カゴを抱え、彼女の後をついて行った。

島の少年たち 3

「いやっほーい！」

丘を越え、森を抜け、平野を駆け抜けた少年『アル』は川の上流に到着するや否や、水の中へ飛び込んだ。

「ぷっはあ！ ふいー……」

一度川の底まで潜ってから、勢いよく水面へと飛び出す。

水を浴びた猫のように頭を振るい、髪から滴る水を飛ばすと、今度は無邪気に泳ぎ始めた。

彼の年齢からすれば幼い行いかもしれないが、当の本人はご満悦な様子である。

「おっ！ 魚発見！」

夕食のおかずには一品加えようかと、川底に漂う小魚の群れを夢中で追い回す。

背後に迫る、サメも泣いて逃げ出しそうな殺気に気付かずに。

「あぁっ！ 逃げられたか……」

「……ずいぶん楽しそうね？」

「おう！ 走った後で、気持ちいいし！」

「ふふ……でもね、そのおかげで迷惑してる人間もいるのよ？」

「ん……?」

ここで初めて、アルは声のする方向へ顔を向けた。

「ぶっ!？」

その瞬間、彼の視界には握り拳しか映らなかった。牛に突進でもされたかの如く、アルは派手に吹き飛んで落ちた。

しかし彼の耐久力もなかなかのもので、すぐに体勢を立て直して水面へと顔を出す。

「いててて……なにすんだよいきなり!？」

「なにすんだよ? ……じゃないわよこの馬鹿アル!」

「あだっ!？」

怒号と共に、メルが追撃の握り拳を叩きつけた。今度は頭頂部に。

「ぐ……」

「アンタねえっ! 泳ごうが溺れようが川の中でお漏らししようが構わないけど、下流でやりなさいよ下流で!」

「メル……最後のは構おうよ……」

重たい洗濯カゴを抱え、やっとこさメルに追いついたイリヤがため息混じりにツッコミを入れる。

「イリヤ……! 居たんだ?」

「あ、うん。下の方でメルと洗濯をね……」

「くおーら。話はまだ終わってないの……よっ」

「フギヤっ!?!」

イリヤの方に目を奪われたアルの髪を掴み、自分の方を向くように容赦なく首をひねる。アルの首から少しだけ嫌な音がした。

「め、メル、さすがにちょっとやり過ぎじゃ……」

「乙女2人の洗濯タイムを邪魔した罰よ。私刑及び極刑に値するわ」

「なにもそこまで……?」

背後から誰かの声が聞こえた気がしてイリヤたちは振り返った。

ここからはそれなりの距離があるが、何人もの大人たちがこちらに向かつて走って来ているのが見える。

どうにも穏やかな雰囲気でないことだけは感じ取れた。

「何かあったのかな……？」

「あちゃー……もう追って来たか」

「……なに？ アンタまたなにかやったの？」

「いや。悪いことはしてないんだけど、なんか追いかけてさ。あいかわらずしつこいんだコレが」

腑に落ちないといった様子のアルを見てイリヤは、なにかマズいことをしたから追いかけるんじゃないかと言いつうになっただが、彼女が口にする前にメルが質問した。

「何かしたから追われるんでしょうよ……アンタ、またあれをやらかしたんじゃないでしょうね？」

「いや、だってちょっと柵を越えて、見てきただけなんだけだぜ？ ちょっとしか触ってないし、もちろん壊してない」

「……言つとくけど、アンタそれ全部この島では禁忌とされてるコトだからね」

「そりゃ、あれだけ怒るよねえ……」

「うーむ……」

この島には、島民たちの中で侵してはならないとされる物がある。

島はずれの小高い丘、その上にそびえ立つ……『古代の遺産』と呼ばれる物。

滅びの日を越えて今なお残る、古代文明の建造物。

特別な日を除き、島民たちがこれに近付くことは許されていない。当然、遺産の周りはびっしりと柵が築かれており、聖域として常時見張りまですべてしている状態だ。

しかし興味を抑えきれぬアルは、たびたびこの聖域へと忍び込み、今日のように島中の大人たちから追い掛け回されていた。

「なんでダメなのかな？ 俺、何回もあそこに入ったけど、何も危ない物なんてなかったぞ？」

だが何度見つかり、追いかけられ、捕まって説教されようが、本人に反省の色は皆無だった。

「危ないかどうか大人たちにも分からないから、近付くなって言われてんでしょうが！」

「そ、そうだよつ。何かあってからじゃ……」

「んー……」

2人からの忠告について、アルは数秒間検討してから結論を口に

する。

「やだ。納得いかない」

「やだつて……アンタねえ」

「だつてさ……お？」

「こうしてやりとりをしている間にも、大人たちはアルを捕まえようとしてこちらに迫ってきていた。

「やべっ。ゆっくりし過ぎたか……」

アルは川から上がり、今度は村に向かって再び駆け出した。

「あつ……そうだそうだ」

が、すぐにイリヤの方へ向き直した。彼女が抱えていた洗濯物いっぱいのカゴを、ひょいと受け取る。

「えっ……アル？」

「逃げるついでに運んどく。玄関の前に置いとくから……んじゃ、またな！」

イリヤが遠慮する暇もなく、アルは洗濯カゴを抱えたまま村の方へ走り去っていった。

「あ、アル！ ちょっと……もう行っちゃったし。……相変わらず足はスゴいわね。頭はてんでダメだけど」

「あはは……あつ」

何かに気付いたらしいイリヤが、急にオロオロとし始めた。

「イリヤ、どしたの？」

「あのカゴ……まだ洗ってないのも入ってた」

「……………」

「あ……あはは」

「あ・の・バカはああ……！」

怒りに身を震わすメルを、血眼にアルを追っている大人たちが走り抜けて行った。

翌日。

今日も今日とてアルは聖域に侵入し、『古代の遺産』をじっくりと見学。

その後、いつも通り村の大人たちに追いかけてまわされていた。もはや恒例行事に近い。

聖域近くの森で、見失ったアルを探す大人たち数人の姿が見える。

どうだ！？

いや。こっちにはいなかった。

くそっ、相変わらず逃げ足の速い奴だ。どこに消えた？

もうこの辺にはいないかもな……。

「……………」

大人たちの話し声を、アルは暗闇の中で聞いていた。

正確には、地面の下、穴の中で。

しばらくすると諦めたのか場所を変えるのか、足音と話し声が遠くなったのを確認してから、アルは大きく安堵の息を吐いた。

「ふいー。行ったか」

「……そつらしいな」

相槌の声の主は、アルの親友である少年のもの。その少年も、アルと同じ穴の中にいた。

この穴は幼い頃に彼らが発見し、以来アルも逃げ込む場所としてよく利用させてもらっている、いわば彼らの秘密基地。

地面に対し、ほぼ垂直に掘られた大人1人がどうにか入り込めそうな穴。

入り口には蓋として草の塊が積まれており、周囲の景色と相まって、未だ村の大人たちには見つかっていない。

「……いやあー今日は危なかった。助かったぜ」

「アル……捕まらなくて安心したのはいいんだが、1ついいか？」

「んあ？ なんだ？」

アルの足元からくぐもって発せられる親友の声。どういふ事かという事。

「……いいかげん頭の上から降りてくれ」

「あ、悪い悪い」

アルが追跡を逃れるためにこの穴に飛び込んだとき、ちょうど彼も穴の中に入ったところだった。

こういつ時に限ってタイミングがピッタリと合ってしまい、アルの全体重をもって踏みつけられた後頭部。

アルは謝罪しつつ、友人の頭から両足をどけて降りる。

「いやぁーゴメンな？ 急いでたからさ」

「まったく……。眼鏡が割れていないのが不思議なくらいだ」

のそりと起き上がり、アルの方へ顔も向けずに愛用の眼鏡についた汚れを拭き取る。

いたって彼らしい、クールでドライな反応だった。

「いや、ほんとゴメンつて。お前もちょうどココに来てたところだつて知らなかったんだよ」

「確認してから入れといつも言っているだろう……これで何度目だ。僕の上にお前が落ちてきたのは」

綺麗になった眼鏡を着けなおすと、踏みつけられていた頭髪と衣服に付いた土と草を払い落とした。

アルと10年以上の幼馴染であるこの少年、名を『トーマ』という。

アル達とは異なる地方の血を引いているらしく、島民達の中で唯一である、漆黒の頭髪。

長く伸ばされた後ろ髪は狐の尾のように1本にまとめられ、その背中から腰までを覆い隠す。

彼の内面から溢れ出すような、知的で勉強熱心なイメージをより一層高める眼鏡を常時着用している。

同年代の少年達と比べれば少々上を行く身長。

しかし、その体格は女性のものではないかと思うほど細身で繊細。

男らしさ、力強さといった観点からの評価は低いものになるだろう。

「やれやれ……追っ手はもう行ったようだし、出て行ってもだいじょうぶだろう……じゃあな。僕はもう行くぞ」

そう言って顔も向けずに軽く手を振ると、トーマは足元のたいまつに火を点け、穴の奥へと進んでいく。

この穴は断面的に見ればL字の形となっており、入り口を下りた目の前には細く長い暗闇の地下通路が続いている。

左右と天井の土は木を加工したらしい柱と、丈夫かつ繊細な縫い目の網によって支えられていた。

この通路の先に、トーマが毎日のように訪れている秘密の地下室がある。

「……どうして付いて来る」

振り返らず、トーマはアルに訊ねた。

追いかけていた大人たちがいなくなり、外に戻ると考えていたアルがそうはせず、トーマの後を付いて歩いていたからである。

「ん？ だってヒマだし」

「……僕は忙しいんだ」

「そう言っになって……あっ、そうだ。トーマに相談したいこともあったしね」

「……忘れていたということは大した相談事ではないということだな。また今度だ」

「んもー。そんなに怒るなって……調べ物、俺も手伝っからさあ」

「結構だ。邪魔にしなければならない」

「だから踏んだのは悪かったってば……ゴメンってば」

邪険にされても、アルが帰る様子はない。

2人は会話をしながら、たいまつで照らされた地下通路を進んでいく。

やがて彼らは通路の行き止まり、扉の前へとたどり着いた。

この通路の存在自体、アルにトーマ、そしてメルのみ3人以外には知られていないが、トーマは念のため後ろを確認してから扉を開け、部屋の中へと入っていく。

無論、アルもそれに続いて。

秘密基地と相談と 1

この場所はアル達しか知らない、秘密の地下室。

むき出しになっていている土の壁や天井は部屋と呼ぶには少々原始的過ぎるかもしれないが、それでもここは少年達にとって宝の部屋であった。

部屋の中心には木作りの大きなテーブル。向かい合い、テーブルを挟むように椅子が2つ置かれ、壁一面に並べられた大きな棚。

そこには大小様々な本がほとんど隙間なく収納されており、本の背表紙を飾る文字もまた、様々な造形のモノが並ぶ。

トーマはテーブルの上に置かれているロウソクにたいまつから火を灯すと、棚から数冊の本をまとめて取り出し、いつものように調べ物を始めた。

一方でアルはといえば、トーマの向かいの椅子に腰掛けてあくびをする。

「……帰らないのか」

「だって、ヒマだしさ」

手にした本のページから目を離さずに質問したトーマに、変わらぬ答えを返すアル。

「やれやれ……じゃあさっさと話して、僕を独りに……うおっ！？」

仕方なく本からアルへと視線を向けたトーマが驚愕した。
ロウソクの灯りに照らされたアルの顔を見て、である。

「……なんだ急に。どうかしたのか？」

「ど、どうかしたのはお前だ！ なんなんだその顔は!？」

彼の顔は、まるで集団に袋叩きにでも遭ったかのようにボロボロでアザだらけだった。

しかし当の本人は気付いていなかったのか、トーマに言われてから自分の顔に手をやり、腫れ上がった頬や脛を確認する。

「ああ……痛いとは思ったけど、腫れてたんだな」

「……大人たちにも捕まったのか？」

「んなわけないだろ。そう簡単に捕まんないよ」

トーマの質問に、アルはボロボロながら満面の笑みで返す。

「昨日なんだけど、逃げてる途中でイリヤたちに会って、重そうだったから逃げるついでに洗濯物を家まで届けたんだ。そしたら家に帰ってからメルが来て、んで殴られた」

「……事情がよく分からんが、とりあえずその顔はメルにやられた、と？」

「そーいっこと」

「……相変わらずだな」

島一番の問題児・アルが暴れ、少女でありながら島一番ではないかという腕力のメルが、鉄拳制裁を加える……これはもはや日常風景。

アルは逃げ足こそ勝っていても、ケンカとなればメルに勝ったこととはない。

というより、本気のケンカをしても勝てないだろう。相手が少女ということを引きにしても。

「まあいい……それで？」

「それで？」

「……相談があるとお前が言っていたんだが」

「おお！ そうだったそうだった」

「……本当に相談したいのかお前は」

相談したいと言っておきながら、トーマに言われるまで忘れていたアルの能天気さというか、いつも通りのマイペースぶりにトーマは軽い頭痛を覚えそうだった。

「もちろんだって。お前にしか相談できないんだよ」

「……聞くだけは聞いてやる」

「なんだよ……なんか冷たくないか？」

「門前払いされないだけありがたく思え」

「……ぶー」

「ぶうぶう言っていないで早くしろ。今日中にこいつは読み終えた
いんだ」

トーマはそうつぶやき、開いていた本を閉じてテーブルの端に寄
せた。

秘密基地と相談と 2

トーマが連日この場所に通い、引き籠る理由。それは彼が手にしている古書にある。

かつてこの世界が『西暦』と呼ばれていた、古い時代の歴史。

通称、『古代史』と呼ばれるその時代の記憶や記録は、ほとんど現存していない。

時代が流れすぎているうえ、数多の技術や記録が、当時の巨大な戦火によって失われてしまったということもある。

何より、古代史の終わりを生きていた人々には、自分たちの今を未来に伝えようなどという余裕がなく、今日という日を生きるのに必死だった。

その間も時は流れ、世界の終わりの記憶も、実際にそれを見た者たちも少しずつ消えていく。

しかし、歴史を紡ぐ事を諦めなかった者もいる。

だから西暦の終わりから数百年が経った今も、こうして古代史について記録された古書の類が、大変希少ではあるが残っている。

アルとトーマが幼少の頃に見つけたこの部屋は保管庫としてつくられたのか、そうした書物が大量に残されていた。

ただし古代と現在では、人々が使っている言語も異なるため、読解には難解な翻訳作業が付いてまわる。

トーマはこの部屋を見つけてから古代史に強い興味を抱き、以来

毎日ここに通い詰めては、独学で古代史について紐解き、学んでいる。

メルがイリヤに自慢していた『人間の代わりに洗濯をしてくれる道具』についても、トーマから聞きかじった知識だった。

「じゃ……じゃあ、相談だ。いいか？ 話すぞ？」

トーマに急かされたアルは、秘密話をするように顔をグイッと近づけ、なんのためか発言の許可を再度求めた。

「……だから、早く話せと言っている」

「その、相談っていうのはだな……」

「ああ」

「……………」

しかし、アルの口からはなかなか発言の一言目が出てこない。その間にもトーマの我慢は限界に近付いていた。

「……調べものに戻るぞ？」

「だあああ悪かった！ ちゃんと話す！ 話すから！」

古書を再び開こうとするトーマにすがりつく。

もう一度顔を向き合わせ、アルは言葉に迷いながら相談を始めた。

「んーと……その……」

しかしアルは、相談を始めた途端、気恥ずかしいとばかりにトーマから視線を逸らす。

「い、イリヤのことなんだけど……それ」

「イリヤの？」

「そ……そう。そうなんだよ……」

いよいよアルの顔は赤く染まり、その身体は完全にトーマとはあさっての方を向いていた。

「い……い、いいいいイリヤってさ……その、なんていうか……か、可愛い……よな？」

「ふむ」

この発言とアルの態度から、すでに相談の内容がなんとなく予想はついていたトーマだったが、ここはあえて話に乗ってやることにした。

「まあ……村一番の人气で、老若男女問わず評判がいいのも否定しないが」

「だっ、だよな？ そうだよな!?! うんっ!」

「……それで？」

「それで……その……」

「イリヤが可愛いという事と、お前の相談に何の関係がある？」

「う、ん……と」

次の言葉を探して、軽いパニックに陥っているのが彼の後姿から簡単に見て取れた。

「その……あいつ、可愛いし……その……えーっと」

「……好きだとも？」

「ぐはぁっ！」

「……………」

胸に杭でも打ち込まれたかのような勢いでアルが思い切りのけぞる。

「……イリヤの事を考えると、胸が苦しくなる」

「はづっっ」

「……イリヤの近くに行くと、なぜか緊張する」

「はづっっっっ」

非常に分かり易い、お手本のような反応だった。

「イリヤが夢に出てくると……」

「も、もうやめてくれ……死にそうだから」

胸を押さえ、その場にうずくまって口撃の中止を懇願するアル。

「で、相談事というのはそれか？」

「……そうです」

「まあ、お前がイリヤに好意を寄せているのは前々から分かっ
ていたが……」

「え、ええええええええっ！？　なんで分かったんだ！？」

「……お前のイリヤに対する態度を見れば余程のバカでない
限り分かる」

「そ、そうだったのか……」

(……気付かれてないと思ってたのかコイツは)

「それで、どうするつもりだ？」

どうして発覚したのか懸念に考えているアルに、トーマが切り出
した。

「どうするって……」

「というよりお前がどうしたいのか、だ。イリヤが好きだから、どうしたいんだ」

「それが分からないから相談したんだよ……」

「なるほど……」

トーマは少しもズレていない眼鏡を右手の中指で押し上げた。何か考え事をしたりする時に見せる、彼特有の癖である。彼はそのまま両目を閉じ、あごに手を当て無言になった。

アルとは10年以上の付き合いになるが、恋愛事での相談はコレが初めてだ。

彼がかなり前から、イリヤに好意を寄せているのも知っている。おそらく、アルにとってはこれが『初恋』というやつなのだろう。

(若い男女の恋愛……か。以前に古書で読んだことがあったな……)

「トーマ？」

(たしか……39ページの辺りに……)

以前に読破し、内容を記憶した古書。その記憶をたどり、頭の中でその本を思い浮かべてページをめくっていく。

「……思い出したぞ」

「へ？」

トーマはゆっくりと目を開き、再び眼鏡の中心を中指で押し上げた。

「……いいだろう。その相談、乗ってやる」

「えっ……ホントか!？」

「ああ……だが今日はここまで。続きはまた今度だ」

「なんで？　なんか思い付いたんなら、今すぐ教えてくれれば……」

「思い付きはしたが、ちょっとした準備がいる……そうだな、明日の昼過ぎだ」

「えー？　なにするんだよ？」

「悪いようにはしないさ……とにかく詳しいことは明日だ。昼過ぎに『古代の遺産』手前の丘の上で落ち合うぞ」

トーマはそれだけ言うと、この話はもうお終いだと言わんばかりにテーブルの古書を開き、調べ物を再開した。

「なんかスツゲエ気になるけど……仕方ないか」

この場で問題解決の方法が見つかると考えていたのか、アルは少

しだけ落胆した様子で部屋を後にした。

「んじゃトーマ、また明日。よろしくな」

「ああ……」

アルが地下室を出て行き、足音が遠ざかるのを確認してトーマは古書のページを閉じる。

(……行っただか)

古書を棚に片付け、テーブルの上の灯りを消し、彼もまた地下を後にした。

「とりあえず、あいつに会いに行くとするか……」

目的の人物に会うため、トーマはその足を村の方へと向けた。

恋心、女心 1

翌日の昼。

アルは予定よりも少し早く、トーマとの待ち合わせ場所へと足を運んだ。

彼が友人たちとの待ち合わせによく指定する場所。古代の遺産の手前にある、小さな丘。

近付くことが許されない、聖域と呼ばれる場所とは目と鼻の先だ。

小高い丘の上に到着したが、まだトーマの姿はない。

「早すぎたかな……?」

待ち合わせ場所に間違いはないはずなので、のんびりとトーマの到着を待つことにした。

アルは草の上に寝転び、空の見上げる。

そこは、一面の曇。

どれほど時間が経ち、頭上の雲が風に流れても、決して晴れることのない曇天。

覆い隠された太陽の光で雲が白く照らされ、昼と夜の違いこそあれど、それ以外に変化のない景色。

「……………」

アルは寝返りを打った。代わり映えない空を見ていてもつまらない。

視線を動かせば、目に映ったのは古代の遺跡。

それは冷たさを色で表したような、白銀色の巨体。

土台部分は物物しく、しかし空を仰ぐ先端へ向かうにしたがい、その外形は細く、スッキリとしたものになっている。

まっすぐに伸びた先端付近は、まるで槍頭の抜けた槍のようであった。

何のために造られたのか、何に使われたのか知る者のいない、この島に残る古代人たちが残した巨大な建造物。

島の大人たちはこれを遺産と呼び、崇め奉る対象とし、安易に近付いたり触れてはならないとしている。

遺産がそびえ立つあの丘は聖域とされ、特別な日、特別な理由がない限り踏み入ることは許されていない。

丘の頂上付近には遺産を囲む形でバリケードが築かれ、常に数人の大人たちが交代で見張りを立てているほどだ。

それでも遺産への好奇心が抑えきれないアルは、幾度となく聖域に進入しては見つかり、大目玉をくらっているのだが。

「……ん」

背後から足音が聞こえ、アルは起き上がって振り向いた。

「よっ。トーマ」

「待たせたか？」

「待ったけど……アレ見てたらあつという間だったから、別にいいよ」

アルはそう言って、背後の建造物を指差す。

「古代の遺産か……」

「なんか上手く言えないけど、眺めてると不思議なカンジするんだよなー……」

2人は会話を中断してそれを見上げる。

測った事はないが、全長は彼らの身長10倍近くはあろうか。

こうして見上げているだけで、得体の知れぬ恐怖と威圧が身を包み、不思議と好奇心が沸き起こる。

「なあトーマ。なんであんなカタチしてるんだろーな？」

「……さあな」

「……釣れない返事だなあ」

「分からないものは仕方ないだろう……信仰の対象ではあるが、実際あれが何なのかを解明できた人間は、この島にはいないんだからな」

「でもさ……前に、『カタチあるものには全て理由がある』ってトーマ言ってただろ？」

「古代書からの受け売りだ……まあ、僕もその通りだとは思って」

「つてことはさ。あれも、ただ建ってるだけの物じゃないってことか？」

「さあな。古代人たちが、何か目的があって造ったのかもしれないないし、実際に何かに使用されていたのかもしれない……」

トーマは視線を変えず、歩を進めてアルの横に並んだ。

見上げる彼らに向かい風が吹く。

そびえ立つ古代の遺産の側から、丘を通り抜けてくる風は草や木々が風に揺れる音とは違う、どこか神秘的な響音を耳へと運ぶ。

恋心、女心 2

「遺産も含めて、古代史は謎だらけだ……生き証人だって、もうこの世界にはいない」

「……だな」

「唯一の手がかりといえば、あの古代書だけ……だから僕は、いつか古代書を全て解読する……古代史を読み解いてみせる。そうすれば、古代の遺産が何なのか、なぜ造られたのかも分かるはずだからな」

目の前にある古代の遺産を見上げながら、トーマは自らの責務としている、目標を再確認するようにつぶやく。

普段はどこか冷めた印象の強いトーマが、その裏で『古代史』に関して並々ならぬ熱意を抱いていることをアルは知っている。

その凜とした表情を横目に見たアルは、同じ年ながら、彼の方が随分と大人であるような錯覚を覚えた。

「話が逸れたな……今日、ここに来た本題に入ろう」

「お、おお！ き、きききき緊張、緊張するな……」

「……わざわざ口にしなくても、お前がガチガチに緊張しているのは十分伝わってる」

「わ、わわ分かっているさ……ふう」

本題、アルの相談事について話し始める前に、大きく伸びをしてアルは深呼吸をする。

「で？ 昨日言ってた、思いついた事ってのはなんなんだ？」

「ああ。僕が思いついた作戦……というより、お前が取るべきことからの行動なんだがな」

これから語りだそうという意思の表れか、トーマはいつもの眼鏡を中指で押し上げる癖を見せた。

あいかかわらず眼鏡は少しもズレていなかったが。

「確認も含めて言うておくが、お前はイリヤのことが好きだ」

「ぐおっ！」

「……この先、毎回その反応をされると話が進まないから耐えろ」

「……努力します」

「それで、お前はイリヤのことが好きなわけだが」

「ぐ」

「……………」

「つ、続けてくれ……………」

「……………好きだが、今のところどうしたらいいのかわからない、と」

「そーそー」

「なら、やることは1つだな」

「1つ？」

「告白だ」

「こくはく……」

トーマからの助言に、アルはぽかんと口を開けて固まった。

「そう、告白だ。これは古代書からの受け売りなんだが……」

「……なあなあトーマ」

「なんだ？」

「こくはくってなんだ？ 食い物か？」

トーマは盛大にずっこけた。

「い、いいだろう……そこから説明してやる」

「おっっ」

頭の中身はともかく、気合だけは十分な様子のアルだった。

「いいか、告白というのはだな。男女間において……」

「自分が相手に対して抱いてる好きという気持ちを打ち明けること……でしょ？」

「へっ？」

背後からの突然の声、しかもそれは女の声。

ということは当然、目の前にいるトーマの声ではなく、第三者の声ということ。

恐る恐るアルは振り向き、心臓が口から飛び出すんじゃないかという衝撃を覚えた。

「なっ……なんでお前がここに……!？」

そして、その人物が目映った瞬間、どうして今までその存在に気付けなかったのだらうと、激しく後悔した。

恋心、女心 3

突然の声に振り向いたアルの視界に映った少女。

その少女とは、アルにとってこの島における唯一といっても過言ではない天敵、メルであった。

「お、おおお前……いつからそこに……！」

「……遅かったな。来ないのかと思ったぞ」

「いやぁー悪いわね。ちょっと野暮用があつてさー」

「つてオイ！ 人の話を聞けつての！」

「ああ、はいはい聞いてるわよー。で？ 何よ？」

「だから、なんでお前がここに……！」

「なんでとは失礼ね。他ならぬアルの相談に乗ってあげるためにここまで足を運んであげたっていうのに」

「俺の相談つて……トーマ、もしかして……！？」

現状からいってそれしか考えられないのだが、一応確認の意味を込めてアルはトーマを問い詰めた。

「そうだ。僕がここに呼び出した」

出来れば外れて欲しかった予想通りの答えに、アルは全身が凍りつく感覚を覚えた。

「じゃ、じゃあ……俺がイリヤを好ゴホンゴホン！……その、あの相談も」

「ああ。メルはもう知っている」

「うん。知ってるわよー」

「ぎいやあああああ……！！」

アルは落雷にでも遭ったかのような反応を見せ、操り人形の糸が切れたかのように地面に倒れた。

「い……いったいどうして」

「昨日お前から相談を受けた後にメルにも話してな。こうして来てもらった」

「そんなことは分かってんだよおおおお！！」

直立不動の姿勢で地面に突っ伏していたアルは、これまた電気ショックを与えられたかのようにガバツと顔を上げた。

「問題はあつ！この赤髪の悪魔に俺の相談が知られたっていうぐへっ！？」

後頭部にメルの鉄拳が直撃し、アルは再び地面に突っ伏した。

「だ・れ・が・悪魔だコラ」

「うう…………俺は、お前にだけのつもりで、恥ずかしくても相談したのに…………」

「…………まあ、メルにも相談に乗ってもらうことを秘密にしていたのは悪かったな。許せ」

「ぐすん。もう終わりだ…………明日からどんな顔してイリヤに会えば…………というか、恥ずかしくてこの島にいらなくなるかも…………」

アルはまるでこの世の終わりのようにひたすら嘆いていた。

お喋り好きで、日頃からアルの行動に少なからず迷惑しているメルにこの秘密を知られてしまったては、島中に噂が広まるのはもはや時間の問題だろう。

そんな彼に、赤い髪の悪魔…………もとい、メルから天使のような言葉がかけられる。

「いやいや、安心しなさいって。アンタの相談内容、まだ誰にも言っていないから。もちろんイリヤにも」

「え…………ほ、ホントか？ 本当に本当なのか!？」

「もちろん、ま・だ・言っていないだけだねー」

「……………」

彼女に感謝しようかという気持ちが芽生えかけていたアルの心は、再び無残に打ち砕かれた。

「冗談よじょーだん。言わないって」

「もっいいいよ。好きにしてくれよ……俺は帰って、旅に出る準備をするから……」

「言わないってば。大丈夫だって。力になってあげようと思って、わざわざここに来てるんだから」

「……なあトーマ。信用していいと思うか？」

「アタシの言葉で素直に信じなさいよね……」

恋心、女心 4

「たしかに、メルの中から信じろと言われても、信用が無いからな……」

「うん。無い」

アルもトーマの意見に同調し、キツパリハツキリと言い放った。

(コイツら……)

「……まあ、お前を島の笑い話にしようという気はない。メルに話したのは、彼女の力も必要になるだろうと思ったからだ」

「メルのちから……なんかぶっ壊すのか？」

「あ？ とりあえずアンタのそのカラツポ頭を叩き壊してあげようか？」

「そういう意味での力じゃない……考えてみる。この悩み、僕とお前の2人だけでなんとかなると思うか？」

「うーん……」

「恋愛というものは、男だけの考えだとあらぬ方向に行ってしまうことが多い……らしいからな。身近な人物で、性別的に一応は女ということ、メルにも協力を頼んだんだ」

「アタシはれっきとした女だっつーの」

「島一番の怪力馬鹿がよく言う……あだっ!？」

「幸い、メルはこういう話題にはかなり興味津々な様子だったからな。女側の思考が分かる協力者ということ……」

「そこで、このメル様に白髪の矢が立ったというワケよ」

「……正しくは白羽の矢だな」

「細かいコトはいーの。じゃあとりあえず、アル！ 始めるわよ」

「なにを？」

「決まってるでしょ。講義よ、講義」

「コウギ？」

「そ。勉強会ね……名付けて、『メル先生の恋愛講座!』ってトコかしらねー。ハイ、座って座って」

メルはすっかり講師気取りなのか、拾ってきたらしい木の細枝を手に、アルに足元への着席を促す。

言われたとおりにアルが草の上に腰を下ろし、メルの講義とやらが始まった。

「んじゃ、始めるわよー」

「おーっ」

元気よく返事をする生徒役のアル。その横には、不服といった表情でトーマが座らせられていた。

「……なんで僕まで」

「はい、じゃあアル君。さっそく問題ですが恋愛とはなんでしょうっ」

トーマの小声での抗議は、華麗にスルーされた。

「んー……よく分からないけど、誰かを好きになること」

「まあいいでしょう。一応は恋愛の中に含まれてるしね。」

「違うのか？」

「いい？ 『恋』と『愛』が揃って、恋愛よ。恋っていうのは一方的なもの。相手のことが好きで、一緒にいたいって思う気持ち。愛っていうのは相手につくしてあげたり、大切に想う気持ち」

「ふむ」

「で、今のアンタの状態は、イリヤに対しての好きという一方的なもの……つまり、恋ね」

「ふむふむ」

「で、この恋をどうやって恋愛にするかだけ……その最終手段が、告白ってワケ」

「えーっと……コクハクっていうのは……」

「さつきも言ったけど、『男女の間において、相手に対して好きだという気持ちを持ち明けること』よ。分かりやすく言えば、『私はあなたが好きです』って、相手に伝えるっていうこと」

「ふーん……」

「ま、言えばお終いつてワケじゃなくて、当然言われた相手にだって選ぶ権利はあるから、断ることは出来るのね。そこで相手もオケーすれば成功。晴れて恋は恋愛になり、愛し合う2人は『恋人』となるってワケ」

「コイビトかあ……」

「恋人となった後は、お互いの仲を深め合うの。友達としてでなく、恋人として、男女として。そして最終的には……」

「コイビトかあ……」

「……ふんっ！」

「ぐふっ！」

メルの右拳がアルの顔面にめり込み、彼は衝撃で後方に転がる。血の気の多い講師だった。

恋心、女心 5

「ぐ……イチチ」

「講義はちゃんと聴く！ 恋人って単語で色々妄想する気持ちは分かるけど、集中！」

「は、はい」

「やれやれ……ずいぶんと暴力的な講師だがはっ!?!」

小声でつぶやいたトーマの脳天にもげんこつが見舞われる。

「抗議中の私語禁止ね。容赦なく鉄拳制裁するから」

「だ……だからなんで僕まで生徒側でぐっ!?!」

2発目。先ほどよりも強烈な鉄槌だった。

「メル……あ、いや……先生？ とりあえず続きをたの……お願いします」

「よろしいっ」

先生という呼ばれ方に満足したらしいメルは、上機嫌で講義を再開した。

「まあとりあえず、相手に想いを伝えるまでは恋。相手が受け入

れてくれて、お互いに愛し合うと恋愛となり、恋人と呼ばれるわ。
その後の展開次第だけど、最終的には結婚がゴールってカンジね」

「ほほお……」

「で、とりあえずアンタが目指さなきゃいけないのは告白の成功よ。そしてそのためには、『女心』というやつを知る必要があるわ」

「オンナゴコロ？」

「……平たく言えば女性特有の心理、気持ちだな」

「アンタらにとつちや無縁なモノだろうけどね。例えばアル……
アンタがもし！ もしもよ？ もし、イリヤから突然プレゼントを
もらえたとして、それがアンタがトイレに入ってる最中だったら、
どんな気持ち？」

「……ヒドイ例えだな」

「ん……んー？ 嬉しいけど、違う時にしてほしい」

「でしよう？ まあ、今のは例えが悪かったかもだけど、アンタ
が告白する時に気をつけるべきところよ。『愛を語るには、時と場
所を選ぶ！ そして相手の気持ちを汲み取る！』」

拳を握り締め、目の奥に恋愛を語る炎を灯し、メルは力強く言い
切った。

「コレ、告白もとい恋愛における重要ポイントね。書いて覚えと
きなさい」

「トーマ。書く物がない」

「……頭の中にもメモしておけ」

「んで告白するにあたって、時と場所を選ぶのも、相手の気持ちを汲み取るのにも、女心を知ってるっていうのは重要なワケよ。わかる？」

「わかりませ……ぐえっ!?!」

アルは元気いっぱいに答え、そして叩かれた。

「……回答出来ないからといって殴るのはどうかと思うんだがな」

「何か言ったかしら? トーマ君」

「べつに……続けてくれ」

「ではでは。ここでいう女心っていうのは、『イリヤの気持ち』と考えて」

「おう」

「あの娘の気持ちを知ること、イリヤの望む形……すなわち、時と場所、そしてどんな言葉で告白すればいいかが分かる。対策を立てられる……ってことはつまり?」

「つまり?」

「アンタの告白が成功する確率が、それだけ高くなるってことよ」

「おお……なんかよく分かんないけど、スゴそうだ！」

ある意味予想通りの反応に、メルとトーマはため息をついた。

「……コイツに難しいやり方は合わないんじゃないか？」

「ん？」

「そうねえ……アンタの場合、ストレートに好きだって言った方が良さそうね」

「？」

「ま、そういうことは又キにしても、イリヤが憧れているような告白が出来れば御の字じゃない？」

「うーん……」

アルは真剣に思考してみたが、彼女が憧れている告白とはどんなものなのか想像出来ない。

というより改めて考えてみると、彼女について知らないことは結構ある。

好きな場所、好きな時間、季節、言葉……毎日のように会っているとはいえ、彼女への好意の裏返しである恥ずかしさから、知らぬ間に会話の中でも壁を作ってしまったのが原因だった。

恋心、女心 6

「うーん……イリヤの憧れてる……告白」

目を閉じ、腕組をし、身体ごと捻ってみても妙案が思いつかない。

「仕方ないわねえ……そんな悩めるバカ猫ちゃんに、メル先生からのアドバイスよっ」

「ん？」

メルは胸の前で両手を組み、両の瞳をキラキラと輝かせながら答えた。

「女の子っていうのはね……マロンチックな恋愛に憧れるものなのよ」

「マロンか……俺も好きだぞ。甘くてウマイし」

「……正しくはロマンチックな」

「そーそー。それぞれ」

「……マロンと何が違うんだ？」

「ぜんっぜん違うわ。例えるならイリヤのパンツと村長のパンツくらい違うわ」

「……違うなあ」

「……どうでもいいがそのいちいちヒドイ例えはなんとかならぬ
いのか」

「話を戻すと、ロマンチックっていうのは……はい。トーマよる
しく」

「そこで僕に振るのか……ロマンチックというのは、古代書に表
記されていた言葉だ」

「どういう意味なんだ？」

「簡単に言えば、現実的でないことだ。古代書に載っていた『シ
ンデレラ』という話は前に聞かせたことがあるだろう？」

「うんうん。覚えてる」

「ああいった、現実ではなかなか起こり得ない事。情緒的で、空
想的。夢のような理想的な状況のことだな」

「うーん……ロマンチック……」

「理解できるかしら？」

「よく分かんないけど……なんだ。俺がガラスの靴を用意すれば
いいのか？」

ある意味、彼らしい結論に2人は再び深いため息をついた。

「そういってじゃなくてだな……」

「シンデレラの話は、1つの例え。要するに女の子は、そういうおとぎ話のような、理想の恋愛に憧れてるってことよ」

「……なるほど」

「さて、ここでアルに質問。イリヤの憧れてる恋愛はどんなもの？」

「え……」

指を突きつけられ、質問されてもアルにはその答えなどさっぱり思い浮かばない。そもそも、本人すら恋愛については超初心者なのだから当然か。

「えーっと」

「……思い浮かばない？」

「おう！ さっぱり！」

「そこを威張らない」

「……だがこれで、次に取るべき行動がハッキリしたな」

「そうね」

「え？ そうなのか？」

アルだけはまったく分かっていない様子で、きょとんとしていた。そんな彼の肩に、メルが手を置いて語りだす。

「じゃあアル。アンタに宿題を出すわ」

「しゅくだい？」

「そ。アンタが次にこなすべき課題よ。『イリヤと2人きりで話をする』……コレね」

「い……っ!？」

「出来るわよね？ 出来るでしょ？ っていうか、やりなさい」

「いやその……2人きりってというのは……その、恥ずかし」

「余計な恥は捨てる」

「うう……」

普段は前向きで猪突猛進な彼にとっては珍しく、えらく後ろ向きな威勢である。

「あのね。何もいきなり告白しろって言ってんじやないのよ？ ただの会話よ会話。意識せず、自然に話すればいいのよ」

「そうは言っても……」

アルはどうしても乗り気になれない。

片想いの時期によくある、相手への恥じらいと恐怖心であった。

「……………アンタこのままじゃ、イリヤに会うたびにオドオドして緊張して、一生まともに話せないわよ？ それでもいいの？」

「それは……………嫌だけど」

「2人きりになると話も出来ないような人間に、告白なんか出来ないわよ？ ハッキリ言って、告白して断られるよりもずっと、うん。比べられないほど情けないと思わない？」

「うん……………」

「とりあえず少しでもいいから話をしてみなさいな。そこで上手くいけば、さりげなくイリヤの好きな場所とかを聞いてみればいいのかよ」

「うん、うん……………」

彼女の言葉に、アルは少しずつ背中を推され始めていた。

恋心、女心 7

「……そうだな。まずは行動してみるべきだ。困ったことがあれば、メルに相談するといい」

「何言ってるの。そうになったら当然、アンタも相談に乗るのよ」

「古代書の解読が遅れる……」

やれやれとつぶやきながら眼鏡を押し上げるトーマも、まんざらではない様子である。

「とにかく、男でしょアンタ。だったら喧嘩上等、当たって砕けるよ。それで何かあったら、またこの3人で話し合えばいいでしょうっ」

「メル……」

2人の励ましに、アルは軽い感動を覚えた。

「サンキューな……島一番の猛獣女に、古代史バカだと思ってたけど、やっぱりお前らしいヤツだよ」

「……あ？」

「うん……やる！ 俺、やってみるよ！ 2人とも、ありがとな
！……」

メルの鉄拳が飛ぶよりも早く、奮起したアルはその場を走り去って行った。

「あ、ちよっ……誰が猛獣だゴラアアアアアッ！」

「……叫ぶのはいいが他所でやってくれ。耳鳴りがする」

「うるっさいわよこの古代史バカッ！」

「お前まで言うか……」

そんなやり取りをしている間に、村へと走るアルの影はどんどん小さくなり、ついには見えなくなる。相変わらずの走力であった。

「……まあ、ここでアンタと喧嘩してたっしょーがないわね。さっそく動くとしますか」

「……何か考えがあるのか？」

「もちろん。いくら周りをはっぱかけたって、アルだけじゃなかなか上手いこと行くわけないのは目に見えてるし……アタシらが色々と仕込んでやらないとね」

「それじゃあ僕は古代書の解読に戻……」

「アタシらって言ったでしょ……？ 一緒に来なさい。アンタにもやって欲しい作戦はあるんだから」

ひっそりとその場を去ろうとした彼の襟首を片手で掴み、ご機嫌な様子で引きずっていく。

当然ながら、トーマには拒否権など許されない。

「僕の日課がどんどん崩されていく……」

「別に明日すぐに死ぬわけじゃないでしょ。文句言わない」

2人もまた、トーマが通った道を歩き、彼らの村へと戻って行く。

約1時間後。

場所は村のはずれ、アルの家にて。

「……うーん」

人々の行き交う足音、笑い合う話し声、活気溢れる市場での掛け声が、家の中でも微かに聞こえている。

トーマとメルが村に着くより一足も二足も早く、アルは村に到着し、自宅へと戻っていた。

そして現在は自室に籠り、似合わない正座をしつつ唸っている最中であつた。

「むむう……」

彼は悩んでいた。滅多に使わない頭をフル回転させ、大いに悩んでいた。

先ほどの3人での作戦会議、もとい話し合いで『イリヤと会話をする。可能ならば、彼女の好きな場所などの情報を引き出す』とい

う、当面の目標は決定した。

決定はしたのだが。

「んんー……」

まさにそのことで彼は頭を悩ませていた。

イリヤのことを異性として意識していなかった頃は、ごく普通に会話が出来ていたと思う。

しかし最近は、彼女を前にすると緊張し、言葉に詰まり、その場から逃げ出したい衝動に駆られてしまうのだ。

ついさつきも、家に戻る途中で偶然彼女と顔を合わせた。

しかし、とつさに言葉が浮かばず、会話を始める前に「村長に呼ばれているから」と向こうから切り上げられ、やむなく別れてしまったばかり。

(「話でもしようぜ」って呼び出しに行けばいいのか……？ いや、でも。2人つきりになったとして、どんな話をすれば……)

変に意識し始めると、会話をするというのは難しい。

下手なことを口走って、彼女に幻滅されるというのは出来れば避けたいし、これといった話題も今のところはまったく思いつかない。

「……よしっー」

ここでアルは、1つの決断を下した。

「とりあえずメシにしようー」

普段使い慣れない頭を使うと、かなりのエネルギーが消費される
ものである。

色恋沙汰も大事だが、食い気も大事な年頃であった。

奇跡を見た者

「すみません。遅くなりました……」

イリヤは扉を開けつつ謝罪の言葉を口にし、室内に入るなり頭を下げた。

部屋の奥に置かれているソファーには、この家の主である村長が、いつもと同じ場所、杖を片手に腰掛けていた。

「ふおっふお……いいんじゃないよ。突然呼び出して悪かったの」

いつもと変わらぬシワだらけの穏やかな笑顔。

叱責の1つでもあるかと思ったが、どうやら怒っている訳ではなさそうだ。

「……失礼します」

後ろ手に扉を閉めてから、イリヤは村長とテーブルを間に向かい合う形でソファーに腰を下ろす。

「……どうかな？ 『祭^{サイ}』の準備は」

「あ、えっと……特に問題は無いみたいです。みんな頑張ってますから」

「それはええ。なにせ5年に1度じゃ……間に合わないという訳にはいかんからのう」

「そうですね……もうすぐですから」

『祭^{サイ}』。

この島で5年に1度だけ行われる、式典の呼び名である。

西暦が終わりを迎えた数百年前。

世界を包んだ戦火によって、空を厚い雲が覆い隠すようになった。

昼と夜の明るさの違いこそあれど、隙間無く漂う曇りによって、太陽の陽が差し込んだり月と星が瞬く空……『星空』を見上げる事は現在でもかなわない。

もとより、地上からでは人の手が届かぬ空である。

戦火によって文明のほとんどを失った人類に、もう1度雲の向こうの空を眺める方法はなかった。

そして人類が星空を失ったのと同時期に、この島では5年毎に祭という名の祈りの式典が行われるようになった。

もう1度人々が星空を眺められる日を願って貢物を用意し、祝い、天へと祈るのである。

「さてさて……今回の祭は、どうなるかのう」

「私も、もう一度あの空が見れ……あつ。す、すみません」

「いやいや。ワシは気にしておらんよ」

「……………」

「……口にはしなくなったが、まだ信じてはいるのじゃない」

「……はい」

西暦の終わりから今日まで雲は晴れず、祭を何度行おうと空がそれに応えることは無かった。

しかし、今から10年前。祭の日でもなく、いつもと変わらない夜のこと。

イリヤは偶然にも、その奇跡を目撃してしまった。

数百年ものあいだ、空を覆い隠していた雲に、ほんの少しの切れ目が生じた。

そしてたしかに雲の向こうには、伝承のおとぎ話にしか過ぎなかった星空があったのだ。

その日その夜、その奇跡を目撃したのは、この島ではイリヤと、彼女の両親だけ。

当然、イリヤはその目で見た奇跡を、島の大人達にも話した。

しかし、大人達のほとんどは、証拠もない幼い彼女の話を信じようとはしなかった。

ありふれた普通の日の夜に、そんな奇跡が起きるはずが無い、と寝ぼけて夢でも見たのだろうと嘲られ、不謹慎な嘘をついていると陰口を叩かれたりもした。

彼女がどれほど食い下がって語ろうが、それは変わらなかった。

だからいつしか彼女は、その奇跡を胸の中にしまい込み、声に出すことはなくなった。

一方で、彼女の証言は信憑性が低い噂話としては島中に広まり、彼女の体験は島の奇跡とされ、祭の時期になると密かに人々の間で語られることがある。

「私はまだ小さかったけど、あの夜のことは忘れられません……
それに」

島の奇跡で、星空が顔を覗かせたのは時間にすればほんの数分であろつ。

すでに皆が寝静まった後のであったこと、雲の切れ目が小さかったのもあって、島民たちの中でもそれを目撃できたのはイリヤと、イリヤの両親だけ。

「それに……お父さんやお母さんと見た……大切な思い出です」

「……ふむ」

イリヤの両親は、彼女と共に奇跡を目撃してすぐ、幼い彼女を残して帰らぬ人となってしまった。

この島の生まれではないイリヤは、他に身を寄せる親族も島にはおらず、現在まで島唯一の孤児院で生活してきた。

それでも彼女は誰を恨むことも、歪むことなく育ち、その優しさと親しみやすさから、今では島の誰からも好かれる少女となったのだ。

「お前さんのことはよく知つとるつもりじゃよ。両親に連れられ、この島に来た日から見とるからのう。じゃから……ワシにはお前さ

んが嘘をつくような娘だとはどうしても思えん」

「……………」

「しかし……島の者達にお前さんの話を信じると言うのも難しい
奇跡を見たのが今ではお前さんだけ。証明しようにも……の？」

「……いいんです。私の話を信じようとしてくれた人もいました
から……証拠なんて出せないから、私にはそれ以上どうすることも
出来ないですけど」

「……………」

「……村長？」

「む……すまんすまん。ちと考え事をな」

村長が咳払いを1つ。それが終わると、本題に入ると言わんばかりに姿勢を直した。

途端、そこまで厳しいものではないが、部屋の雰囲気もやや緊張感を含んだものへと変わった。

「実はお前さん呼びつけたのはのう……今度の祭についてなん
じゃが」

「祭……の？」

「うむ。その、なんじゃ。こんな話を、お前さんにするというのが
も気が引けるんじゃないが……島の大人達の話し合いで決まってるな」

村長は言葉を運びながら、心苦しいといった表情で、その言葉を口にした。

「お前さん……『祈りの神子』について、知っておるか？」

呼び出しの手紙 1

「……ねむい」

重たいまぶたを擦りながらアルは起床し、玄関へと向かう。

時刻は、昼より少し前。

島民たちの生活リズムからすればかなりの朝寝坊であったが、それも仕方ない。

なにせ彼は昨夜ほとんど眠れていないのである。

それもこれも、イリヤと会話をするという目標兼悩みのためであった。

眠い目をこすり、あごの骨が外れそうなほどの大あくびをかましつつ玄関先のポストの中を覗き込む。

「ん………?」

一応日課で確認しているとはいえ、いつもポストの中は空っぽなのがほとんどだが、今日は珍しいことに手紙らしき物がそこにあった。

「………なんだコレ」

手紙とはいっても差出人の名前は無く、紙を2つに折っただけの粗末な物。

(こんなことするのは……トーマかメルか？ あ、でもこれは……)

広げてみると、およそ読む人間の苦勞など考えていないであろうミミズが走ったような……はつきり言えば、とんでもなく汚い文字が羅列されていた。

書かれている文字の総量が少ないのがせめてもの救いだらう。

「この字はメルか……相変わらずひどい字だなあ。これじゃ暗号だっつーの」

書かれている文字を指でなぞってみたり手紙の角度を変えてみたりしながら、なんとかその暗号もといて手紙の内容が判明した。

「えーっと……今日の昼過ぎ、昨日話し合いをした古代の遺産横の丘まで来なさい……？」

文字の酷さはさておき、内容は呼び出し状だった。

そして手紙の内容を解読し終わるとほぼ同時に、昼になったことを告げる村の鐘の音が響く。

指定の時間までにあの場所まで行くとなると、走って向かうにしても今から出発しなければおそらく間に合わないだろう。

「はあ。しよーがない……帰ってからにするか」

せめてもう少し早く起きられれば食事を済ませてから悠々と出掛けられたのに、とアルは肩を落とした。

幸い、目覚めた直後で脳が空腹を感知していないらしい。

行つて話をして、帰つてくる間くらいはなんとかなるだろうと計算し、アルは呼び出しの手紙を片手に昨日の場所へと向かった。

それから走ること十数分。

アルは軽く息を弾ませながら遺産横の、丘の上へと到着した。だが辺りを見回しても、そこに呼び出した本人の姿はなかった。

(急がなくてもよかつたかな……)

アルは一息ついて草の上に腰を下ろし、そのまま仰向けに寝ころんだ。

頭上の白い雲はいつも何も変わらず、途切れることなく風に乘つて流れている。

眺め続けていても数分で飽きてしまう代わり映えない風景。彼はいつも通り横向きに姿勢を変え、空と交わる線まで果てしなく伸びる海を眺め始めた。

波間から見える魚群でも狙っているのか、白い鳥の群れが同じ場所を何度も旋回しながら上昇と下降を繰り返している。

無論なにを言っているのかは分からないが、仲間たちとの会話なのか甲高い鳴き声がこちらにまで聞こえてくる。

(…… 1匹くらいこっちに魚運んでくれないかな)

届くわけがない念を鳥たちに送っていると、彼の腹部から空腹を知らせる鈍い音が発生した。

「……ハラ減ったあ」

やはり起床してから胃に何も入れず、全力疾走をするべきではなかったとアルは軽く後悔した。

今からでは家まで引き返す余裕はないし、森の中で木の実でもつまむにしろ、ここからでは待ち合わせの時間を考えると行来の余裕はなさそうである。

慰めで空っぽの腹をさすってみるが、空腹の音が寂しそうに主張を続けるだけであった。

「メル……早く来てくれえ」

少々オーバーかもしれないが、飢えによる死期すら悟りかけたとき、草を踏みしめてこちらに近づいてくる足音が聞こえた。

アルは文句の1つでも浴びせてやろうと、起き上がりざま背後から近づいてきた人影に声をかける。

「メルう……呼び出しといて遅いぞ。もう俺、腹と背中がくつききそうで……っ!？」

しかし彼は、目の前の人物を確認すると驚愕した。それはもう、口から五臓六腑が軽々と飛び出そうなほどに。

「あれ？ アル……?」

メルだろうと思い込んでいた来訪者は、あるうことがイリヤであった。

彼女もまた、なぜアルがここにいるのか分からないという様子で、きよとんとしている。

「い、いいイリヤ……っ!？」

この状況は、彼が予想していた展開の遙か斜め上を行っていた。慌てふためき、何度か舌と唇を噛みながらも、彼は抱いた疑問を言葉にする。

「あ、あの。その……その、なんでイリヤがここに……？」

「私？ えつとね。朝起きたら、トーマからだと思っただけど手紙が届いてて……つと、これなんだけど」

そう言っただけでイリヤは服のポケットから紙切れを取り出す。

アルはそれを手にとって見せてもらうが、内容は彼が貰った物とほぼ同じく、この場所へこの時間での呼び出しを伝える手紙であった。

(これは……トーマの字だな)

唯一の違いがあるとすれば、それぞれの手紙を書いた人物が絶対に同一人物ではないと断言できるところだろう。

片方は大人が書いた字という印象を受ける、形の整った美しい字が並んでいる。

もう片方の手紙、アルが受け取った方は言わずもがな、紙の上でミミズの行進状態であった。

呼び出しの手紙 2

「でも……」

イリヤは手紙を手に、キョロキョロと辺りを見回す。

「トーマいないね……アルは何か聞いている？」

「いや。全つ然」

2人をここに呼び出した本人たちが現れる気配は、今のところ皆無であった。

「じつは俺も、同じようにメルから呼び出されてさ……」

アルもポケットから手紙を取り出し、イリヤに見せる。

「……ホントだ。イリヤの字だね」

「うん。急に呼び出して、何なんだろうな？」

「何なんだろうねえ？ 肝心の2人は来てないし……」

「……っ！」

穏やかな雰囲気の中で言葉を交わしていた2人であったが、唐突にアルが顔を真っ赤にしてイリヤに背を向けた。

「アル？ どうしたの？」

「うえっ！？ にゃ、なにが？」

「なんか急にあさっての方を向いちゃって……」

「い……いやいやいや！ なんでもないヨ！？」

「……？」

アルは動揺していることが感付かれないう、必死に取り繕うが、余計に不審だった。

何を急に慌てているのかというと、アルは今、重大な事実気付いてしまったからである。

（俺……イリヤと会話してる……！）

今更といった感じだが、アルにしてみれば無意識に行っていたことを自覚した瞬間である。

それはもう恥ずかしくて顔から火が出るような錯覚を覚えた。穴があつたら中に入り、上から蓋をして欲しいほどに。

（ま……まさか……！）

ついでにアルはもう一つの事にも気付いた。こちらは彼の中での推測であるが。

（トーマにメルのやつ……俺とイリヤが2人つきりで話が出るように、手紙を……？）

長年の付き合いである。

アルの性格も、彼がイリヤと2人つきりで会話など、いくら決心したからといってそう簡単に事が進むはずがないということくらい、トーマたちにはお見通しであろう。

そこで多少強引な方法ではあったが、トーマとメルは彼らを互いに手紙で呼び出すことで、無理矢理にでもアルとイリヤだけの状況を作り出したのだと思われる。

(ありがとう！ 2人とも……！)

アルはこの状況を察し、心の涙をこっそりと流していた。

もつとも、この後どう転がるかはアルの努力、もとい度胸次第とあったところだが。

(そ……そうと決めれば会話だ会話！)

「……アル？」

(とりあえずイリヤと会話……出来れば、好きな場所とかも聞き出すんだっとな……！)

「……アル？」

(っって言っても……どうやってそういう話にすればいいんだ……？
いきなり聞いてみるか？ いや……)

「アルうー？ おーい……」

(いや、いいんだ。おちつけ俺！ さっきまで普通に話してたん

だ。なんとかなる……はず！)

「もう……アルってば！」

「うおっ!？」

イリヤに耳元で叫ばれ、アルはようやく精神の世界から帰還した。

「あ……ごめん。声、大きかった？」

「い、いや。だい……じょうぶだけど……なに？」

本当は片耳がキンキンと響いていたが、やせ我慢した。

好意を寄せている相手を前にすると、人は少し強くなれるものがある。

「んもう、それはこっちが聞きたいよお。アルってば急にそっぽ向いたり、ブツブツつぶやいたり……」

「あ……ゴメン」

軽い瞑想状態に入っていたので自覚していなかったが、どうやら少しは声に出してしまっていたらしい。

(聴かれてはいないみたいだけど……気をつけないと)

「……あれ？」

「へ？ なに……が!？」

アルはまたしても心臓が止まりそうになった。

イリヤが突然すつとんきような声をあげたかと思うと、遠慮なくグイっとこちらの顔を覗き込んできたのだ。

もちろん、彼女との顔の距離に比例して、アルの頬は熱を帯びていく。

「え……あ……!？」

「ふむー……えいつ」

「……っ!？」

突然の出来事だった。

こちらの顔を至近距離で凝視したかと思うと、彼女のまるで絹のように繊細で柔らかな手のひらが、アルの額にピトッとあてられたのである。

「……ふむふむ」

「……っ!？」

イリヤが、自分に触れているー！。

そのことを頭が理解し終える前に、身体の方が状況を把握したらしい。

アルは両手足をバタバタと滅茶苦茶に動かし、さながらひるがえって逃げる猫のように、瞬時にイリヤから数メートルの距離を取った。

「……やっぱり……」

もしも彼女が狙ってやっているとしたら、なんとえげつなく、嬉
恥ずかしい攻撃か。

すでにアルの顔はリンゴのように赤く、暖炉のように熱くなって
いた。もはや爆発寸前である。

「……………アル？」

「は！？ はひっ！？」

既に舌すらまともに戻っていない。

しかし、ペース乱されまくりのアルに対して、イリヤは相変わら
ずのマイペースぶりを存分に発揮していく。

「もしかして具合悪いの？」

「……………へ？」

イリヤとの会話は先が予想できないと、彼女の周りの人間はよく
言う。

あくまで喻えだが、ジャンケンで何を出してくるのかと予想して
いたら、足を出してきたとか……………分かりにくい喻えかもしれないが、
まあそつうい感じだ。

「顔がなんか赤いし、すつごく熱かったよ。カゼ気味なの？」

「……………」

顔が赤くなっているのはあなたといるせいだし、すつごく熱くな
ったのは、あなたが急に顔を近づけて来たからです……………とアルは口
にしかかったが、飲み込んだ。

「い、いや！ ぜ……全っ然！？ この通りピンピンしてるし！」

「大丈夫ならいいけど……具合が悪いなら、無理しちゃダメだよ？」

「……はい」

まるで姉弟のような内容。2人の会話は、そこで止まってしまった。

草花を撫でる風の音だけが、虚しく響いている。

呼び出しの手紙 3

お互いに声をかけない、無言の時間が過ぎていく。

それはほんの数分であったかもしれないが、当のアルにはその何倍にも感じられた。

もちろん、何か話さなければという意識はあったが、次に口にするべき言葉が出てこない。

(まいった……どうすりゃいいんだろう)

「あつ……船だあ」

海の方を眺めていたイリヤが、目に入ったものを何気なくつぶやく。

彼女の視線の先を辿ると、たしかに遙か向こうからこの島に向かって来ているらしい、木造の帆船が目に入った。

今まで何度も目になっている船だ。おそらく今回も、島への交易のためにはるばるやって来たのだろう。

(……これだ！)

海と船を眺めていると、アルの頭に妙案が閃いた。

その瞬間だけは「海さんありがとう。船さんありがとう」と、感謝の言葉を心の中で述べた。

「な……なあ、イリヤ？」

「なあに？」

もはや彼女の顔を直視するのすら厳しかったのだが、なんとか自分を奮い立たせ、顔を背けないようにして声をかけた。

「その……しばらく海でも見てないか？ ……なんて」

「……？ 今、見てるよ？」

「あっ、はい……」

(しくじったあああああっ！)

普段の彼ならば絶対に口にしないであろうキザな台詞であったが、彼女にはまったく効果がなかったどころか、自爆という結果である。

恥ずかしさと、八方塞がりな雰囲気からすぐにでもその場を逃げ出したい衝動に駆られる。

それでもアルはさらに自分を奮い立たせ、その場に留まって次の言葉を必死に探していた。

というのも、ここで逃げてしまっただけは何も変わらない。

そして、自分だけでは到底作れなかったであろう、イリヤとの2人きりの時間という現状を作り出してくれたメルとトーマ。

親友の2人に対して、こんなところで自ら諦めてしまっただけは申し訳が立たないと思ったからである。

(おちけつ……違う！ 落ち着け俺！)

「その、そうなんだけど……どうせ見るなら、座ってみたら？」

って思ってたさ……トーマたちもまだ来ないみたいだし」

イリヤがずっと立っているのを見て、深く考えずとっさに思いついた文句であったが、彼にしては珍しくその場の空気を読んだ声かけであった。

「うーん……そうだね。じゃあ、遠慮なく」

座っているアルの横に、イリヤも腰を下ろす。

互いの距離は手を伸ばせば届くという自然な、かつベストな位置関係である。もちろん狙ったものではなかったが。

とりあえずイリヤとの会話を引き延ばし、気まずい雰囲気を脱することには成功したようである。

アルは胸の中でガツポーズをした。

もちろん、横を向けばイリヤの顔がすぐそこにあるという状況は尋常ではないほど緊張するが、ここまできたら耐えるしかなかった。

「……あれって、いつもの船だよな？」

アルは緊張が表に出ないように必死に冷静さを装いながら、イリヤに話しかける。

土壇場で力が発揮されたのか、自分でも驚くほど自然に話しかけることが出来たと感じた。

「うん。いつもの商船だと思うよ」

この島と取引をしている船は、いつも海の間……この島からでは見えないほど遠くの国からやって来る。大きな船体に、大量の品物を積んで。

肉や野菜に穀物などの食料、この島では採れない香辛料や、珍し

いお酒。

はたまた、海の方この国の衣類や、子どもが喜ぶ甘いお菓子におもちやまで取り扱っている。

海の方この国との交易が始まったおかげでこの島は昔に比べれば豊かになったらしいが、それはまだアルたちが生まれる前の、遠い昔の話らしい。

「……この前来たばかりじゃなかったっけ？」

「うーん……あ、ほら。もうすぐ祭^{サイ}があるから、きっとそれに向けてだよ」

ああなるほど。とアルは納得した。なにしろ祭は、この島の住人たちにとって一大事なのである。

5年に1度しか行われないうこともあり、その日は島中の人間が総出で参加し、他のことは忘れ、夜通しで飲んで歌って騒ぐ。

ただしアル自身は、この式典の終わりまで参加し通したことは1度もなかった。

彼にとって初めての祭は0歳の時。参加したかどうかという記憶すらない。

前回の祭の時は既に物心ついてはいたが、この時参加した『祭』に関して、途中からの記憶が吹き飛んでいた。

「アル……今年はお酒、飲んじゃダメだよ？」

イリヤは前回のアルの姿を思い出し、笑いながら忠告する。

「あ……あれはメルがいけないんだって」

前回の祭、その宴の途中で、アルは突然目を回して倒れた。かき込んでいた食べ物に詰まり、飲み物を欲していた彼に、メルから強烈なアルコール度数を誇る酒が手渡されたのである。窒息寸前だった彼は確認もせず無我夢中でその酒を一気飲みし、そのまま気を失ってしまった。

イリヤたちが家まで運んでくれたらしいが、もちろんその時の記憶はない。

メルの仕掛けたとんでもないイタズラのおかげで、翌日の昼に目覚めた時、すでに祭は終わってしまった。そのうえ、ひどい二日酔いに悩まされる羽目になった。

「あれはひどかったぜ……頭痛いし、気持ち悪くて目はまわるし、いつのまにか祭は終わってるし」

当時を思い出し、アルは軽く身震いした。

（そっか……アル、祭を最後まで見たことないんだ）

あの時、祭の終わりまで参加していたイリヤたちと違い、アルは祭の前半部分しか知らない。

だからおそらく彼にとって、祭とはただの楽しい宴といった認識なのだろうとイリヤは思った。

そして、そのままの方がいいのかもしれない、とも。

（……黙ってても、今度の祭で分かるもんね）

彼女にとってみれば……いや、トーマやメルも同じだろう。

祭の終わりに何かがあるのかを知った者、知っている者からすれば、それを考えるとどうしても気が重くなる。

イリヤにとって、今年の祭は特にそうだった。

「ねえ……アル」

だから彼女はアルに話しかける。

この場所で静寂を相手にしていると、どうしてもその事ばかり考えてしまいそうだったから。

「ん？」

「この丘……ここにね、私よく来るんだけど、知ってた？」

思い出の丘 1

「え……いや」

アルにとって、それは初耳だった。

そういえば時折、用事で出掛けた訳でもないイリヤの姿が見えないことがあったが、あれはこの場所に来ていたからなのか。

「私、ここが好きなんだ」

アルにとってみれば、予想していなかった突然の朗報である。

どうやって聞き出せばいいのかと悩んでいた質問に対する答えを、彼女の方から教えてくれたのだから。

「そ、そーなのかつ」

「うん。小さな時からね、暇な時によく来てるんだ……ここが好きだから」

言った。そして、聞いた。

彼女は「この場所が好きだ」と、たしかにそう言ったのだ。アルは思わず、小躍りしてしまいたいような気持ちになった。

助けがあったおかげとはいえ、イリヤとこうして会話が出来る、おまけに目標であった彼女の好きな場所まで聞き出せた。メルヤトママも、納得の大成ぶりだろう。

しかしアルの頭の中に、1つだけ疑問が浮かんだ。

「……………」

なぜイリヤは、悲しそうなのだろうと。

彼女はたしかに、ここが好きなの場所だと言った。小さな頃から、暇があれば通うほどの。

であれば、なぜそれを言葉にした彼女は、悲しい顔をしているのだろうか、と。

「……………どうしてなんだ？」

「え？」

「いや……………なんでイリヤは、ここが好きなのかなあって」

「……………うーん」

アルの質問に、イリヤは顔を彼の方に向けたが、質問の答えを考えているのか言葉に詰まり、再び海の方を眺めてしまった。

「……………あれか？ 海が見えるから？」

「ううん。海だったら、ちょっとの高さがあれば島のいろんな所から見えるよ」

イリヤは微笑んで返してくれたが、アルは悩んだ。悩んだ末、偶然視界に入ったソレが目にと留まった。

「わかった！ あれを見に来てるんだ。だろ？」

アルはそう言って立ち上がり、隣の丘にそびえる古代の遺産を指

差す。

自信のあった答えだったが、静かに首を横に振るイリヤの様子を見ると、どうやら不正解らしい。

「私、あれにはあんまり興味ないかな……こんなこと言ったら、村長とかに怒られちゃいそうだけどね」

軽く舌を出し、いたずらっぽく笑うイリヤ。

アルはしっかりと、今の発言を心の中に刻み込んだ。

(イリヤはあまり遺産に興味なし……と)

自信満々で思わず立ち上がってしまったアルだったが、とりあえず座り直した。

「んじゃあ、イリヤは何しにここに来てるんだ？」

「私は……」

イリヤは何か言いかけて、口を紡ぐ。その小さな唇が静かに動き出すまでには、少しの時間が必要だった。

「……アルは、星空ほしぞらって信じてる？」

彼女から尋ね返された内容についてアルの頭が理解するのにもまた、しばしの時間が必要となった。

「……ほしぞら？」

「うん」

「そりゃあ、話なら聞いたことはあるけど」

「信じては……いない？」

「……どーだろ」

村の大人達からも、メルやトーマからも聞いたことはある。昼は現れず、夜にしか見ることの出来ない空の名前らしい。

真つ暗な夜空に、『星』^{ほし}という光が数え切れないほど散らばって。実際に自分の目で見たことは無いが、それはそれは綺麗な景色なんだそうだ。

「嘘だつて言うつもりはないけど、本当なのはちょっと怪しいかなーって思ってる」

「そうだよね……」

(そりゃあ、ホントにそんなものがあるんなら、いつペン見てみたいけどさ……)

「星空……か」

アルはそうつぶやいて仰向けになり、空を見上げた。

いつもと変わらず、ただ白い雲が隙間なく流れているだけである。物心付いたときからほとんど毎日家の外に出ている、この雲が晴れた瞬間など見たことがない。

「……イリヤは信じてるのか？」

アルも彼女に尋ね返してみた。

島の大人達の中には、おとぎ話に近い星空の存在を妄信してお祈りやらの熱心な者も少なからずいたが、彼女はそういった感じには見えない。

というか、彼女のそんな姿は見たことがない。もちろん、アルにとつて見たことがないというだけだが。

「信じてるっていうか……待ってるんだ。私」

「待ってる……？」

アルはキョロキョロと周囲を見渡す。

相変わらず彼ら以外に人の気配は無い。

「トーマたちじゃなくて誰か来るのか？」

「ふふっ……誰かを待ってるんじゃないよ」

アルらしい反応にイリヤは微笑みを見せ、再び曇天を見上げる。

「私は星空を待ってるの」

「……へ？」

呆気にとられ、ぼかんと口を開くアル。

イリヤは空を見つめたまま、話を続けた。

「嘘だと思つかもしれないけど……私、星空を見たことあるんだよっ。」

「えっ……」

「まだほんの小さい頃のことなんだけど……私のお父さんもお母さんがまだ元気だった頃に、1度だけね」

イリヤは幼い頃に両親を亡くしている。

彼らがまだ健在だった頃ということは、今から10年以上前のことになる。

「あっ……もしかして、あの噂って……」

「そう。10年前の、ね」

島民達の間で静かに語り継がれている、この島の奇跡。

それは今から10年前。

この島の上空で、それまで1度も変わることもなかった曇天が僅かに晴れ、星空が顔を覗かせたというにわかには信じ難い噂。

その現象が起きた時間が夜更けということもあり、目撃した者はいないという話だったが。

「イリヤ……見たのか!？」

「うん……お父さんとお母さんと。3人で」

イリヤは見上げていた視線を地へと落とし、思い出を懐かしむように足元の草に手をあてる。

「この丘で見たんだ……私は小さかったけど、今でもよく覚えているよ」

「……」

そういうことだったのかと、アルは納得した。
彼女にとってここは島の中でも特に好きな場所であり、今は亡き
彼女の両親との、大切な思い出の場所なのだ。

思い出の丘 2

イリヤの両親が亡くなったのは、10年前。
一夜限りの奇跡が起きてから、すぐのこと。

物心がついてすぐに両親とは永遠の別れとなってしまった彼女にとって、親と過ごした思い出は、決して多くはないはずである。

だからこそ、彼女はこの丘の上で見た『星空』を今でも忘れず、この場所に通っているのだろう。

両親との、数少ない思い出の場所だから。

「なあイリヤ……星空ってさ、どんなのなんだ？」

小さな頃から何度も耳にしているとはいえ、そのほとんどは信憑性の低い噂である。

話をする相手によって内容も相違点があるし、聞いたとしても頭の中で正確に想像することは容易ではない。

しかし目の前にいる少女は、自分の目で見たという。

彼女にとってももしかしたらツライ思い出なのかもしれないと思っただが、少年の心に湧き上がって来た好奇心には勝てなかった。

「そうだねえ……なんて言ったらいいのかな」

「やっぱりさ、キレイだったのか？」

「うんっ！ すごいんだよ？ こう……まっくらな空に、光の粒

がバァーっとながって……」

彼女は身振り手振りを交えながら、自分が見たあの夜の奇跡をアルに語る。

噂でしかその存在を知らず、空想のものでしかなかったものの、実際の目撃談を聞くのはアルにとって初めてである。

彼女の話聞いたところで、未だ頭の中で想像するしかなかったが、それでもそれまでよりはずっと信憑性があったし、段違いに興味湧いた。

「あーあ……やっぱり、うまく言えないなあ……」

イリヤはあの夜の衝撃を懸命に伝えようとしたが、言葉だけでは伝えきれないもどかしさを悔しがった。

「いや……でも、スゴかったっていうのは聞いてるだけで分かるよ」

「うん。やっぱり、あのすごさは話すだけじゃ伝わらないよ……自分の目で見たら、きっとアルもビックリすると思う」

「そんなに？」

「うんうん。そんなにだよ。なんて言うかなあ……スゴ過ぎて、全身の力が抜けちゃうって感じかなあ」

「そうなのか……」

アルは再び空を見上げる。

先ほどと変わらぬ曇天。雲が晴れる様子は皆無だった。

「……見てみたいなあ」

彼はもう、イリヤとの会話をほとんど意識していなかった。彼の関心は、彼女が話してくれた雲の向こう側へと移っていたからだ。

「……今年の祭で、見れるといいね」

イリヤは、アルが気付かない程度の声量で、まるで他人事のようにぼつりつぶやいた。

「なあ、イリヤ」

「なに？」

「祭ってさ……星空が見れますようになってお祈りするためにやるんだろ？」

「うん。アルは前の祭を最後まで見てなかったから知らないだろうけど、島の人まで「雲が晴れてくれるように、星空がもう一度見れるように」って、空にお祈りするんだよ」

島のほぼ中央にある広場。

普段は子ども達の遊び場として、また、大人達の集会の場として使われているその広場が、祭の会場となる。

今この瞬間も手の空いている者達は広場に集まって会場の準備、祈りのための祭壇を用意したりと大忙しだ。

「雲、晴れるといいなあ……」

「ふふっ……アルも星空が見たくなつた？」

「ああ！ スツゲエ見てみたい……楽しみだなあ」

「……じゃあ、アルも準備を少しは手伝わなきゃダメだよ？ たまには顔を出せって、村長も言ってたし」

「うーん……それは面倒」

「もうっ。ちゃんとやらないと、空だって応えてくれないよ？」

「……はい」

まるで母と子のやりとりのような会話。2人は自然に笑った。なんの気恥ずかしさも、緊張もなく、ただ純粹に。

夢を見つけたらしい、凜とした表情で空を見上げるアルの横顔をイリヤは気付かれないように眺め、そして同じように視線を空へ向けた。

目を閉じれば今でも思い出せる、幼少の頃に両親とこの場所から見上げた星空。

雲の隙間から覗いたその景色は小さく、しかしとても美しく、あの日からずっとイリヤの心に残っている。

もしもあの星空が、この空いっぱい広がったのなら、それはどれほど感動的なものだろうか。

想像しただけでも感慨深いものがある。

「私も……見たいな」

彼女はつぶやいた。

小さな、小さな声で。

「……………」

「え？」

それは、すぐ隣にいるアルが思わず聞き返してしまつほどの、小さな、とても小さなつぶやき。

「んーん。なんでもない」

彼女は答えず、穏やかな微笑みを見せる。

それを見たアルの頬は赤く染まり、その鼓動はまた高鳴るのだった。

アルが、イリヤと丘の上で会話をした翌日。

彼は、おそらく今日もトーマが籠もっているであろう、例の地下室へと息を弾ませながらやって来た。

「トオー……マッ！」

「ぐっ！？」

アルは勢いよく地下室の扉を押し開けた。

「なあなあトーマッ！……って、ありゃ？」

しかし室内を見渡してもトーマの姿はなかった。部屋の中央にある机の上にはローソクが灯されているのだが。

「いないのか……でもさっき、トーマの声が聞こえたような……」
「？」

「ぐ……っ」

たしかに部屋のどこからか、トーマの声が聞こえる。
なぜか苦しそうな声であるが。

「あ、やっぱりいるんじゃない。おーい！ トーマめっ？」

「ぐ……なん……だ？」

「おつかしいなあ……声はするのに」

アルは扉の取っ手から手を離し、室内へ踏み込む。

すると目一杯開かれていた扉が徐々に戻り、壁に押しつけられていたトーマがのっそりと現れた。

「なんだ。そんなどこにいたのか」

「アル、頼むから扉はゆっくり開ける……それからいつも言っているが、入る前にノックをしろ」

トレードマークのメガネこそ無事だったものの、その鼻頭と額には扉とぶつかった痕が赤々と残っていた。

「わりいわりい……そんなことよりもさ！」

「そんなこととはなんだ！　メガネが割れてもおかしくない衝撃だったんだぞ！」

「だから悪かったって……それよりもさ！」

「……わかったわかった。お前に反省なんて求めた僕が馬鹿だった……それで？」

「見つけたんだ！　見つけたんだよ！　イリヤの好きな場所！」

アルのはしゃぎようから察するに、昨日メルと共に仕向けた「2人つきりで会話させようドキドキ大作戦」は、おそろくうまくいっ

たのだろつなとトーマは察した。

無論、ひどいセンスの作戦名はメルによるものである。

「それはよかったな……じゃ、僕は調べものに戻る」

「ちよちよちよつ……そう言わず、ちよつと聞いてくれて。トーマに相談したいことがあるからココに来たんだ」

蜘蛛が獲物の動きを封じるかのように、アルはほとんどおんぶの体勢でがっしりとトーマにくっついた。

「……わかったからしがみつくのはやめろ。動けん」

トーマが仕方なく承諾し、アルはようやくトーマから身体を離す。

「助かるぜー。やっぱり持つべきものは友達だな」

「お前といいメルといい、どうしてこう無理矢理に僕を……」

「それで、相談なんだけどさっ」

「……そうだな。お前達はそういう奴だな」

今さらだなど、トーマは小さくため息をつく。

「なにぶつぶつ言ってんだ？」

「気にしないだろうが気にするな……」

トーマはメガネのズレを中指で直し、改めてアルと向き合った。

「いつたいなんだ？ イリヤと会話するのはうまくいったんだろ？」

「ああ！ 緊張したけど、バッチリ！」

「ならいいじゃないか。後はお前の行動次第だろう？」

「いや、そこからなんだって……たしかにイリヤの好きな場所も聞けたけど、問題があるんだって」

「なんなんだ一体。恋愛を進める上での相談なら、僕よりメルの方が詳しいようだからそっちに……」

「いや。こっちのはトーマの方がわかりそうだ」

「……僕の方が？」

アルはどう言葉にしていいか迷った様子でしばし悩み、唐突に質問した。

「なあトーマ。星空ってどうすれば見えるんだ？」

「……は？」

トーマは信じられぬものを見たように言葉を失い、啞然とした。

アルの口から発せられた質問は、微塵も予想していなかったもの。加えて、アルが興味を示すことはないと思っていた分野である。

「アル……どうしたんだ。風邪でもひいて、おかしい頭が更におかしくなったのか？」

「な、なんだよつ。失礼だな……俺は元気だし、頭もおかしくな
んかないつての」

「ああ……そう言えば古代書に『ナントカは風邪をひかない』と
いう言葉が」

「俺は真剣に話してるんだつての！」

「……お前の口から出た質問が、とても真剣とは思えないからだ」

「だから、星空だよ。ホ・シ・ゾ・ラ！ どうやったら見れるん
だ？」

アルがなぜこんな質問をするのか、トーマには理解できなかった。
古代の歴史が終わって星空が姿を消し、数百年。

近く催される祭もそうだが、人々が神に祈るほど切望し、しかし
実際に見ることは叶わず今日まで過ぎているというのに。

「一応聞いておくが……お前、星空について知ってるのか？」

「ああ！ 雲の向こうにある空のことだろ？」

（アルのことだから、とんでもない答えが返ってくるのかと思っ
たが……最低限の常識くらいは身についているみたいだな）

「あ。今お前、俺のことバカにしただろ」

「べつに……」

以外と洞察力はあるようだ。いや、アルのことだから、直感とい
うか野生の勘というやつか。

「ほら。目えそらした」

「どうでもいいだろう……それよりも、急にどうしたんだ。星空
だなんて。お前は興味など持たないと思っていたが」

「それが……その」

アルは思い出したように少し赤面し、両手の人差し指をモジモジ
させながら話し出した。

「そのー。イリヤとは話も出来たし、あいつの好きな場所も聞け
ただけど……なんていうか、だからというか」

「メルの言う通りに進めるんなら、あとはお前が聞いたイリヤの
好きな場所とやらで告白すればいいだけじゃないか……」

「だからその、足りないんだよ……うん。足りないんだ。イリヤ
の好きな場所にというか、好きな場所を作るのに、足りないもの
があるんだ」

「足りないもの……?」

「うん。星空が足りない」

「……とりあえず1から説明してもらっていいか」

アルは時折赤面と悶絶を交えつつ、昨日のイリヤとの会話をトーマに説明した。

イリヤにとってあの丘は思い出の場所で、幼少の頃から何度も通っていること。

彼女が両親と星空を目撃した、10年前の奇跡のこと。

彼女の好きな場所は、奇跡を目撃したあの丘の上だが、彼女は星空をもう一度見たいと願っていること。

「なるほど……イリヤの好きな場所はあの丘の上だが、彼女が本当に望んでいるのは、星空が見えるあの丘の上という訳か……」

「ああ……それで、なんとかあいつに星空を見せてやれないかなあつて思ってた」

「……………」

トーマは顎に手をあてて考えた。

彼も10年前の奇跡については興味があつたし、調べもした。

そして彼が解読を進めている古代書にも星空についての記述があったことは記憶しているが。

「つまりお前は、あの丘の上でイリヤに星空を見せながら告白したいと」

「う、うん……俺も、イリヤから話を聞いて見てみたくなっただし、あいつが喜ぶだろうし」

「そうか」

これ以上興味はないと言うかのように、トーマはアルに背を向け、部屋の中央のテーブルへと向かった。

「結論から言おう……無理だな」

背中越しにそう言い切ると、いつも通りに本棚から古代書を選定し、日課である解読作業の準備を始めた。

「そっか……って、早っ!?! 即答かよ!?! もうちょっと考えてくれよ!」

「考えたから言ってるんだ……」

トーマはアルとの会話は続けながら机につき、古代書のページをめくり始める。

「現実的に考えてみる。星空が消えて数百年……おそらく世界中で研究されているだろうが、それほどの期間があっても、星空を見

るための方法は解明されていないんだぞ」

「……でも10年前にイリヤが見てるじゃんか」

「だから奇跡だと言っただ。彼女の話嘘だと言っつもりは僕にはないが、本当に起こった事だとしたらなおさらだ。長い歴史の中でこれまで起きなかった奇跡が、短期間にそう何度も起きると思えない」

「奇跡が起きるのを待つんじゃないで、起こしたいんだよ。だからトーマなら、何か方法を知らないかなって……」

「そんなもの、僕が知っていたらとっくに実践してるか、世界中に向けて発表してるさ……諦めるんだな」

「むうー……」

トーマになんと言われようが、アルは諦めきれないといった様子で、何か方法はないかと考え込んでいた。

一方トーマは、これで諦めがつくだろうと思いい、解読作業に集中し始めていた。

「……あつ!? そうか……そうだ!」

いつものことながら、アルの唐突な大声がトーマの集中力に水を差した。

「……なんなんだ今度は」

アルはにやにやと笑みをこぼしながら、トーマの元へと近づいて

来た。

「にゃはは……なあトーマ。聞きたいことがあるんだけどなー？」

「……はあ」

トーマはまた小さなため息をこぼし、仕方なく聞き返してやった。

「今度は何だ？」

「あのみ。雲って……固いのか？」

「……は？」

アルの口から出た2つ目の質問は、これまた訳が分からなかった。

「……念のため言うておくが、食べられないぞ？」

「食べねえよっ！ どういう受け止め方だよそれ！」

「なら一体どういう考え方をすれば、雲は固いのかなんてとんでもない質問が飛び出すんだ」

「にしし……考えたんだけどさ。そんで、思いついたんだけどさ」

アルは瞳の奥をキラキラとさせ、自信満々に自身の至った結論を発表した。

「雲をどかすんだよー！」

「……はあ？」

またしてもな予想外の質問に、トーマは再び啞然とした。

「だからさ、雲をなんとかしてどかせばいいんだよ！ 星空って雲の向こうに隠れてるんだろ？ だったら、その雲をなんとかしてどかせば……」

「そついうことが……」

トーマは呆れたが、実際アルの意見は的を射ている。

星空は見えなくなってしまうたが、消えてしまった訳ではない。雲の向こうに、たしかに存在してはいるのだ。

しかし問題は、古代の終わりから数百年も空を隙間なく覆い尽くしているあの雲を、どうやってどかすのかということなのだ。

「まあその考え方は間違っではないが……どかすことが出来ると思ってるのか？」

「壁みたいに固いんだったら、ぶっ壊せばいいと思うんだけど……柔らかければ、どかしやすいだろうし」

(コイツは……)

トーマは軽い頭痛を覚えた。

しかしアルの様子からして、ある程度納得のいく答え方をしなければこの話は終わらないだろうと思いい、今までに彼が古代書から得た知識を教えることにした。

「もちろん触ったことなどないが……おそらく固くはないだろう。風で形が変わるほどだからな」

「あ……そっか。そういえば風で流されるもんな」

「雲というのはな、水とゴミの集まりだ」

「うえっ!?! あれってゴミだったのか? 真っ白なのに?」

「ゴミという言い方は適切ではないかもしれないが……あれは空气中に浮かぶ水分と塵やホコリが合わさったものだ。温かいものからは湯気が出るだろう? あれの密度が濃くなったものだと思えばいい」

「湯気みたいなもんなのか……」

「お前みたいなバカでも理解出来るように、ものすごく簡単に言えばそうだ。雲は集まっているから個体に見えるが、実際には掴めたりはしないんだ」

「なんか言い方が引つ掛かるけど……ってことは、持ち運んだり出来ないのか……」

掴んだり運んだりする以前にどうやってあそこまで手を届かせるんだとトーマは思ったが、そこはスルーした。

「……だからその場からどけるのに力はいらないはずだ。床に溜まったホコリと一緒にだから、箒で掃けば動くし、吹けば飛んでその下の床が見えるだろう?」

アルはうんうんと頷くと、何を納得したのか突然踵を返し、部屋の扉へ走り出した。

「……今度はなんだ急に」

「サンキューっ！ トーマのおかげで、どうすればいいのかわかった気がする……！ じゃなー！」

外れるのではないかという勢いで扉を開け、アルは地下室から猛然と走り去っていった。

「……なにをする気だアイツは」

扉は全力で壁に当たって跳ね返り、7割ほど閉まりかかったところで止まった。

「……まったく。開けたら閉めるといつも言っているだろうに」

無視することも考えたが彼の几帳面な性格がそれを許せず、やれやれと閉まりかけの扉に近付いたのがいけなかった。

「トーマー！」

「ぶっ！？」

今度はメルが勢いよく来室し、アルの時と同じように開け放たれた扉がトーマの顔面に激突した。

「大変なのよ！ ビッグニュース……ってあれ？ もしかしなくてもぶっかった？」

「お……お前たちはあ……」

「いやーゴメンゴメン。急いでたからさあ」

鼻を押さえつつ、トーマは怒りを露わにした。鼻血こそ出ていなかったが、それでもかなり痛い。

「……頼むから2人とも扉をノックしてゆっくり開ける癖をだな」

「っていつかそんなことよりも大変なんだって！」

「そしてたまには僕の忠告を気にするようにしてくれ……」

「そんなイジイジしてる場合じゃないって！ イリヤが大変なんだって！」

「はあ……もういい。それでイリヤがどうした？」

「アタシもついさっき、大人達から聞いたんだけど……」

メルは駆けつけた後の呼吸が整うのを待ってから、彼らにとって衝撃の事実を口にした。

「イリヤが今年の祭で、祈りの神子いのに選ばれたんだって……」

その翌日。

隠れ家近くの森の中で、自分の体よりも大きな梯子を運ぶアルの姿があった。

「よ……つと」

木々が開けた場所に梯子を置く。そこには今アルが運んできた以外にも、大量の梯子と箒が積まれていた。

「ふいー。こんなもんかな？」

いくつ運んだのかは最初から数えていない。目の前に積まれている梯子と箒は、これで十分な気もするし、全然足りていない気もした。

「もうちょっと集めるか……たしか靴屋のオッサンのところにも二本はあったはず」

アルが引き返そうとしたとき、誰かが来たのかすぐ近くで草を踏みしめる音が聞こえた。

「……………」

「アル。隠れなくていい。僕だ」

木々の間から姿を現したのは彼の親友、トーマだった。

「なんだ、トーマか。ビックリさせんなよ……」

ぼやきながらアルは木から滑り降りる。

草の音を聞き拾った後の一瞬で、アルは手近な木のほぼ頂上まで駆け上っていた。

「これが原因か……島中大騒ぎだったぞ。梯子と箒が無くなった」と

「へへ……貸してくれって言ってもダメだったから、こっそり持ってきたんだ」

そこに積み残されている大量の梯子と箒は、アルが村の家という家からかき集めた物だった。彼の言う通り無許可で。

「どうせアルが犯人だろうと大人達は皆怒り心頭だったがな……」

「だってさー、使ったらすぐ返すって言っただのに貸してくれなかったんだぜ？」

「……だろうな。時期が時期だ」

「おう。だから断られないように、こっそり借りてきた！」

「……お前も懲りないな」

アルの要望は普段なら許されたかもしれないが、時期が悪かった。なにせ祭まであと数日である。

準備の仕上げに入っている村の大人達にとって、祭の支度で使う梯子も箒も、はいそうですかと簡単に貸すわけにはいかない。

「なあトーマ、暇なら手伝ってくれよ。1人だと時間掛かりそうだし」

「……悪いが、そんな暇はない」

作業を再開しようとしたアルの誘いは、突き放すように一蹴された。

「ちえっ……冷たいなあ。だったら何しに来たんだよ?」

振り向いたアルの目に映ったトーマの表情は硬く、ふざけてここに来たのではないことが読み取れる。

「……大事な話がある。地下室まで来てくれ」

「話……? お、おい、トーマ?」

彼は時間が惜しいとばかりに、用件だけ伝えたと例の地下室に向かって歩き出した。

「急になんなんだよ? 話なら、ここで……」

アルが追いつき、声をかけてもトーマは足を止めようとはしない。

「なあ、トーマってば」

「……メルも地下室で待っている」

「メルも?」

「……僕たち2人から、お前に話があるということだ」

トーマは振り向きもせず、淡々と状況を口にして歩を進める。

アルは彼の様子を不思議に思いながら、その後について行った。

アルはトーマに連れられ、いつもと変わらぬ地下室へ。

室内では、メルが椅子に腰掛けて2人の到着を待っていた。

「よっ！　メル」

「……けっこう早かったわね。もっと掛かるかと思ってたけど」

「……村にはいないと分かっていたからな。探しやすかったし、運が良かった」

「……ってことは、村が騒がしかったのは……」

「ああ。やはりコイツが犯人だった。島中の梯子と、箒を勝手に持ち出したらしい」

「……はあ。やっぱりか」

「なんだよ……そりゃ、黙って持ってたけど……ちゃんと使い終わったら返すって」

「そういう問題じゃないでしょうに……だいたい、そんなに梯子と箒を集めて何に使ったつもりだったのよ」

「何って……雲をどかさんだよ」

「雲つて……空そらにある、あの雲？」

「ああ！ 雲が邪魔で、星空が見えないんだろ？ だから梯子と箒を繋げて、雲をどかすんだ！」

アルは、まさに少年のように目を輝かせながら己が導いた方法を論じる。

「雲をどかすつて……あんたねえ」

彼の話す方法を聞いたメルは、さすがに呆れた。トーマから知識を得ていた彼女は、それが不可能としか言えないことを知っていたから。

アルの言う『大量の箒と梯子を繋げて、空の雲を掃う』という非現実的な方法に対して、さすがにトーマも口をはさんだ。

「アル……悪いことは言わない。やめておけ」

「な、なんだよ2人して……やってみなくちゃ……」

「わかるわよ」

メルはびしやりとアルの言葉を遮った。

そして諭すように、トーマは自身がこれまでに得た『空』に関する知識をアルに語った。

空がどれほど遠くにあるのかということ。

それは人の手が到底届くものではないということ。

そのため、アルが考え、実行しようとしている方法がどれほど徒

劣であるかということ。

しかし、彼は引き下がらなかった。

「そんなの、やってみなくちゃわかんないだろ……やってみたら、案外うまくいくかもしれないじゃないか」

「……もし、それでダメだったら？」

「ダメだったら……違う方法を考えるさ！ なんでも試してみる！ ……時間が掛かっても、俺は絶対、イリヤに星空を見せてやるんだ！」

メルの質問に対する回答は、実に彼らしいものだった。

だからこそ2人は、余計につらかった。彼だけが知らない事実を、突きつけなければならぬことが。

「そんな悠長な時間は無いんだ。アル」

「は？ 時間がないって、何を言ってる……」

ふと、2人の顔を見れば、どちらも表情が暗い。

地下室の空気が重くなる。糸が張り詰めるような感覚。

「……どうしたんだよ。2人とも、なんかおかしいぞ？」

不思議に思い、問いかけるも、2人は口を閉ざしたままだった。

「……トーマの言うとおりよ。そんな時間……余裕は無いの」

状況が飲み込めないアルに対して、メルがようやく重い口を開く。

「イリヤに告白したいんなら、なるべく早く……ううん。今日明日にでも、すぐにしなさい」

「ちょ、ちよつと待てつて……意味分かんないつて。どうしたんだよ？ 何かあったのか？」

「何かあった……というより、これからそれが起きると言った方が正しいんだがな」

「……？」

アルは変わらず、2人の話す状況が全く理解できない。

何をそんなに言いづらそうにしているのか彼が聞こうとすると、先にメルの方から話し出した。

「アル……特にアンタは知っておいた方がいいと思うから、言うんだけどね……」

「なんだよ、改まって……」

「イリヤが……今年の祭での、祈りの神子いのみこに選ばれたの」

言葉にするのもつらいといった表情で、その事実を口にしたメル。トーマの表情も曇っていた。

対して、アルは自体が飲み込めていないのか、きよとんとした表情である。

しかし彼の口から出た言葉には、深刻さなど微塵もなかった。

「なんだそれ」

「……はい？」

「いや……だからなんだそれ？」

てっきり驚愕するばかり思っていた2人は、彼の反応に啞然としてしばし言葉を失った。

「あの……さ、アル？ 念のため……念のためよ？ 念のために聞くけど、アンタまさか祈りの神子のこと、知らないと言っんじや……」

「おっつ！ 知らねえ！」

盛大にずっこけたメル。
なぜか自信満々なアル。

トーマもリアクションこそしなかったものの、内心ではメルと同じくずっこけていた。

「……で？ なんなんだその『イナリのミコ』っていうのは」

「祈りよ！ い・の・り！」

「そっか……んで？ 選ばれるとなんか良い事あんのか？」

「なんか私、頭が痛くなってきたんだけど……」

「気にするな。僕もだ」

「なあなあ、それって何なんだよ？ 教えてくれよ」

2人の気も知らず、アルは実に彼らしくあっけらかんとしていた。

「まさか知らないとは思わなかったわ……言つべきかどうか気に病んでたアタシがバカみたい……」

「……1から説明してやるしかないだろうな」

「そーね……んじゃ、トーマ先生よろしく」

「おう。よろしく頼んだ！」

「……やれやれ」

ため息をつき、眼鏡の位置を直してからトーマは静かに語り始める。

星空と、この島の歴史を。

そして、アルが単なる宴でしかないと思っていた祭の、本当の姿について。

祈りの神子 1

『神の火』と呼ばれ、今に語り継がれている古代世界『西暦』に幕を下ろした、人類による最終戦争。

その規模は人が可能とする想像の範疇を超え、世界の全てを巻き込み、小さな島々がいくつも消滅するほどであったという。

戦いは長く長く続き、その火が世界のほぼ全てを焼き尽くす。かろうじて人類が死滅を免れ、争いが終わりを告げたとき、彼らの頭上から晴れ渡る空は消えていた。

実際には青い空も、夜の星空も消えて無くなったわけではない。その時代を生きていた人々は、『空』が消せるものではないことを知っていたから。

事実、美しい空はそれを覆う厚い雲に隠されているだけ。

戦火は消えた。時が経ち、雲が消えれば、また以前のように星空を見上げることが出来るだろう。

楽観的かもしれないが、誰もがそう考えていた。彼らはそれを信じ、地上での復興に勤しむ。

しかし、どれほどの年月が過ぎようと、空を隙間無く覆い隠す雲は一向に晴れる気配を見せない。

「必ず雲は晴れるはずだ」と希望を捨てない者がいた。

「愚行を続けた人間へ、神が与えし罰だ」と怯える者がいた。

「戦火の最中に使用された兵器が原因だ」と分析する者もいた。

だが、彼らはその雲に手を届かせることは出来なかった。

人類を滅する寸前にまで広がった戦火は、長い歴史で培い、積み重ねてきた文明も文化も。そのほとんどを奪い去っていたからである。

かつて地上において栄華を極め、空の向こう側にまで到達した人類だったが、もはや遙か彼方の空を仰ぐことしか出来なかった。

それから数百年という歳月が流れ、アル達が暮らすこの世界がある。

無論、その間も識ある人々は星空をもう一度見上げるために、空から雲を取り除く方法を考え続けた。

それでも未だにその方法は発見されていない。『神の火』によって失われた文明と文化、技術はあまりにも大きすぎたのだ。

「……だから僕は、古代史の解読をしている。失われた古代文明の謎が解ければ、当時の技術も知識も得られる……今の人々が望んでいる、星空を取り戻すことにも繋がる」

「古代書が解読出来るのなんて、島中探してもトーマぐらいしかないもんね」

「トーマも、雲をどかそうとしてたのか」

「それだけが主たる目的ではないが……それでも古代について調

べていれば、おのずと興味は沸くさ。だからこそお前がやるうとしていた事がどれほど無理なことかも分かる。空も雲も、僕達が手を伸ばしても届くようなものじゃない」

「ま、まあそこまでは分かったけどさ……その話と、イリヤが選ばれたっていうその『祈りの神子』ってやつと、なんの関係があるんだ？」

「……^{サイ}祭と祈りの神子、そして星空について語る上で、外せない歴史がある」

トーマはいつもの癖、中指で眼鏡を押し上げるながらその単語を口にした。

「……『宗教』だ」

「シューキョー？」

「人間の力や、自然の力を超越した存在を進行する観念や、社会的な集団のことだ」

「分からないような、分からないような、分からないような……」

「神様ってやつを信じたり、お祈りしたりすることって言えば分かる？」

「ああ、そういうことが……うん。わかる」

人間の歴史には、常に宗教がつきまとう。

時には、異教者同士がそれを理由に争いを始めることもあるほど

に。

西暦が終わり、それまでの宗教のほとんどは国々や文明と共に消えていったが、人々は何もすぎるもの無く生きていけるほど強くはない。

新たな生活、復興が進むにつれて新たな宗教もまた、次々に創設され、広まっていった。

言っまでもなくアル達の暮らす、この島でも。

「現存している宗教は数多あるが、どれにも共通している点がある……雲が消えることを願っているということだ。それぞれの宗教によって、祈りを捧げる対象や方法は様々だがな」

「よその島がどんなことをしてるのか知らないけど、この島だと古代の遺産を、皆大切に守ってるでしょ？」

「うん」

「つまりこの島において、祈りを捧げる対象は空。宗教としての象徴は古代の遺産。祈りの内容は『雲を消して欲しい』となるわけだ……そして祈りを捧げる方法というか、儀式として5年に1度行われるのが祭ということだな」

「……でも、祭の時に祈りなんてやってたっけ？」

初めて祭に参加した時はまだ幼く、次の参加では誤って酒を飲んでしまい、最後まで参加出来なかったアルにとって祭に対するイメージは島民が集まり、飲んで食べての宴をするという印象しかなかった。

「アンタは祭を最後まで見たことがないでしょ？」

「そ、そうだけど……っっていうか、前の祭で倒れたのはお前が酒なんて飲ませたせいだよ……」

「アンタが確認もせずに一気飲みしたのが悪いんじゃない。飲む前に二オイで分かりなさいよね」

「のどに食べ物つつかえて死にかけてる時にいちいち確認してられるワケないだよ」

「まあそのイタズラについては一旦置いておくとして……問題はアルがまだ見たことの無い、祭の終わりに何が行われるのかということだ」

「……2人は、前の祭でそれを見たんだろ？」

「一応ね」

「気分の良いものではなかったがな」

「……何があっただよ？」

5年に1度しか行われない祭において、それこそが開催される目的であり目玉であるはずの、宴の最後に行われる祈りの儀式。

その儀式の内容について、島民達の中で語ろうとする者はいない。語りたがらない。

だから自身の目で確かめたことの無いアルが、それを知らないのも無理はなかった。誰もそれを示唆しなかったから。

祈りの神子 2

「……祭が行われる広場の中心に、櫓やぐらが立ってるのは知ってるわよね？」

「ああ……あの高いやつだろ？」

祭に近いこの時期になると、手の空いている者は村の中央広場の整備に駆り出されるのが恒例だ。

当日の宴で使用するテーブルの運び出しや足元の整地を行い、祭を開く会場を用意する。

そして広場の中央には村のどの建物よりも背の高い、2〜3人の人間がそこに登れる程度の櫓が建てられる。

「この前あれに登ろうとしたら、みんな顔真っ赤にして追っかけて来るんだもんなあ。ビックリしたよ」

「祭のために作られた神聖な場所に登ろうとすれば、そりゃ怒るわよ……」

「……あれが祭の終わりに行われる、儀式のための場所だ」

「あれが？ 2人が3人位しか登れなさそうだけど」

「それでいいんだ。宴の終わりに、あの櫓に2人の特別な人間が登る……その年の村長と、島の子ども達から1人だけ選ばれる、祈りの神子がな」

「ってことは、今年は村長と一緒にイリヤがあそこに登るのか」

「そういってね」

「……無論、舞台上がってそれでお終いという話じゃないかな」

「何をするんだよ？ あんなところに登って」

「……………」

それは、至極当然の疑問。

しかし2人は、気が進まないのかそれについて即答しようとはせずに口をつむいだ。

「なんだよ……2人ともどうしたんだ？」

「アル……祈りの神子は……イリヤはね」

「……僕から話そう」

できることなら口にしたくない様子のメルをかばうように、トーマが彼女の言葉を遮った。

「宴をすることだけが祭の目的じゃない……それを楽しみにして
いる者もいるが、本来の目的は祈りを捧げることだ。雲が晴れ、星
空がもう一度拝めるようにな」

「それは分かったけど、それと祈りの神子ってやつとどういう関係が……………」

「神の子と書いて神子みこと読む……祈りの神子というのは、つまり

は祈りの代償として神に捧げる子ということだ」

「捧げる……？」

「……祭の終わりに行われる祈りの儀式で、祈りの神子はその首をはねられる」

「……え？」

トーマが口にしたその事実にも、メルは自身の肩を抱き、アルは時間が止まったように言葉を失った。

何を言っているのか分からないといった様子の子のアルから視線を外し、トーマは話を続ける。

「神子が流した血で杯を満たし、それを神への最大の供物として祈りを捧げる……この祈りの儀式こそが、祭を行う目的だ」

「な……なんだよそれ……！ 首をはねるなんて……そんなことしたら、死んじゃうじゃないか！」

「無論だ。その命を神への供物とするのが、祈りの神子の役割なんだからな」

「なんだよ、それ……なんなんだよ……！？」

「アル……」

「そんな……そんなの、人殺しじゃないかつ！」

心の底から正義を信じている者が、絶対的な悪と対峙したかのよ

うにアルはその身を震わせた。

感情の沸騰に伴い、その声も荒くなっている。

「殺人ではない……首をはねるとは言っても、儀式の上で行われることだ。私利私欲のために命を奪うのとは違う」

「同じじゃないかよ!? 首を切るんだろっ!? その年の、祈りの神子に選ばれたヤツを、殺すんだろ!?!」

やり場のない怒りをぶつけるように、アルはトーマに掴み掛かり襟元を締め上げた。

「ちょ、ちよっとアル!」

「……………」

「知ってたのかよ……!?!」

「……………なにをだ?」

「イリヤが……神子に選ばれたこと……今度の祭で、殺されることを知ってたのかって聞いてるんだ!」

「アル……アタシ達はべつに、アンタに隠してたワケじゃ……………」

「メルの言う通りだ。僕達がそれを知ったのは昨日……メルの母親からだが」

「……………」

「い……いいから、とりあえず手を離しなさいよアル」

「く……………」

アルはトーマの襟元から両手を離し、感情を押しつぶすようにその拳を握り締める。

言葉は発さずしばしその場にとどまってから、アルは2人に背を向け、地下室の扉へと手を掛けた。

「…………アル」

「なんで……………」

「え…………？」

「なんで…………諦めてんだよ」

背を向けたままの、彼の口から発せられた短い言葉。

それだけで、今アルが押さえつけている感情の強さを推し量ることが出来た。

「イリヤが…………死ぬんだぞ？ 殺されるのに……………」

「……………」

「なんで…………諦められるんだよ」

アルはそのまま地下室を出て行くこととする。扉を開けたとき、その背にトーマが声を掛けた。

「諦めてなどいないさ」

「……………」

「昨日……メルからこの話を聞いてすぐに、2人でイリヤの所に向かって、イリヤに直接聞いた……僕達は止めました」

「……………」

「だがな。彼女は……イリヤは、受け入れている。自分の身に何が起こるのかわかっていて……それでも、受け入れていたんだ」

「……っ！」

それ以上は聞きたくないといったところか。

トーマの言葉を振り払うかのように、アルは駆け出し、地下室を飛び出していった。

先ほどまでの緊迫した空気が解かれ、室内に静寂が訪れる。

「やれやれ……あいつはいつも走るな」

静寂を破ったのは、トーマのぼやきだった。彼は乱れた襟元を直し、いつもと同じように古代書を手に取ってテーブルへと向かう。

「ねえ……トーマ」

「どうしたメル。呆然として」

「……よかったのかな」

「何がだ？」

「アルに教えたこと。アイツ……」
『だったら、祭をぶっ壊してやる！』とか言い出すんじゃない……」

「……言いかねないし、やりかねないな。まあ、今のあいつはそれどころじゃないだろうが」

そう言いつつも、トーマの様子はいつもと変わらない。

「心配じゃないの？」

「……心配してどうなる。それよりも、今の僕には他にやることがあるんだ」

「涼しいくらいにいつも通りね……。イリヤの件にしたって、トーマならもう少し喰らいつくかと思ってたけど……」

「アルが言っていたな。僕達は諦めていると……メルはどうだ？」

「アタシは……諦めてないけど」

「……僕だってそうさ」

普段と何も変わらないように落ち着いて見えるトーマも、この件に関しては、内なる炎を消してはいなかった。

ただ、それを表立って出すことがないのが、彼である。

「ふーん……でも、そのわりにはいつも通りっていうか、落ち着きすぎじゃないの？」

静かな室内に、ページをめくる音が響く。

トーマは既に、古代書を読みふける作業に没頭していた。

「そう言うお前も、特に行動していないようだが？」

「アタシはその……諦めてなんていないんだけど、何をしたらいいかわからないってどうか……」

「同じく、だよ。だから、今は僕に出来ることをするだけだ」

「……古代書を読み漁るのが、イリヤを助けるための行動なワケ？
いつも通りの日課にしか思えないけど」

「探している……非現実的であり認めたくはないが、目標に関してはアルと一緒にだ」

「……探してるって、何をよ？」

イリヤの質問に、トーマはいたって真面目な顔で答える。

「祭ではなく、祈りの神子の儀式でもなく……僕達がまだ知らない、星空をもう一度見れるようにする……そのための方法を、だ」

祈りの神子 3

いつの間にか、外ではぽつぽつと雨が降り出していた。

地下室を飛び出したアルは、濡れることなど気にせず、がむしゃらに森の中を駆けていく。

（イリヤ……わかってたんだ……）

森を抜け、丘を下り、アルは走り続ける。

（わかってたから……あんなこと言っただ……）

あの日、イリヤは小さな声でつぶやいた。

私も……見たいな。

それは、すぐ隣にいたアルにも聞こえないのではないかというほどの、小さな小さなひとり言。

それでもアルは、彼女の言葉を聞き取っていた。

生きてるうちに……もう一度。

「っ……」

雨は、目に見えて激しくなる。アルの全身を濡らし、その服は跳ねる泥で汚れていく。

しかし構わずにアルは走った。

彼の村に向かって。彼女に会うために。

アルが、イリヤの暮らす孤児院に着いたのはそれから短い時間が過ぎてからのことである。

「すつごい雨……よかつたあ。洗濯物、取り込んでおいて……」

イリヤは窓の外を眺めながら、つぶやいた。

ここは島唯一の孤児院であり、彼女が暮らす場所。

島内の建物としてはかなりの大きさであり、現在20人近くの身寄りの無い子供たちが暮らしている。

幼少の頃に両親を亡くしたイリヤはそれからの10年間を、この場所で過ごしてきた。

今では子ども達の良き姉代わりとして、日々施設の大人達と共に膨大な量の家事をこなしている。

2階から、子ども達が元気にはしゃぐ声がここまで響いてくる。

そろそろ夕飯の支度を始めようかと思っていた彼女の耳に、玄関のドアをノックする音が飛び込んできた。

「はい……?」

扉を開けると、そこには軽く息を弾ませて立ちすくむアルがいた。

「アル!? ど、どうしたの……」

「……イリヤ」

予期せぬ来訪者に驚いたイリヤだったが、すぐ今の状況に気付く。ここに来るまでに、突然の豪雨に打たれたのであろう。雨水と泥

で、アルの全身はずぶ濡れとなっていた。

「と、とにかく入って。すぐ、タオルとか持ってくるから……」

「ここでいいよ……床が汚れるだろ」

「え……でも、そのままじゃ風邪ひいちゃう……」

「……………」

「アル……？ ……どうしたの？」

中に入るよう促しても彼は動かず、その身を雨の下に晒し続けていた。

うつむいたままのその顔から表情は読み取れず、その声もどこか弱い。

だが、次に彼の口から出たその言葉は、彼女を静かに驚愕させた。

「イリヤ……祈りの神子に選ばれたって、ホントか……？」

「……………」

反射的に背を向けるイリヤ。

その言葉を彼の口から聞いた後では、とても彼の目を見て話すことは出来ないと思ったから。

「……………なあ、イリヤ」

「……………誰から」

「え？」

「……誰から聞いたの？」

「……トーマとメルから。メルが最初に聞いたみたいだけど」

「そう、なんだ……」

彼女が言葉を失ってから、アルはようやくその顔を上げる。

目に映ったのは、彼に背を向けたイリヤの、その小さな背中だった。

「そっか……おしゃべりだなあ。もう……」

メルのことを言っているのだろうか。

しかしイリヤは、祈りの神子のことについては否定しなかった。

「ホントなのか……？」

「……」

彼女は言葉で答えず、背を向けたまま黙って頷く。

「なんで……黙ってたんだよ」

「……うん。昨日、トーマとメルにも同じこと言われたよ」

「なんで……言ってくれなかったんだ！ 話してくれてたら、俺

……」

自分で口にしておきながら、アルはそれ以上の言葉を思いつけなかった。

たといリヤの口から直接この話を聞いていたとして、自分に何か出来たのか。何か出来るのか。

がむしやらに行動することは出来るだろうが、明確な答えは求められていない。

「俺……」

「……いいよ、アル。大丈夫だから」

答えを口に出来ず再びうつむいてしまったアルに、彼女が返した言葉の響きは、優しかった。

「……大丈夫だから」

「大丈夫って……何がだよ」

再び顔を上げると、彼女もこちらを向いていた。
穏やかな両の瞳が、まっすぐにアルを見つめている。

「きつと、星空は見えるよ」

「……………」

そうつぶやいた彼女の顔を見ていられなくなり、アルは目をそらしてしまう。

「祈りの神子は、意味もなく死んじゃうんじゃないよ？ その血と体を捧げて、空に祈るの」

彼女の口にする言葉の一つ一つが、アルの心に突き刺さって。

「だから……私は大丈夫。それで奇跡が起これば、みんなが星空
を見れるんだから」

「大丈夫なもんか……」

彼女の笑顔からも、その強がりが見えこえてくるようだった。

「イリヤだって、見たかったんじゃないのかよ……！？ 星空を、
もう一度見たかったんじゃない……」

アルの言葉に、今度はイリヤがうつむいてしまう。

「……見たかったよ。でも、しょうがないの」

「だったら！」

「だけど、どうしようもないの……！ しょうがないんだよ……
！」

「……………」

彼女の反論の声は、決して大きくはなかった。

しかし、普段の彼女からは聞いたことのない、心からの叫び。
アルにとってはどんな叫びよりも大きく、そして悲しい声に聞こ
えた。

「私だつて言いたかった……みんなに、話したかったよ……！
でも……！」

イリヤが再び顔を上げ、2人の視線が重なった。

「アル達が知ったら……知られたら、もう今までみたいに話せない……サヨナラしなきゃいけなくなっちゃうから……！」

「……………」

思えば、あの丘で2人、話をしたとき。

イリヤは既にこの事を知っていたのだろう。

知っていてなお、普段通りに振る舞っていた。

いつもと同じように、アルの好きな、そのまぶしい笑顔を見せてくれていた。

「でもイリヤが死んだら、俺……」

「……………私はいいの。祈りの神子をやれば、あの日みたいな奇跡が起きてくれるかもしれない……そうすれば、アルたちが星空を見れるようになるでしょ？」

そう言ったイリヤの視線は再び下を向いていて。

目の前のアルに向けて紡いでいるはずの言葉。

それはまるで、自身に言い聞かせているようでもあった。

「俺……は……」

「……………ごめん。村長に、祭のことで呼ばれてるから……もう行くね」

そう言い残すと彼女はアルの横をすり抜けて、走り去っていった。
土砂降りの雨の中、振り向くことなく、傘も持たずに。

「……………」

簡単に追いつけはするだろうが、アルは彼女を追いかけることが
出来なかった。

雨は時間と共に激しくなる。

建物の中から聞こえる子ども達の声が、遠い世界の音のように感
じた。

祈りの神子 4

まもなく夜になろうという時間。激しい夕立の中、海の見渡せる丘に登る人影が1つ。

「……………」

イリヤと別れたアルは、この場所へとやって来た。彼女と孤児院で話した少し後、彼も村長の家を訪ねたのだが、村長によるとイリヤを呼び出してなどいないという。

「いない……か」

彼女を探し回るような気力はもはや無かったが、この場所にならいるかもしれないという、微かな予感を抱き、ここに来た。

イリヤが好きだと言っていた場所。

彼女が星空を見たこの丘に。

しかし、ここにも彼女の姿はなく。

(会えても……どうしようもないか)

アルの心には、「会えなくてよかった」という感情が少しだけ芽生えていた。

この場所で彼女に会えたとして、何を言えばいいのか。今の自分には、彼女に希望を持たせられるような言葉が見つからない。

何も言えないのなら、先ほど別れる前の二の舞となってしまうだろう。

しかし同時に、彼の中には「諦めたくない」という感情もまだ確かに残っている。

(私はいい……って)

いくらイリヤ自身が、祈りの神子として死ぬことを受け入れ、祭がこの島の掟であるとしても、やはり彼はどうしても納得することが出来なかった。

先ほどのイリヤとの別れ際に、彼女の本当の気持ちを覗いた気がしたから。

「だったら……なんで泣いてるんだよ……」

小さな嘘を残してアルとの会話を切り上げ、彼の前から去る時、イリヤの瞳から流れた雫。それをアルは見逃さなかった。

彼女はたしかに泣いていた。

予定されてしまった自分の未来を受け入れ、それに心から納得しているのであれば、涙を流す必要は無いはずだ。それぐらいのことは、いくら頭が弱いと言われているアルにも分かる。

しかし、どうしたらいいのか。

彼女は救いを求めているはずなのだ。

誰よりも星空を見たがっていたのは他ならぬイリヤだし、こんなに早く死を迎えるなど受け入れられるとは思えない。

だが問題は、どうやって彼女を救えばいいのかということだ。

祭という式典を物理的に壊すことはすぐに思いついた。だがそれは、根本的な問題の解決にはならない。

たとえ祭の当日にアルが暴れ、儀式の邪魔をしたところで日を改めるだけだろうし、いくらなんでも島中の大人達を敵に回して無事で済むとは思えない。

アル自身が捕まってしまえば、それで終わり。祭を仕切り直し、イリヤは……。

(くそっ……！)

丘の上にひざをついたアルは、苛立ちをぶつけるように拳で地を殴った。

周りの草花に雨が降り続き、雫がはじけていく。

「く………！」

天を仰げば、雨粒を降り注ぐ黒雲が空を支配していた。時折、遠くから雷鳴も響いている。

「……ちくしょう」

彼は足元にあった小石を掴み、空に向けて投げた。何度も、何度も、何度も。

「くそっ………！ くそっ！」

空と人。

抵抗する術を持たぬ者の、絶対的強者への足掻き。

彼の手から放たれる小石たちは、当然空にまで届くことなく、放物線を描いて虚しく海面へと落ちていく。

「ちく……しょお……！」

黒い曇天に向けて放つ、少年の静かな慟哭。その声も、響き渡る雷鳴の轟音にかき消される。

「……どけよ」

顔を上げ、見開いた瞳の遙か先にあるのは空。

切れ目のない雨雲からは、未だ雨が降り続けている。

時刻は既に夜へ入ろうとしていたが、やはりそこに星空は姿を見せることはない。

「どけよ……！」

自身でも気付かぬうちに、彼は泣いていた。

瞳から溢れるそれを、冷たい雨水が洗い流していく。

「どけって……言っただろっ！」

空を支配する雲に向けて怒りをあらわに、彼は叫んだ。

「なんで……雲なんてあるんだよ！ お前さえ無ければ……星空が見えれば、イリヤは……！」

その声が届かぬと知りながら。

その奇跡が起こらぬと知りながら。

それでも彼は憤怒した。

その手が届くことのない、遙か空の雲に。

「……………」

時同じくして、場所は森の中。

大木に背を預け、膝を抱えて座り込む少女が1人。イリヤだった。彼女はアルと別れた後、特に行くあてもなくただ島を彷徨い、この場所にたどり着いた。

既に足は棒のように疲れていたが、今の彼女はそれを自覚出来ないほどに心揺らいでいた。

(私……………は……………)

雨音をかき消すように、頭の中に何度も響く彼の声。

イリヤだって、見たかったんじゃないのかよ……………!?

彼女の心に問いかけるように繰り返されるその声が、耳を離れなかった。

星空を、もう一度……………

「私……………」

自分は目を逸らしていた。村長から祈りの神子の話を聞いた、あ

の日から。

少し目を逸らせば、それは現実にかかる予定ではないように感じていた。

自分自身の未来ではなく、現実ではなく、遠い遠い夢のよう。

昨日、メルたちが訪ねてきた時も、自分のことだといっうのにそれほど実感は湧かなかった。

（私だって……でも）

しかし今日、彼女は気付いてしまった。

これは本当のことなのだ。

夢でなく、幻でもなく、あと少しで自分に訪れる、確実な未来の話なのだ。

（私……そうか……）

雨ではない、大粒の雫が瞳から溢れていく。

彼女は泣いていた。

たった今気付いた、もう一つのこと。

（死にたくないんだ……私……）

泣き続けた。

彼女自身の心。それに向けられる、様々な感情と状況に。

（私は……死にたくないんだ……）

生きてこそ明日がある。星空が見られるのも、命があつてのもの。

その現実気付くと、彼女の心は純にそれを求めてしまう。
同時に、今の自分をとリまく感情と状況がそれを責めて、許すこ
とは無い。

現実と理想に、彼女の心は責められ、揺らいでいた。

「アル……」

意識したわけではない。しかしイリヤは、彼の名を呼んでいた。
心の嘆きが溢れ出したように。

それに気付くと、彼女はより強く膝に顔をうずめ、堪えきれぬ涙
を流す。

祭の当日まで、あと3日。

発見、雨のあと 1

翌日。

この場所に着いてから、どれほどの時間が経っただろうか。目覚めたのは昼頃で、家を出たのは昼過ぎだ。そして今は、いつの間にか夕方になろうとしている。

アルは、イリヤと話をした丘の上に寝転んで空を見つめていた。前日の激しい雨は夜のうちに止み、視界に広がる風景はいつも通りの白い曇天。

「……………」

彼は昨日、帰宅するとそのまま倒れこむように眠りについた。いつそ、全て忘れてしまいたかった。

目が覚めれば、全てがそれまでと変わらぬ日常に戻る、悪い夢であつて欲しかった。

しかし現実は無情にも、目覚めた彼にこれまでのことが全て事実であることを教えた。

(…………消えないな)

空を眺めることはやめずに、上半身を起こす。朝からこうして見つめ続けている空は何も変わらず、雲が晴れる気配など微塵も感じられなかった。

(そりゃそうか……奇跡って言うぐらいだもんな)

この空の雲を晴らし、星空を取り戻す。

その目的のために、5年に1度の祭が開かれ、儀式が行われる。

島の少年少女から1人だけが祈りの神子としてその儀式に参加して首をはねられ、それを供物として天に祈る。

そして今回の祭では、イリヤが祈りの神子として選ばれた。

このまま祭を迎えれば、彼女はそれまでの祈りの神子と同じように首をはねられてしまう。

それはこの島で生きている者達の宿命であり、掟である。

アルのような子どもが1人騒いだところで、この儀式を止められはしないだろう。

イリヤを連れて、島から逃げ出すことも考えたが、行き場など思いつかなかった。

なにより、彼女自身が祈りの神子となったことを受け入れているのでは、どうしようもない。

だが、彼女を救う方法が無い訳ではなかった。

祭を開く目的は、儀式を行うため。

儀式を行う目的は、祈りの神子の血肉を供物にし、天に祈るため。全ては空を支配する雲を晴らし、星空をもう一度見上げるため。

だとすれば、祭が行われるまでに雲が晴れ、星空が眺められるようになれば、儀式を行う必要はなくなるのではないか。

「身体は強いが、頭が弱い」と馬鹿にされているアルでも、その結論には辿り着いた。

(……とは言っても)

結論には至った。

『祭でイリヤが犠牲になる前に、星空が見れるようになればいい』
しかし、ゴールが見えても、そこに向かうための道が見えなかつた。

このまま何もしなければ、イリヤが殺されてしまう。かといって、
どう行動すればいいのか思いつかない。
手詰まりの八方塞りだった。

(あー……くそっ……！)

何も思いつかない。何も出来ない。

だが時間は過ぎる。祭が近付く。

きっとイリヤは、本心から祈りの神子を受け入れた訳じゃない、
とアルは思っていた。

彼女は、泣いていたから。

祈りの神子となることを、心から望んでいたのなら、いつも笑顔
を絶やさぬ彼女が涙を流すハズが無い。

彼女は苦しんでいる。悩み、悲しんでいるのだ。

たとえ他の誰かから「思い込みだ」と言われても、アルにはそう
としか思えなかった。

だがどうしたらいいのか。

自分に何が出来るのか。何も出来ぬのか。

アルもまた、この瞬間に悩み、苦しんでいた。

思いをめぐらせながら、空を見つめる彼の元に、ゆっくりと近づく人影が、1つ。

「……トーマか」

「……ああ」

振り向かなくとも、彼にはその足音が誰のものであるか判った。確認の意味で振り向いてみれば、やはりその人物はトーマであった。いつもと変わらぬ様子であるが、少しばかり違う点が2つ。

1つ。彼はその手に本を持っていた。外装から見て、彼の愛読する古代書だろう。

四六時中書物を読みふける彼ではあるが、あの地下室から外に持ち出してくるといふのは見たことが無い。

もう1つは、その目の下に酷いくまを作っていたということ。規則正しい生活で有名な彼にしては珍しい。

古代書を読みふけることはあっても、睡眠時間を削ってまでといふのは今まで無かった気がする。

「ヒドイくまだな……なんかあったのか？」

「……こいつに、少々気になるページを見つけてな」

トーマはそう言い、手にしていた古書をかざす。

古代文字が解読できないアルにはその価値が分からないが、トーマにとって、この古ぼけた本の中身は宝の山のような物なのだろう。

「そっか……あ、そうそうトーマ」

「なんだ？」

アルは立ち上がり、トーマの方へ身体を向けて頭を下げた。

「昨日はゴメン……それと、ありがとな」

「……謝罪とお礼が同時に来たのは初めてだが」

ひとまずその頭を上げると、アルは視線を逸らして照れくさそうにした。

「その……トーマとメルは俺のこと考えて、祈りの神子について教えてくれたのに……俺、怒っちまって……」

「……気にするな。お前の激情も暴走も、今に始まったことじゃない」

「う……とにかく、ゴメン」

「何度も言うが気にするな……それで、お礼の方は何に対してだ？」

「ほら、俺が集めた筈と梯子。片付けてくれたんだろ？ 今朝行ったら無くなってたから……たぶんトーマ達だと思って」

「それならメルに礼を言った方がいい……あれを返して回ったのはメルだからな」

「そっか……とにかく、ありがとな」

正確にはトーマも手伝ったのだが、手伝いに駆り出されたのはメルの苛立ちと疲れがピークに達してからで、アルの代わりに彼女の罵倒と殴打を受けながらだった。

「まったく。おかげで、頭にタンコブまで……」

「ん？」

「いや。なんでもない……ところでアル。イリヤとは話したの？」

彼女の名を出した途端、分かり易くアルの顔色は曇った。

「ああ……話した」

「……止められそっか？」

「あの様子じゃ……難しいな。イリヤも、頑固なときは頑固だからなあ……はは」

アルは嘆きながら再び空を見上げる。頭上の雲は、先ほどと何が違うのか答えられぬほど変化に乏しかった。

発見、雨のあと 2

イリヤの決心と、それを止める事は難しいということを知ったアルに、トーマが問う。

「どうするつもりなのか」と。

それにアルは乾いた笑いで答える。

「こつちが聞きたいくらいだ」と。

アルは、次にとるべき具体策をまだ見つけられていないようだった。

「……お前のことだから、祭を壊してやる程度のことはい出しんじやないかとメルは言っていたがな」

「そりゃあ、それも思い付いたけど……さすがにムリがあるのは、俺にだってわかるさ」

「お前にしては賢明な判断だな」

「……バカにしてる?」

「寝めているんだ。一応な」

「そーかよ……」

いつの間にか2人とも無言となり、互いに空を見つめていた。耳に入ってくるのは、丘を走る風の音と、空の下に広がる海の波

音。それに、海鳥の鳴き声。

しばしの時間が流れたが、やがてトーマの方から口を開いた。

「……………諦めたのか？」

その言葉にアルは振り向いた。

言葉を発せずとも、トーマの目を見つめるその瞳は、まだ諦めてなどいないということを主張していた。

「諦めるもんかよ……………だけど」

「……………だけど？」

「さっぱりわかんねえ……………どうすりゃいいのか、こっちが聞きてえ……………よっ!？」

アルが言い終わる前に、彼の膝の上に何か落とされたのか、ずしりとした重量感が襲った。

「そいつを見てみる……………お前も驚くはずだ」

アルが手に取ったそれは、先ほどまでトーマが手にしていた古代書だった。

見た目に違わぬ厚さと重さだ。その気になれば振り回すだけで凶器になるんじゃないだろうか。

「いや……………俺、読めないし……………」

トーマに返そうとその古書を差し出すが、彼は受け取るうとしな

い。

「そんなことは知っているさ。僕は、読んでみるとは言っていない……見てみると言ったんだ」

「……はあ？」

トーマがこういう面倒な言い回しをする時は、大抵何か考えがある時だ。

一向に本を受け取ろうとしないトーマに背を向け、アルは仕方なくその古書のページをペラペラとめくり始める。

「ったく……なんだってんだよいきなり……」

「……もつと先のページだ。栞が挿んであるだろう？ そこだ」

トーマの指示に従い、彼が挿んだのであろう栞のページを開いたアル。

「あんなトーマ。どんなページだろうが、俺はお前と違って古代文字は……」

彼に文句を言いつつ、そのページを視界に入れた瞬間、彼は目を大きく見開いた。

「読め……ない……」

「……どうだ。文字を読む必要も無く、驚いただろう？」

「これって……」

アルは、そのページと目の前の光景を、何度も視線を上下させて見比べた。

「これ……ここに描かれてるのって……古代の遺産か!？」

トーマが槩を挿んでおき、アルに見せたページ。

そこには、羅列した古代文字と、そこに添えられるように描かれた、ある建造物の画。

そのシルエツトも、天に向けてまつすぐに先端を向ける様子も、彼らの目の前にそびえ立つ古代の遺産そのものだった。

「そう考えて間違いないだろうな……偶然と言っにはあまりにも酷似し過ぎている」

「そつか……あれって、ホントに古代の物だったんだな……」

古代人たちの遺した神聖なる建造物として今日まで教えられ、神聖な物であるとされてきた目の前の巨大な建造物。

それが正しいことがほぼ証明されたことになる。

あれを崇め、奉っている島の大人達にとって……いや。この島に住む者にとっては、誰に対しても大ニュースだろう。

しかし、アルの関心はそこで止まった。

「……返すよ」

「何も聞かないのか?」

「聞くって何を?」

「この古代書……いや、古代の遺産について。てっきり、質問ばかり出てくるかと思っていたんだがな」

「……なんて言うかな……なんか、全然気にならないってどうか」

まるで袋から空気が抜けていくように興味を失い、冷めていく古代の遺産への探究心。

今のアルにとっては、古代の謎が秘められているであろう建造物よりも、空に浮かぶ雲を消す方法のほうが大事であり。

故に、それ以外については不思議なほど関心が湧かなかった。

「いや、そりゃスゴイ発見だっていうのは分かるけどさ？ ……

言い方が悪いかもしれないけど、今の俺にはどうでもいいってどうか」

「だろうな。イリヤを助けるための方法にしか興味はない……そんな顔だ」

「うん……せっかく教えてくれたのに、悪かったな。……じゃ」

アルが会話を断ち切り、立ち去ろうとする。

しかし。

「……たしかにそうだ。こいつがどれほどの大発見だろうが、今のお前にとっては何の価値も無いだろう……だがな。この発見が、イリヤを救うことになるかもしれないと言ったら……どうだ？」

アルの背に向けたトーマの言葉が、彼の足をピタリと止めた。

「どついでと……だよ？」

「言葉通りの意味さ。この古代書にあの遺産が描かれているというところが、もしかするとイリヤの命を助けることになるかもしれない……そのための手段となる可能性がある」

そこまで言うと、トーマもまた、その場を去ろうとする。その足が向く先は、あの地下室。

「イリヤを……助けられる……!？」

「……もちろん、確実ではない。ひよっとすると、イリヤの命を救うという目的からすれば、意味の無い大ハズレかもしれない」

「トーマ……お前、何か知って……古代書を読んで、何か分かったのか？」

「あくまでも、可能性を見つけたというだけだ。正直なところ、まだ不透明な部分も多い……それでも、聞くか？」

「あ……ああ！ 聞く！ 教えてくれ！」

トーマは振り返り、眼鏡に中指を添えながら問うた。
そしてアルは、即座にそれに答える。

「……地下室で話そう。メルも呼んである……あいつにも、この話はしておくべきだから」

「あぁ！」

迷っている時間も、その必要も無い。

こうしている間にも、刻一刻とその時は迫っているのだ。

祭が開かれ、イリヤが命を散らす、その時が。

2人は、急ぎ彼らにとっての秘密基地、地下室へと向かった。

『祭』の当日まで、あと2日。

古代の遺産 1

祭を翌日に控えたこの日。時刻は正午少し過ぎ。

古代の遺産近く、丘のふもとの森の中、大木に背を預ける男女の人影。

トーマと、メルである。

「ごめん！ 遅くなった……！」

2人の元に駆けて来たのはアル。3人で決めた待ち合わせの時間より少し遅れての到着だった。

「……ホントに遅いわよ。トーマだけならともかく、レディを待たせるなんてどんな神経？」

「悪い……寝坊したけど、間に合うと思ってたら大人達がいて……遠回りして来てさ」

「僕だって待たされるのはご免こうむりたいがな……ところで、見られていないだろうな？」

トーマに言われ、アルは念のため後方の確認をする。細心の注意を払ってここまで来た。後をつけられているというのは、おそらくないだろう。

「オツケー。大丈夫みたいだ」

「よし……出発するぞ。時間に余裕があるとは言えない」

トーマが先頭を歩き、2人もそれに続く。

目指す場所は、ここから目と鼻の先にある古代の遺産。

周囲に人影がないことは確認済みだが、念のため3人は木々の間に身を隠すようにして、早足で移動していく。

「……………だけどきトーマ」

「喋るのはいいが小声にしろ……………いつものお前の声量では大きすぎる」

「っと、悪い……………しかしさ、驚いたよ。古代の遺産に、あんな秘密があつたなんて」

「実際にこの目で確かめてみないことには安心出来ないがな。たとえそうだったとしても、使えるかどうかは……………」

「なーに。そうだっていう可能性があるってだけでも十分だよ」

「……………ちよつとアル。はしゃぐのはいいけど急ぎ過ぎないでよね。不用意に飛び出して、大人達に出くわして捕まっちゃいましたー。なんてシャレにならないんだから」

「わかつてるって……………」

3人は早すぎず遅すぎず、固まりとなって進む。

とにかく今は、誰とも出会わず、誰にも見られずに古代の遺産までたどり着かなければならない。

事の発端は、前日にトーマがアルとメルを地下室に呼び、彼の発見についての説明からだった。

「……コーシャホー？」

初めて耳にするその単語を、アルは素っ頓狂なイントネーションで復唱し、首を傾げた。

その単語から発想できる物が、頭に浮かんでこない。隣にいるメルも、同じように首を傾げていた。

「それも呼称の1つだ。『フラック』という呼び方もあるし、略称として『AAG』というモノもある」

「エイエイジイー？」

「メンドくさいわね……なんでそんなに呼び方があんのよ」

「古代に存在した国々、それぞれでの呼び方だ……なにせ国によって言語が違うからな。同じ物と呼ぶにしても違いは出てくるのは仕方ない」

「まあいいわ。それでその……コーシャホーだっけ？ あの古代の遺産が、実はそれだったってコト？」

イリヤを救う方法が見つかったかもしれない。

そう言ってアルとメルの2人を地下室に呼んだトーマは、島民達が崇める古代の遺産が、古代においてはそう呼ばれていた物だと教えた。

「でもさ……それがどうイリヤを助けることになるんだ？」

「いきなりそこを教えるのは話が飛びすぎだ。まず2人には、古代の遺産が何なのかというのを知っておいてもらいたい」

「そうしないと話進められないワケ？ メンドくさいわね……」

「あんま難しい話はカンベンして欲しい」

「……なるべく手短かに、分かり易く教えてやる……『コーシャホー』というのを、文字に直すところだ」

トーマは机の上に紙を広げ、羽ペンにインクをつけて『高射砲』という3文字の言葉を書いた。

「……なんて読むんだ？」

「だからコレで『コーシャホー』って読むってことですよ。バカ」

「そう。そしてこの3文字それぞれの意味を詳しく見てみるとこうなる」

トーマはその3文字下に、文字を書き加えた。

「高く射つ砲……つまり、高い場所に向けて射つ物ということだ」

「高い場所に向けて……うつ？」

「古代文明に、『大砲』という物がある。筒の中に『砲弾』という鉄の塊と火薬を入れて、火薬の爆発で砲弾を飛ばし、遠くの敵や建物を攻撃するという古代の戦争で使われていた兵器らしい。高射

砲の『砲』というのは、これを表している」

アルは早くも知恵熱を出さんばかりに頭を抱えていた。

「えーつと……」

「……アル。小さい頃にパチンコで村長の家の窓を割ったことがあつただろう？」

「……あれか。とんでもなく怒られたなそういえば」

「要はあの時飛ばしていた小石が、砲弾という鉄の塊に代わった物だ。もつとも、飛ばすのに使うのが人力と火薬という違いはあるが」

「なるほど……分かったような気がする」

「……高射砲っていうのが古代の兵器だつてのは分かったけど、あの古代の遺産もそうだつてワケ？」

「あれの外見と寸分違わぬ絵が、こいつに載っていたというのがそれを証明している」

トーマは1冊の分厚い古代書を手に取った。

古代の遺産を描いたとしか思えない挿絵が載っていた古代書。それは、古代において戦争で使用されていた兵器についてまとめたものであった。

「まさかの大発見ね……神様が造つたとまで言ってる大人もいるつていうのに、それが人間の戦争の道具だったなんて」

高射砲の絵を覗き込んでいたアルが口を開く。

「……なあトーマ。その砲弾っていうのは、これのどこから出
んだ？」

「この長く伸びた筒の先……『砲身』と言うらしいが、ここから
だ」

高射砲の挿絵の、まっすぐに伸びたその部分を指差してトーマは
説明した。

「砲身を描いた図がこつちにある。穴が開いていて筒のように中
は空洞なんだ。この中を砲弾が通り、その先に向かって飛んでいく
という仕組みだ」

「へえ……」

「トーマ。アタシも聞きたいんだけど……この部分から砲弾が飛
んでいくんでしょ？ ってことは、この先端部分を敵に向けるワケ
よね？」

「そうなるな」

「だったらどうしてこの絵も、古代の遺産も……砲身だけ？
なんでそれがほとんど真上を向いてるのよ」

「あ、そうだよな。敵の方を向けないといけないのに……」

「……それについては、この兵器がなぜ生み出されたのかについ

て話す必要があるな」

彼はいつもの癖を見せた後、高射砲という古代兵器の背景について語り始めた。

古代の遺産 2

古代の歴史とは、戦争の歴史である。

どこかの学者が、古代史をそう評価したという。

それほどまでに、西暦の時代は常に世界のどこかで争いの絶えぬ歴史であったという。

戦場に赴く兵士も、戦闘行為に直接は参加しない者も、人類皆がどこかで戦争という行為に注力していた。

それは単に兵役にいたり、労働力を向けたりするだけではない。

古代の人々は、今と比べ物にならぬほどの知識と技術を所持していた。

馬や牛に引かせる必要のない車。火を熾さずとも部屋を暖める設備。難病に怯える必要のない薬。

しかし生活を豊かにすることが初たる目的であったはずのそれら知識と技術、発明もまた、争いに利用されていく。

その最たるものに、『航空機』という機械があった。

鳥のように翼を持つその機械は、中に人間が乗り込み、雲よりも高く大空を自由に飛ぶことが出来たという。

遠く離れた場所まで高速で移動し、人や物を輸送する。

古代人の英知の結晶であり、鳥のように空を舞いたいという当時の人類の希望を叶えた発明であり、優れた実用品であった。

だがその夢と希望によって生み出された機械も、戦争に利用されていく。

初めは偵察のため。次に機体へ銃器を積んで攻撃能力を持たせ、

やがて上空から爆弾まで落とすようになり、地対空という絶対的な優位性を持って地上も海も蹂躪した。

優れた技術、科学力と相まって最終的にはただ1機の攻撃のみで町1つを壊滅させることが出来るほどにまで上り詰めたという。

アル達が古代の遺産と呼ぶあの高射砲という兵器は、空の制圧者である航空機を撃ち落とすために生み出された。

大砲という兵器は航空機以前から既に存在していたが、空の敵を倒すという必要性に駆られなければ高射砲という兵器は考え出されなかっただろう。

西暦の終わり、大量の航空機が空を支配し、それに対抗するよう気が遠くなりそうな数の高射砲が世界中に設置された。

やがて世界を焼いた戦火、神の火によってあらゆる文明と同様、高射砲もそのほとんどが消え去った。

この島で古代の遺産と呼ばれ崇められているあの高射砲は、戦火による消滅を奇跡的に回避し現在まで残る、文字通り古代の遺産であった。

「……やっぱすげえな古代は。鳥みたいに空を飛べる機械まであったのか」

「それを戦争なんかを使うヤツの気がしれないけどね……アタシは」

「それについては仕方ないだろう。滅びるか否かの戦争状態になれば、使える物はなんでも使うさ……まあそれはいいとして」

「なんとなく分かったわよ……あの古代の遺産を使おうってワケ

ね？」

「そういうことだ」

「……？ なあなあ2人とも。どういうことだ？」

イリヤを助けるためにトーマの立案した、このとんでもない作戦。やはりアルだけは、即座に理解することが出来なかったようである。

「……はあ」

「な、なんだよ……マジで分かんないんだからしょうがないだろ」

「ま、アンタらしいわ。うん」

「……アル。僕達がイリヤを救おうとしているのはなぜだ？」

「そりゃ、イリヤが祈りの神子に選ばれたからで……」

「そうだ。祈りの神子はその血を捧げることで、人々の祈りを天に届けるのが務めだ……で、人々の祈りとはなんだ」

「……雲が晴れて、星空がもう一度見れるようになってほしい……んだよね？」

「そうだ。今年の祭で祈りの神子の儀式が行われる前に、雲が晴れて星空が見えるようになったらどうなる？」

「そうすれば……イリヤは殺されなくてすむ」

「イリヤが助かるだけじゃない。これから先、祈りの神子の犠牲がなくなるとも雲は晴れるということの証明になる……」

「……そうか！」

そこまで聞いたアルは頭の中での合点がいったらしく、パツと顔が明るくなった。

「そうすれば……もう誰も祈りの神子をやらなくてもよくなるんだな！？」

「そういうことだ」

アルはまるでおもちゃを与えてもらった子どものように喜んでいが、何かに気付いたのか急に真剣な表情へ変わった。

「あれ……？ それはいいとしてさ、どうやって雲をどかさんだ？」

「お前……僕が何のためにさっきまで古代の遺産についての話をしたと思ってる」

「さすが島1番馬鹿の名はダテじゃないってとこね」

「なんだよ……ホントにわかんないんだからしょうがないだろ」

「アンタの頭の中が分からないわ。アタシには」

「……細かく説明してやる」

トーマは仕方ないといった表情で眼鏡のズレを直してから、アルでも分かるように話の難易度を下げた説明を始めた。

「とりあえず話を聞いていたのか確認するぞ……この島にある古代の遺産とは、実は何だった？」

「……高射砲ってやつ」

「そいつは何をするための物だ？」

「航空機を撃ち落とす……」

「その航空機というのはどこまで高く飛べる？」

「……雲の上まで」

「……なんでそこまで聞いて分からないのよ」

さすがにメルも頭を抱えた。

「ちゃ、ちゃんと聞いてただろっ？ 間違っただろ？」

「まとめるとだな……古代の遺産は高射砲という、航空機を打ち落とすための兵器だった。そして航空機という兵器は、雲よりも高く飛ぶことが出来た……」

「うんうん。んで？」

「で？ じゃないわよ。ここまで言った時点で、もう答えは予想

つくでしょ」

「……つまり古代の遺産がまだ高射砲として使えるなら、この古代書へ書かれているように、雲の上まで砲弾を届かせることが出来るわけだ」

トーマが机の上で広げられていた古代書をバンと閉じる。

「……古代の遺産を使って、空を覆っている雲を撃ち消す。これが、僕の立てた作戦だ」

そこまで聞いて、アルもようやく理解した。

祈りの巫女という運命からイリヤを救うための、とてつもなく非現実的で、しかし唯一の作戦を。

古代の遺産 3

道中で大人たちに出会うというハプニングは起こらず、彼ら3人は無事に聖域の近くへと到着した。

「よっ……と」

音を立てぬよう素早く木の上に登り、生い茂る枝と葉に身を隠しつつ、アルは前方の様子を伺う。

古代の遺産。その無機質な巨体は、今日も変わらずその場所にそびえていた。

「……アル、どうだ？」

その木の下にはトーマとメル。

アルは偵察を終えると、滑るように静かに木の幹を降り、着地する。

この距離ならば普通の声量でも聞かれないとは思うが、念のため3人はヒソヒソと小声で状況を確認、相談した。

「柵も見張りのオツチャン達もいつも通りだな。柵のこつち側に2人いた……行ったり来たりして歩き回ってる」

「まさしくいつも通りね」

「……なら、昨日立てた作戦通りだ。頼んだぞ2人とも」

「おっっ」

「まかせなさいって」

彼らにとって最初の目的は古代の遺産への到達。遺産に見張りがいるのも想定内。

ここからの行動は昨日のうちに地下室で決めておいた。あとはトラブルが起きぬことを祈り、行動するのみ。

「よし……スタートだ」

小声での掛け声を合図に、各々が打ち合わせ通りの行動を開始。トーマだけはその場を動かない。

「……………」

草むらに身を潜め、トーマは前方の古代の遺産を見張る大人達の様子を伺う。

その大人達に向かって正面から突っ込んでいくアルの姿が見えた。彼は自慢の俊足をいかんなく発揮し、助走をつけた1回の跳躍で軽々と聖域を護るように築かれたバリケードを跳び越えた。

「こらあつアル！ またお前かあ！！」

「いい加減捕まえてやるぞこいつ！」

見張りの2人にアルを止めることは叶わず、しかし即座に怒号を飛ばしつつアルを追い立てた。

「へへっ……捕まえてみなって！」

アルは見張りの大人達をからかいつつ、迅速に遺産から離れて丘を下り、大人達もそれに続く。

(……よし)

それを見計らい、トーマは草むらを飛び出して古代の遺産へ走る。彼の身長を超える高さのバリケードに手間は掛かったが、それでもアルが囷として見張りの大人達を追い払ってくれたおかげで、こうして聖域の内側へ侵入することが出来た。

古代の遺産に身を隠すように屈みつつ、周囲の様子を伺う。

しばらくすると大人達を撒いたらしいアルもバリケードを越え、やがてメルも2人に合流した。

「ふうー。お待たせ」

「メル……首尾は？」

「まあ上々ってトコじゃない？ ついでにあさつての方向へアルが逃げてったって教えといたから、しばらく帰って来ないと思うわよ。アタシが代わりに見張りやっておくとも言っておいたから」

アルが囷に、トーマはその間に聖域内に侵入し、最後にメルがフオローする。作戦の第1段階完了である。

「んじゃ、今のうちだな」

「ところぞ。こうして無事到着出来たはイイけど、どっから中に入るワケ？」

「こつちだ……」

トーマを先頭に、遺産の外側を半周ほど回りこむ。

「ここだ。この部分だけ他の外壁よりも色が薄いだろう？ あの本によると、ここが出入り口らしい」

「ふーん……」

「隙間なく閉まつてるな」

「……どうやって開けるのコレ。見たところ、取っ手も何も無いんだけど」

彼らの目の前にある、他とは色の違う外壁。その違いは非常にさりげなく、こつして至近距離で注視するか、知っている者に指摘されてようやく気付ける程度だろう。

トーマが解読した古代書によれば、この部分が出入り口とのこと。だがそこにはドアノブや取っ手も無ければ継ぎ目すら見当たらない、文字通り壁にしか思えない。

試しに、メルが両手でそこを押してみた。

「よいしょっ……んぐ……っ」

「どうだ？」

「全然ダメ。押してダメなら……って、引きようがないわね。ちよつとトーマ、どつすればいいのよ」

「……さあな」

「あ、そう……って、ハアっ!？」

トーマの、予想外の返答にメルは思わず声を上げた。

「何よそれアンタ!? そんなコトも分からないでコレを使おうとか言い出したワケ!？」

「仕方ないだろう。僕が知っているのは古代書に書いてある事だけだ……あの本にはコイツが何なのかという事は記されていたが、どうやって中に入るのかまでは書かれていなかったんだから」

アルはそんなことでは気を落とさず、自分も色々試してみようと扉に近付くが、一方でメルは酷く落胆していた。

「……最っ低。もしかしたらなんて期待したアタシがバカだったわ」

「まだ入れないと決まったわけじゃないだろう……今のところ、その手段は思い付かないが」

「アンタねえ……」

掴みかからんばかりの勢いで、メルがトーマと口論を始める。その後ろ、扉の前にいるアルが何やら声を出したが、2人の気は惹かれなかった。

「人に危険まで冒させといて、重要なところはわかりませんか? どういうことよ!？」

「だからそれを調べる時間を稼ぐためにさっきお前にフオーローを頼んで……」

「……なあ、2人とも？」

「今は出払ってたって、時間が経てばに戻ってくるでしょうよ！
？ その間に見つからなかったら……！」

「……なあなあ」

「うっさいわよアル！ 何よさっきから！」

「いや、これ……」

「ああ！？ その開かずの出入り口がどうかした……の……」

アルの呼び声に振り向き、メルは言葉を失った。トーマもまた然りである。

見れば、先ほどまで周囲と色が違うだけというただの壁は、アルが触れている右手を中心に見たこともない何かのマークらしきものが浮かび上がり、青白い光を放っていた。

「なんだ……これは」

「ちょ、ちょっとアル！ 何をしたのよ！？ さっきまで何も無かったのに……」

「いや、俺も押してみようと思って普通に触っただけなんだけど……急に光り出して」

驚きのあまり固まった3人に対して、アルの手のひらを中心に広がる光の紋章は、その範囲を広げるように壁を走り、その輝きは目に見えて強くなっていく。

「僕やメルが触っても何もなかったというのに……」

「な、なあ？ コレって、手を離れたらマズイのか……なっ!？」

「きゃっ!？」

「なんだ!？」

壁を走る光の印が、周囲と色が違う部分全体に広がった瞬間、彼らが今までに目にしたどんな灯りよりも強く、直視出来ぬほどの眩い光を放った。

あまりのまぶしさに目を閉じ、顔を背けた3人。

その光が放たれていたのは、ほんの数秒だろうか。

次に彼らが目を開けた時には先ほどまで確かにあった色違いの壁は姿を消し、その部分はまさに出入り口へと変わり、古代の遺産の内部が覗けるようになっていた。

「今の……なんだったの？」

「何とも言えない……詳しい事はわからないが」

「……………」

「……アル？」

「す……すっげえええええええつ！！」

「いつ！？」

思わず声を上げ、キラキラと目を輝かせて興奮しているその反応は実に彼らしいものだった。

「み、耳が……耳がキーンって……」

「……アル。興奮するのも分かるが大声は出すな」

「あ、悪い……でもすごかったな！ 見たか！？ さっきの光！」

「ええい、うっさいわ！」

「あだっ！？」

アルの興奮状態はメルのげんこつで無理矢理静められた。

「な、なにも殴らなくても……」

「うっさい。鼓膜が破れるかと思ったわよ」

「……さっさと入るぞ」

2人のやりとりは無視し、トーマはさっさと古代の遺産内部へ足を踏み入れる。メルもそれに倣い、アルも頭のごぶを撫でつつ中に入っていく。

古代の遺産内部は薄暗く、やや手狭な部屋といった印象の空間だ。空気が埃っぽい室内には灯りが無く、唯一の光源は彼らが今入ってきた出入り口から差し込む外の光のみ。

室内の様子を隅々まで見るためには、たいまつでも持ってこなければならぬだろう。

「……っ!?!?」

トーマがそう考えていた時。正確には、最後尾のアルが遺産内部に足を踏み入れた瞬間。それに反応したように室内が明るくなった。見上げれば、天井にある幾つもの光る球体……おそらく、あれが照明なのだろう。そこからまばゆい光が室内を外よりも明るく照らしている。

「……勝手に、灯りがついた」

「……どうなってんの……? べつに何もしてないのに」

「古代の技術というやつだろう……どういう仕組みなのかは分からないが」

照明が点いたことで、彼らが立つ室内の全容が確認できた。

天井こそ梯子がなければ届かぬほど高いが、室内の広さはそれほどでもない。

長方形のように横長で大人5、6人が横になれる程度の広さ。床は見たことのない素材の正方形の板が、隙間なく法則的に敷かれている。

向かいの壁。部屋の最奥には、壁を埋め尽くす一面の巨大な窓らしきものがあった。

『窓らしきもの』というのは、彼らがそれを『窓』ではないかと推測するしかなかったからだ。

断定できぬ理由は向こう側が覗けない事と、表面が真っ黒であるから。とはいえ、『鏡』にしては反射が弱い。

しかし、壁一面に広がったその黒い窓には光沢があり、室内の照明や、前に立ちすくむ彼らの姿をうつすらと映している。

そしてその手前には、両端の壁を繋ぐように横長の、いかにも頑丈そうな箱が設置されていた。

その表面には様々な色と形の突起物が並び、導線が乱雑している。

「なんかよくわかんないけど……スゴそうだな」

「古代の技術の結晶ってワケね……んでトーマ。こっからどうするん？」

「それをこれから調べるんだ」

トーマはそう答え、前方の巨大な箱を調べ始める。

その返答をある程度予想していたとはいえ、メルは呆れて両手を広げる。

アルはといえば、部屋の中央にあるキレイな球体に興味を向けていた。

飾りなのだろうか。部屋の中央にアル達の胸の高さ程度、円柱の台座があり、その上には珠が置かれていた。

それは、人の頭程度の大きさ。

雫を固めたかのような無色透明の球体で、照明の光に照らされ、控えめに輝いている。

「……………」

アルは思わず生唾を飲むように、静かにその球体を見つめていた。見た目には少しの凹凸もない、完全な真円の珠。

キレイという一言では言い表せない、不思議な物体だ。見れば見るほど、胸の奥から何かが湧き出てくるような感覚。その輝きに知らずと心惹かれていく。

ふと我に返れば、彼は目の前の球体を両手で包むようにその手を伸ばしてしまっていた。

「……………」

その衝撃が彼の身体を駆け抜けたのは、2つの手のひらが球体に触れた瞬間だった。

アルが部屋の中央に置かれた球体に触れようとするのには気付か

ず、トーマは目の前の機器を調べ、メルはその様子を背中越しに眺めていた。

「……どう？　なんか分かりそう？」

「悪いがサツパリだな。下手に触っても……ん？」

これだけの巨大かつ不鮮明な兵器だ。構造も技術も複雑極まりないのは目の前にある大量のスイッチやボタン、レバー等の機器から容易に想像出来る。

しかし、運よくトーマは足元の床に埋まっている取っ手に気付くことが出来た。

くぼみに指を掛け、引き出してみるとそれは床から少しだけ飛び出す形になり、さらに力を込めて引いてみると床板がドアのように開いた。

「わっ……」

「これは……」

そこは床下に隠された収納庫であり、下に降りるための簡易な梯子も用意されていた。

中を覗き込むと、そこには大量の書籍類が棚にほとんど隙間なく陳列されている。

棚は両手を広げれば端に手が届く程度の大きさで、それが2つ。その他には何も置かれている様子はなく、収納庫自体の広さも深さも大したことはなさそうである。

「……あれも古代書？」

「どうだろうな……だがこんな所に保管されているという事は、この兵器に関する資料がある可能性が……」

「う……うわあああああ！？」

「え……！？」

トーマが、さっそく床下に降りて調べてみようとしたり、まさにその瞬間。背後から突然、アルの叫び声が響く。

2人が反射的に振り向くと、部屋の中央にある円柱の台座の前に立つアルの姿。その両手は台座の上にある透明の球体に添えられていた。

彼の両手とその球体から青白い光が流れ出、風に揺れるカーテンのように揺らめき、溢れている。

青白いカーテンは幾重にも交わり合って螺旋状の光線となり、煙が空に昇るように室内の天井を指したかと思うと、再び降下して最後には吸い込まれるように球体の中へと流れ込んでいく。

「あ　　ああああああ……！」

「な……何なのよあれ！？」

「　　っ！？」

メルは叫び続けるアルと、彼の両手と球体より溢れる光にしか見えていないようだったが、トーマだけは室内の変化に気付いた。

(これ……は……)

変化があったのは、トーマ達の背後。

数多の突起物と導線が走る巨大な箱の表面……古代の呼び方では、『操作盤』という物だろう。

その表面に、左右から光の筋が走り、広がっていく。ほんの一瞬で、操作盤上の隙間という隙間は、溝に液体を流し込んだように光で埋められた。

また、彼らが『窓』ではないかと考えていた光沢を持つ壁板。

その表面にも鈍い光が走り、面上を覆いつくしたかと思うと、端の方から次々と古代文字が光の集合体によって羅列されていた。

(光る古代文字……これは……もしかしたら)

「ぐ……っつっつっつ……！」

(っ！)

夢中になって室内の変化を目で追っていたトーマは、アルの叫び声でハッと我に返り、直感で叫んだ。

「アル！ そいつから手を放せ！」

「あああああ……！」

よほどの力で引き寄せられていたのだろうか。
両足まで使い、必死の思いで両手を球体から放したアルはその勢いのままもんどり打って倒れた。

「アル……！」

床に手をつき、肩で息をしているアルの元へ2人が駆け寄った。
彼が球体に触れていた時間は10秒にも満たなかっただろうが、
激しい運動でもしたかのようにその額には玉の汗が浮かび、顔色は
お世辞にも良いとは言えない。

「アル……大丈夫なの？」

「え……あ、ああ……なんとか」

「……何をしたんだ？」

トーマにとっては、アルの手と球体から溢れ出ていた青白い光や、
その直後に室内のあらゆる操作盤に光が宿ったことなど疑問だらけ
であったが、とりあえずはその質問を口にした。

「わかんねえ……なんかその丸いやつ。キレイだなあと思って……
触っただけなんだけど」

「……………」

トーマはアルの返答を聞くと、珠の取り付けられた台座へと近づき、
呼吸も控えめにしてそれを眺めた。

天井からの照明を反射し、控えめに輝く無色透明の珠。

たしかに綺麗極まりない。巨大なガラス玉のようなそれは、見た限りでは少しの破損も歪みもなく、まさに真円の球体。

いったいどのような技術を持ってすればこのような物体を生み出せるのか。もしくは、自然が生み出した物をたまたま人間が手にしたのか。

古代を知るにあたり、この珠だけでもそつとつな研究材料となるだろう。

トーマは目の前のそれを見つめながら、頭の中で推測と考察を繰り返していた。背後から聞こえるアルとメルのを話を聞き流しつつ。

「あいかわらずバカなんだから……ワケわかんないうちに手を出すとか、ちよつとは考えなさいよ」

「いや、なんか気付いたら触つててさ……」

「なによそれ……で、ケガなんかしてないでしょうね？」

「ああ、それは全然……っ!？」

「アル!？」

彼女の驚いた声でトーマは振り向いた。見ればメルの傍で、アルが片膝をついている。立ち上がるうとしてしているのだろうか。しかし、なぜかその表情は困惑している様子である。

「どうした？」

「なんか、アルが立とうとしたら急にふらついて……」

「だ、大丈夫だって……べつになんと……もっ!？」

アル自身も、自分の身体に困惑した。

負傷など1つもしていない筈だったが何故か全身に力が入らず、立ち上がった瞬間に体勢が崩れ、床に尻餅をついてしまう。

「どうしたんだ……大丈夫か？」

「悪いな……つと」

この様子にはさすがにトーマも駆け寄り、アルに手を差し出した。

「あの珠に触ってからか？」

「ああ。ケガとかはしてないはずなんだけどな……」

「……痛みはないんだな？」

「え？ ああ……全然。なんかだるいけど……力が抜けたっていうか」

たしかに、外傷どころか服の損傷1つも見当たらない。

しかし今、彼は確実に彼自身しか感じられない不思議な脱力感とでも言うのか。そういったどこか普段と違う、妙な違和感を覚えていた。

(あれに触れてから……いや、正確には『あれに触れて、あの光が出てから』の脱力感が……)

「トーマ？ ……おい」

「……よし」

何か決意したのか、彼はそうつぶやくと先ほどアルが触れていた台座に近付いていく。

「どうしたんだよ……？ ……なんか見つけたのか？」

「……僕もコイツに触れてみる」

「……はあ！？ ……アンタ正気なの！？」

「当たり前だ……アル、コイツに触ったとき、何か感じたか？」

「何かって……なんか、不思議な感じだった」

「なによそれ」

「いや、ホントに不思議な感じだったんだって！ ……なんていうか、吸い込まれるような……だんだん力が抜けていって……」

「それだけか？」

「……うん。だから痛いとか熱いとか、そういうのはなかった」

「……なら、試してみる価値はあるな」

トーマは決心し、目の前の珠に両手をかざした。

「ちょ、ちょっと！ まだ危険かどうか……！」

「だからこそ、試すのさ」

「あつ……バカ……！」

メルは止めようとしたが、時既に遅し。

トーマの両手のひらはその球体を左右から包むカタチで、しっかりと密着した。

「　　っ！」

メルは思わず目をつぶって身をかがめ、アルはじつと彼の背中を見つめる。

この球体は何なのか、アルが触れたときに溢れ出た光は何だったのか。

全てが謎で、憶測で考えるしかない現状では、正直な話かなり危険な賭けであることはトーマ自身も重々承知していた。

だが結果はといえば、肩透かしであった。

「何も……起きないわね？」

「……そのようだな」

トーマはその両手を、先ほどアルが触れていた時間以上に触れさせていた。しかしながら、変化はみられない。

彼自身が何も感じず、また先ほどの青白い光も一向に現れる気配がない。

部屋の中は外の波音が聞こえてくるほど静寂そのものだった。

「な、なーによ。とんだ期待ハズレね……ま、この程度でビビったりなんてしないけど」

「いやお前……トーマが触ろうとした時、滅茶苦茶怖がってアダっ!？」

「うっさいわ! ビビってないって言うてんでしょ!」

「あだだだ! 髪の毛はやめろって! 抜ける抜けるっ!」

アルとメルの間もと変わらぬ他愛のない小競り合いを、トーマは無言で見つめる。

頭の中で、推測を続けながら。

「……メル」

「ごんの……! って、あ? なによトーマ」

「お前もやってみろ」

「……ハアっ!？」

「じよっ、冗談じゃないわよ！　なんでアタシが……！」

「……ここにいる3人で、試していないのはお前だけだ」

「そりゃ分かってるけど……冗談じゃないわ！　そんな得体の知れないモノに触るなんて……」

「大丈夫だ。僕が触ってもなんともなかったし、アルも……不思議な光は出たが、ケガ1つしていないだろう？」

「ど、こ、が、大丈夫なのよっ！　安全だつて言い切れないでしょうが！　アタシが触ったときに爆発でもしたらどう責任とんのよ！？」

「安心しろ。ちゃんと埋葬までは責任を持って……」

「お亡くなりになった後の心配なんてしてないわよ！」

「ああ……分かったからあまり大声を出すな。そろそろ見張りの大人達も戻って来るだろうしな……聞かれたらマズイ」

「むっ」

「……ってことは、急いだほうがいいんじゃないのか？」

「っ」

「そうだな。急いだほうがいいだろうな……」

「ぐ……わ、分かったわよ。やればいいんでしょ。やれば」

2人の視線に耐え切れなくなったメイは、腑に落ちぬ表情のままズカズカと台座に近付いた。

「……何が起こつても知らないからね」

「かまわん……」

「……爆発しなければいいよな」

「ちょっとアル！ 演技でもないこと言っくんじゃないわよ！」

おっかなびつくり。

鋭い切っ先にでも触れるように恐々と、メルはその球体に両手を触れさせた。

「……ど、どう？ 光ったりした？」

「……何もないな」

「うん。何もなかった」

「安心といった様子で、メルは深いため息をつく。

「よかったなメル。何もなくて」

「な……何よ。言っとくけど、ビビってなんかないんだからね」

「はいはい。分かってるよ」

「……なんかその笑顔がムカつく」

「いびびびびっ!？」

パン生地でも伸ばすかのように、アルの両頬に手を掛け、全力で引っ張る。

そんな様子を他所に、トーマは先ほどまでの実験結果について思慮をめぐらせていた。

(……あの不思議な光が出たのは、アルが触れたときだけ……僕とメルの中には、何もなかった)

「まだ伸びるかしらー? ほれほれ」

「ひだいひだいひだいっ……! (痛い痛い痛いっ……!)」

(そういえば……入り口の扉もアルが触れた瞬間、光り出して開いたんだっとな……)

「とーみゃっ! とーみゃっ! (トーマー! トーマー!)」

(もしかしたら……これは)

「とーみゃっ! (トーマっ! (」

「ん……どうした? アル」

練り生地のように限界まで頬を引き伸ばされながらも、必死に彼の名を呼ぶアルの声にようやく気付いた。

「どうひたじやめーよ！ たふけてふれって！（どうしたじゃねーよ！ 助けてくれって！）」

「……ああ、そういうことか」

アルの叫びの意味がようやく理解出来たトーマが、メルの怒りを鎮めにかかった。

「メル……気持ちは分かんがその辺にしておけ」

「なによ。アンタも引つ張られたいの……ってぎゃあああっ！？ 顔にツバ飛ばしやがったなコイツうう！」

「いつ、いや、わじゃとじゃ……あががががっ！」

「やれやれ……2人とも。そんなことしてふざけている暇は無くなっただぞ」

「は？」

「ふあに？」

この言葉に、さすがの2人もピタリと動きを止めて注目した。

「……次にやるべきことができた。言うなれば、作戦の次の段階だな」

「作戦って……」

「ほんどはひゃにするんだ？（今度は何するんだ？）」

「アル、お前は村に戻って水と食料……毛布も必要かもしれないな。それらを集めてきてくれ」

「いてて……ん？ とーま、ここに住むのか？」

「なわけないだろう……1人の人間が、1日生き延びることが出来る最低限の量でいい……それから、メルはいったん外に出て様子を見てきてくれ。そろそろ見張りの大人達が戻ってきてもおかしくない」

「ん……まあ、最初からそれはやるつもりだったけど」

「もし戻ってきたら、適当な理由をつけてこの場所からもう一度離れさせて欲しい。お前の口先ならなんとかなるだろう？ アルがここに食料を運び入れるだけの隙が作れればそれでいい」

「ふーん……って、ちょっとまった。アンタもしかして……」

「ああ。僕は明日までここに籠る」

トーマの返答は、メルの想像した通りのものだった。

「まずは……こいつからいくか」

返答するや否や、トーマはさっそく彼の作業を開始した。

床下に収納されていた大量の蔵書。それらの翻訳作業である。

「ちょ、ちょっとトーマ。本気？」

「冗談で言うと思うか？ こんな所に隠されていたということは、何かしらこの兵器に関連した書物もあるだろう」

「って言ったって……これだけの量の」

「だから泊り込みでやるんだ。こんな大量の書物、持って帰るのは時間も労力も掛かるからな」

「わかった……じゃあトーマ、また後でな」

「ちょっと、アルまでそんな」

「メル」

トーマが床下から上半身を出し、困惑するメルを諭すように話す。

「もう時間がないんだ。僕たちには……いや、イリヤには」

祭は明日。

明日の深夜、日付が変わる頃に祈りの神子は殉教者となる。

「……………」

古代の遺産と呼ばれるこの兵器を使用し、空の雲を晴らすという策は練れた。

しかしそれを実行する手段について何もわかってないに等しい現

状を考えると、成功率どころか試みることができるかすら、可能性は限りなく低い。

かといって、それ以外に彼らの親友を救う方法など、あるとは思えない。今更、探している時間もない。

「メル……頼むっ！」

アルの行動に、メルは声こそ発しなかったが少々驚愕し、困惑した。

「アル……」

「俺……イリヤを助きたい……！」

少なくとも彼女が知っている限りで、人に頭など下げたことのないあのアルが今、自分に向かって頭を下げてきた。それも、実に礼儀正しく誠実に。

「俺、イリヤに……死んで欲しくない……！」

メルの心理が揺らぎかけたが、アルは更に床へ手と額をつけ、懇願した。

「頼む……！ 俺の告白なんてどうだっていい……あいつが死なないでくれれば……！」

「あー……」

アルは姿勢を崩さず、振り返ってみればトーマは訴えかけるようにジッとこちらを見つめている。

まいったなという誰に向けてか分からぬアピールで、メルは右手で自身の後頭部をくしゃくしゃと掻きまわした。

「……わーったわよ、わかりました。ここまで来たら最後まで協力するわよ」

「……いいのか？ 強制はしていないぞ」

「半ば強制してるみたいなものじゃない……それにこの状況で断つたら、アタシどころだけクズよ？」

「ああ……僕もアルの土下座なんて初めて見たしな」

「これが見ただけでも十分奇跡ね……ほらアル、いつまで床にキスしてんの。顔上げなさいよ」

声をかけられたアルは、彼女の顔色を伺うように不安な目をしていた。

「いいのか……？」

「何度も言わせんじやないわよ。アタシがいいって言ってんだからいいのよ……ほら」

差し出されたメルの右手。アルも右手でそれを握り返し、立ち上がる。

「……ああ！ メル、ありがとう！」

立ち上がったアルは手を握ったまま、はじけるような笑顔でメル

に礼をした。

途端、メルは気恥ずかしい気持ちになり、手を振り払って背を向ける。

「ふ……フンっ！ バカじゃないの？ まだ成功するって決まったワケでもないのに」

「大丈夫だって！ 俺たちなら、きつとうまくいくさ！」

先ほどと同じく、アルの笑顔には一点の曇りもない。

「……やけに自信たっぷりだけど根拠は？」

「ないっ！」

「……やっぱりバカだわコイツ」

悪態をつきながらも、メルの口端は微笑んでいた。

「じゃあアタシが外の様子見てくるから……アルはちょっと待ってなさいよ。見張りがもう戻ってきてるかもしれないんだから」

「おう！ わかつ……痛っ！？」

金槌で殴られるのに匹敵する頭頂部への衝撃が、アルを黙らせた。

「見張りが戻ってきてるかもしれないから、大声出すなって言っ
てんのよ……アタシの協力を無駄にする気？」

「いてて……わりい」

「……じゃあ行って来るわ」

「ああ……注意するようにな」

「最善は尽くすわよ……アタシだって、あの娘に死んで欲しくないからね」

一足先に遺産内部を後にし、外の様子を確認したメルが戻ってきたのは、それからすぐだった。

「……見張りは戻ってきてなかったわ。外に出るなら今のうちよ、アル」

「わかった……じゃあトーマ。すぐに戻ってくる」

「僕と違って、お前は急がなくていい……見つからないようにだけしてくれ」

「りょーかいっ」

アルは小さく敬礼をし、突風のように外へと飛び出していった。

「……急がなくていいというのに」

「じつとしちゃいられないんでしょ……んじゃ、アタシは外で待機してますかね……トーマ。アンタ次第なんだから、しっかりやんなさいよ」

「言われずともやるぞ」

それぞれが一時の別れの挨拶を済まし、各々の役割へ向かい、散った。

すっかり静かになった古代の遺産内部に、古代書のページをめくる音だけが響く。

(……僕次第、か)

彼女の言った一言は、大筋でその通りだろう。祭が終わるまでに雲を晴らすには、当たり前だがこの兵器の使用方法を知らなければならぬ。

実際にそれが叶うかどうかは、この資料の山に目当ての物があるかどうかと、トーマの翻訳作業の速度に掛かっている。

しかし、彼の脳内に引つ掛かるモノがあつた。その光景を思い出すたび、彼のページをめくる手が止まる。

(……あの球体が反応したのは、アルが触れたときだけだった)

ここに入る時にも、アルが扉へ触れたのに反応するように光を放ち、開かれた。

(あの青白い光……仮定でしかないが、もしかしたら)

頭の中に1つの推測が浮かぶが、今はこちらを優先すべきだと決め、彼は再び翻訳作業に集中した。

(だとしたら……最後はあいつ次第かもしれないな……)

限られた時間の中、膨大な資料を前に彼の孤独な奮闘が始まった。

そして、彼らは祭の当日を迎える。

別れの夕焼け 1

祭の当日。

時刻は夕方より少し前。

「……よしっ。忘れ物はなし、と」

アルはその背に大きく膨らんだバッグを背負って秘密の地下室を後にし、森の出口へと向かう。

彼の目指す先は古代の遺産。その中では、トーマが昨日からずっと内部に籠り、古代資料の翻訳作業を続けていた。

バッグの中身は、大量の古代書。

全てトーマいきつけの地下室から、彼の指示で持ち出してきた物である。

なんでも、地下室の古代書と照らし合わせたい箇所があるのとことで、他に手伝えることが見つからなかったアルが、こうしておつかいをしていた。

「あ……」

対峙した2人は同じように驚き、同じように固まった。

アルが森を抜けた先、丘のふもとで、偶然にもイリヤとばったり遭遇してしまったのだ。

互いになんと声を掛けていいか分からず、視線を泳がせるだけの無言時間。

「……あの」

気まずい沈黙を破ろうと口を開いたのは同時。互いを見合わせ、また気まずくなり、再び沈黙がその場を包む。

実際は数秒であったかもしれないが、体感時間ではもっと長く、そして気まずかった。

「その……ど、どこに行くの？ そんなに荷物持って……」

再び口を開いたのは、彼女の方が先だった。

「え……あ、ああ……ちょっとな」

無意識に背中の荷物を隠すような姿勢になってしまつアル。

（イリヤに知られるわけにはいかないもんな……ごまかさないと）

「……アル？」

「えっ……あ、ごめん。ちょっと考え事してて……」

今夜、彼らが実行を予定している作戦を知られるわけにはいかない。
い。

アルはなんとか話題を逸らそうとした。

「い、イリヤこそ……どうしたんだ？ こんなところで」

今日は祭の当日。あと数時間も経たずに宴が始まってしまつ。

だからこそ、今年の祭の主演と言つてもいい彼女には、こんな場所にいる余裕などなさそうであるが。

「私はその……さっきアルの家に行ったんだけど、留守だったから……」

彼女はアルの顔を直視するのをためらっているのか、うつむいたまま答える。

「俺の家？」

「うん……トーマとメルにはちゃんと言えたんだけど、アルには……」

「……？」

「ねえアル。ちょっとだけ時間ある？」

そう言った彼女は顔を上げ、視線を泳がせずしっかりとこちらを見つめていた。

「え……あ、んーと……」

古代の遺産で作業を続けているトーマのことが頭に浮かんだが、背中の古代書たちが今すぐに必要という訳ではなさそうだったし、少し話をする位の遅れであればかまわないだろう。

「ああ……いいけど」

アルが答えると瞬間、彼女は嬉しかったのかその表情から緊張が解け、微笑みとなった。

「よかった……じゃあ、あそこに行こう？」

「あそこ？」

イリヤが指差す先に目を向けると、アルの目指していた古代の遺産が見えた。

一瞬ヒヤリとしたアルだったが、どうやら彼女が指し示しているのは、遺産の横にある小高い丘だったようだ。

「あそこは……」

「うん……この前、一緒に話した場所」

目と鼻の先ということとトーマたちに見つかるかもしれないが、アルはとりあえず遺産そのものが目的地でなく一安心した。

「ダメ……かな？」

「いや……いいよ。行こうか」

「うんっ！」

アルが先に、イリヤはその後ろに。

2人は夕焼けに変わるうとして空の陽に目を細めつつ、古代の遺産横の丘へと歩き出した。

丘へと向かう道中、2人の間には微妙な空気が流れていた。

何を話すわけでもない、互いに何を言えいいのか探している間の無言。

丘を上り切ろうかという時、イリヤがようやく言葉を口にした。

「ねえアル……すごい荷物だけど大丈夫？ 手伝う？」

「へーきへーき。そんなに歩いたわけでもないし」

「でもバッグがパンパンだし……おつかい？」

「ああ。ちょっとトーマに頼まれて……」

「トーマに？」

アルは内心、失言だったかと後悔した。トーマの名前を出したのはマズかったかもしれない。

いつもなら問題ないだろうが、今日は祭の当日だ。この島に住んでいる者であれば、そちらのほうにだけ気が向いて当然である。

なのに祭の準備をするわけでもなく、親友と森の中をウロウロしていたなど、どうしてそんなことをしているのかと疑問に思われてしまうだろう。

「そっか……なんだか、安心した」

おそらく向けられるであろう彼女からの追求に、どう答えればいいのか考えていたアルにとって、彼女の返事は予想外であり拍子抜けであった。

「なあイリヤ……安心したって」

「わあ……！ ねえアル、見て見て！」

丘の頂上に着くとほぼ同時にアルは質問を口にしたが、彼女の興味は別のモノに向けられてしまっていたようで聞きそびれてしまった。

彼女の声は、新しいものを発見した子どものようににはしゃいでいる印象だった。見れば、こちらに背を向けているイリヤ。

何を見つけたのか、アルも彼女に従い、彼女と同じモノを見ようとした。

「……………ね？」

「……………おお」

視線の先にあつたのは夕焼け空。

眩^{まはゆ}い赤の太陽が、水平線へとその身を沈めようとし、白い雲を染めている。

いつもと変わらず、雲の向こうに隠れてしまっただけはいるが、その大きさも色もはっきりと分かる。

優しく髪を撫でる風は、この場所が彼らを出迎えてくれているような気がした。

「キレイだよね」

「ああ……………」

今までにも数え切れぬほど見てきたが、これほど夕陽が強く、大きいと思えたことはあっただろうか。

「……………こんなにキレイだったけ」

抱いた疑問を、無意識に言葉にしていた。

「今日は……雲が薄いんじゃないかな？」

「……………」

「でも、やっぱり雲は晴れないね……もしかしたら、最期に見れるかもしれないって思ったんだけど」

イリヤは答え、アルに笑顔を向けた。

哀愁を含んだ笑顔。

日常と変わらぬ姿を演じようとする彼女の顔を、アルは直視出来なかった。

「……なあ、イリヤ」

「なに？」

「さっき……安心したって、言っただろ？ ……なんでだ？」

「……えっとね」

「……………」

「……なんでだろ？」

「なんだそりゃ」

「うん……」

アルは変わらず、顔を背けたまま。

イリヤは再び、海に向こうにある夕陽へと体を向ける。

「トーマと何かしてたんでしょ？ ……だからかな」

「……？」

「アル達がいつも通りみたかったから、安心したって」ト

「……そうなのか？」

「うん……だってやだもん。悲しんだまま、お別れするの……」

（お別れ……）

彼女自身の口から、改めて目の前の現実を突きつけられた気がした。

このままいけばあと数時間で彼女はその命を散らし、文字通り別れることになってしまう。永遠に。

「ねえ、アル」

彼女は、すぐ隣でうつむいたままの彼の名を呼んだ。

その胸の中で、揺れ動いていた決意を固めて。

別れの夕焼け 2

「……ちゃんと見て」

「……うん」

アルは返事こそするが、目の前にいるはずの彼女に自分の名を呼ばれても、その顔を上げることが出来ないでいる。

どんな顔を今の彼女に向ければいいのか分からなかったことと、彼らがやるうとしていたことを彼女に秘密にしているという、後ろめたさのようなものを感じていたから。

そんな彼に向けて穏やかに、それでいて強く、彼女の声が続く。

「ちゃんと……私を見て。私はまだ生きてるよ？ まだここにいるよ。」

「……うん」

「だから……私を見て。お話出来るの……これが、最期だと思うから」

「……」

足が地に着かない心境のまま、アルはうつむけていた視線をイリヤへと向ける。

目の前の彼女を見て、アルは出来ることなら自分自身を殴ってやりたいと思った。

彼女も不安なのだ。

自分が死ぬと分かっているが、彼女は祭に臨もうとしていた。

アルはそれを、彼女の強さだと思っていた。思い込んでいた。だがそれは勘違いだと思いきらされた。遅すぎたかもしれないが、ようやく気付くことが出来た。

彼女は泣いていた。凜と開かれた眼からは、頬を伝う雫が流れている。

彼女は怯えていた。獲物とされた小動物のように。

今、目の前にいる彼女の姿は、吹けば消え去ってしまいそうなほど弱弱しく、とても儂い。
そんな印象を受けた。

「ごめん……俺」

「うん。私こそ……私から話したいって言ったのに、ごめんね……でも、ちゃんと言っておきたくて。アルには……ちゃんと伝えてから、お別れにしたかったから」

「……何を？」

「うん……あのね……」

彼女は涙を拭い、再び言葉を紡ぎだした。

「えっとね……まずは、ごめんなさい。この前、家まで来てくれたのに……私、嘘ついて出て行っちゃって……それから、ありがとう」

涙は流れ続けていたが、それでもイリヤは精一杯の笑顔を作った。それはアルが一瞬戸惑ってしまうほどの、悲しくも優しい笑顔だった。

「なんで……お礼なんて」

「アルの今までの、全部に」

アルは思わず、また顔を背けてしまいそうになる。
しかし先ほどの彼女の言葉を思い返し、それはとどまることが出来た。

「だって俺……俺、イリヤにお礼を言われるようなことなんて、何も……！」

「……そんなことないよ？」

「……………」

「アルが優しくしてくれたこと……笑顔にしてくれて、励ましてくれて……いっぱいあって、いっぱいあり過ぎて、全部は言い切れないけど……だからその全部に、ありがとう」

「もちろん、トーマやメルもだけど……アルがいてくれたから、

私は寂しくなかつたよ。お父さんやお母さんがいなくても、私は笑顔でいられたよ?」

「みんながいたから……アルがいてくれたから、私は笑顔でいられたの……」

「だから……ありがとうなの。みんなといられたから……アルといられたから、私は幸せだったから。だから……ありがとう」

時に詰まり、時に間が空きながらも、彼女は彼女の想いを言葉にしていく。

すでに彼女の声は涙に震え、胸の奥から振り絞るのが精一杯な状態だった。

全て言い終えたところで一呼吸し、アルの言葉を待たずにその背を向ける。

「付き合わせちゃってごめんね。もう行かなきゃいけないから……だから」

「……………」

「だから……バイバイ」

消え入りそうな声で彼女はその言葉を残して、別れのつらさを振り払うように村へ向けて走り去ろうとした。

「イリヤ!」

アルはそれを止めた。彼女の名を呼んで。

「……なに？」

イリヤは振り向かない。

だが足を止め、背中越しにアルからの言葉を待つことはした。

「……諦めないでくれ」

「……」

「諦めて欲しくない。イリヤには」

「……」

彼女はしばし言葉に迷ったが、寂しげにつぶやいて返す。

「ムリ……だよ」

「まだわからない」

「……わかるよ」

イリヤにしては珍しく、少々突き放すように答え、その場を後にしようと再び歩き始めた。

「俺は諦めてないっ！」

先ほどよりも遠くなった彼女の背中に、アルの声が飛ばされる。

「俺だけじゃない。トーマもメルも……俺達は、諦めてない……
！ だけど……だから、イリヤには諦めないで欲しい」

「……そんな」

「諦めなければきっと……絶対。絶対に、奇跡は起きる……起こしてみせるから」

「……………」

彼女は振り返らず、走り去っていった。

聞こえるかどうか分からないほど小さな声で、「さよなら」と言い残して。

丘の上で独りになったアルは、しばしその場で立ち尽くす。

少しづつ小さく、遠くなっていく彼女の後姿をただ見つめるだけ。

(……いいんだよな)

イリヤに打ち明けずにいた、アル達3人が実行しようとしている秘密。

彼女に知られてしまえば、そんな危ないことはやめると、きっと反対するだろう。

だから今は胸の中で謝っておいた。その隠し事について。

「……………」

アルはもういちど空を見上げ、決心を強める目的で自分の両頬を叩いた。

ここで呆けている暇はない。祭の時間が迫っているのだ。

耳に届く波の音と海鳥の声。

頭の中では彼女の別れ際の言葉がいつまでもこだまし、悲しさを隠した笑顔が目の奥に焼きついている。

（待っててくれよ、イリヤ……！）

もう振り返りはしない。

前だけを見て、彼女を助けるために、前に進むと決めたから。

アルは傍らに置いていた荷物を担ぎなおし、古代の遺産へ向けて駆け出す。

彼の到着を待っているであろう親友たちの下へ。

彼らの手で、奇跡を起こすために。

いつもより少しだけ雲が薄い、夕焼けがまぶしい空だった。

祭

アル達が暮らすこの島で5年に1度だけ開催される、島全体を挙げての催しサイ祭。

その目的は2つ。

1つはこの島に住む島民が一同に会しての宴、お祭り騒ぎとしての『祭』。

もう1つは宴も落ち着く頃、日付が変わる時間になって行われる儀式としての『祭』。

島内から1人だけ選ばれ、『祈りの神子いのみこ』とされる少年少女。

それまで宴が催される広場に建てられた、木造の檣やぐら。

それを登った先に構えられた祭壇で、神子は首をはねられ、その血肉を島の捧げ物として神に祈る。

空を覆う雲が晴れるように。

人々が星空を、もう一度取り戻せるように。

祭の始まり 1

祭が始まってからしばらく後。

広場には老若男女問わず、島中の人々が集まり、宴は続いていた。踊り、唄い、食べて、飲む。

各々が、それぞれの方法で5年に1度のこの日を祝い、楽しんでいる。

広場のはずれ、宴の様子を一望出来る場所に、ある席が設けられていた。

そのテーブルに着いているのは2人。

村長と、今年の神子として選ばれたイリヤである。

祈りの神子のために用意された美しいドレスとアクセサリーに身を包んだイリヤ。

けれどその表情は、宴の参加者たちと違い、寂しさを帯びていた。

これから現実のものとなる、彼女に課せられた使命を考えれば、それも仕方ないだろう。

「……………」

テーブルに用意された料理にも手をつける気にはならない。すぐそこで騒いでいる島民達の表情は、ほとんどが笑顔だ。

現実と夢の狭間にいるようで、まるで自分だけがこの世界から切り離されてしまったような錯覚すら感じる。

(あと…………どれくらいかな)

正確に時間を計っていたわけではないが、祭が始まってからそれなりの時間は過ぎたはずだ。

それだけ彼女は永遠の眠りへと近付いたことになる。

彼女は自分の首元へ手をやった。

大小の宝石が散りばめられた首飾りに指先が触れる、ヒヤリとした感触。

この日のために用意されたそれは、代々祈りの神子が儀式に臨む際に身に着けてきた物だという。

外見だけなら美しく装飾されたその首飾りも、今の彼女にとっては儀式から逃げられぬよう着けられた首輪のように思える。

確かに今、ここにある自分の首。それがあと少しすれば胴体と切り離されるのだ。全身に軽い悪寒を感じた。

「……怖いかね」

「えっ……」

まるでイリヤの心情を読み取ったように、隣に座る村長から声をかけられる。

「怖いんじゃない。無理せんでもええ」

「い、いえ……」

「無理せんでええ。怖いのは当たり前じゃ……今日までにワシが見てきたどの神子も、お前さんと同じ顔をしとったよ」

「……………」

覚悟は、決めていたはずだった。

しかしこうして実際に祭が始まり、自分に間違いなく死が訪れることを再認識したとき、今までとは違うはつきりとした恐怖心が襲ってきていた。

逃げ出したいという気持ちと役目を果たさなければならぬという気持ち。その2つが彼女の中で葛藤する。

まるで心臓を掴まれ、歪ませられるようなこの感覚は彼女にしか解らず、それは彼女が想定していたものよりもずっと苦痛だった。

「……………皆、楽しんどるようじゃのう」

じつと宴の様子を眺めていた村長がつぶやく。

それを聞いて、イリヤもうつむいていた顔を上げる。

たき火を囲んで踊る者、酒を飲み交わすもの、楽器を演奏するもの……………さまざまだ。

各々にとって最高の方法で、皆が5年に1度の宴を楽しんでいる。共通しているのは、誰も彼もが笑顔だということ。

この後の儀式で、1人の命が絶たれてしまうことなど忘れていくかのようじ。

「……………皆を恨まんでくれんかの」

「そつ、そんなことは……………」

「何をと思うかもしれんが……………皆つらいんじゃ」

まるでイリヤに慈悲を請うかのように、村長が語りかける。

「私は……べつに」

「わかっておる。年端もいかぬお前さんのような子どもを犠牲にするなど、如何に理由をつけても許されないものかもしれん……」

「そんな……」

「じゃが、仕方ないんじゃよ。昔から、お前さんが生まれる前からこの島では祭が行われてきた……それこそ、ワシが生まれるよりも昔からな」

「……………」

「それまでずっと続いてきたものを急に変えるというのは難しい。有無を言わさぬ力が必要じゃ。集団に流されない……大多数を味方につけられるような、の。情けないことに、ワシにはそんな力はなかったのよ」

イリヤがそつと覗き見た村長の横顔。

その視線は前方の宴を眺めているようでいて、どこか遠いところを見つめていた。

「ワシでも疑問は……いや、ワシだけが特別なわけじゃない。むしろ祭について疑問を抱かない者の方が少ないじゃろう……「祈りのために島の仲間であり、大切な子どもを犠牲にしているのか？」とな。……お前さんも、考えたことはあるじゃろう」

「……はい」

「しかしな、表に出ない個人の疑問は流されてしまう……たとえ
勇気を持って表に出したとしても、『伝統』や『歴史』という一言
で流されてしまうじゃろう……ワシもそうじゃった」

「村長……も？」

「うむ」

村長はすぐ隣に座るイリヤの方を向くことはなく、ただ遠くを見
つめ自慢の白い顎ヒゲを撫でている。

「あの、止めようとしたんですか？ ……その、村長は」

「ふおっふおっ……今でこそこんなジジイじゃが、ワシにも若い
頃はあったんじゃないよ。お前さんと同じ位の時がな……。お前さんた
ちほどの年になって、自分で色々と考えられるようになって……当
時のワシが疑問に思わんワケはないのう。まあ……疑問を抱いたき
っかけは、情けないものじゃったがな」

「きっかけ……」

「……それまでのワシは、祭について何の疑問も持っておらんだ。
自分には関係ない、誰かの話じゃと考えておってな……若いという
のはある種、罪じゃのう」

「何か、あったんですか？ その……村長が若い頃に」

「……当時のワシの想い人が、祈りの神子に選ばれての」

「……！」

「そうやって初めてワシは、祭というものを詳しく知り、疑問を持ったんじゃないよ……情けない話じゃがの」

聞こえてくる宴の音と声は、やはり遠くのもので。

今のイリヤにとって胸に届く声は、村長の話す言葉のみとなっていた。

祭の始まり 2

「そんな……恋人が」

「いやいや……好いていたとはいえ、一方的なものじゃったよ。きちんと想いを伝えたワケでもなかったしの」

「そう……ですか」

「うむ……初恋でな。だからこそ、必死だったんじやろうな。ワシはがむしゃらになったよ。あの人が殺される前に、なんとかして祭を止めようとな」

「……たぶん私も、そうすると思います」

「とはいえ……当時のワシ1人がいくら騒いだところで、大人達にとってはうるさいだけの邪魔者じゃった。どうにかしようと思巻いてはいたが、止められるハズもなくてな」

「……………」

「その時の怒りも悲しみも、残酷じゃが時間が流れるにつれて忘れていったの……。ワシも年を取って……村長になってな、そこで止められていれば良かったんじゃが……周りに流されて祭を続けてしまった。ワシの所に巡ってきて、ようやく思い出せたんじゃ。その時の感情をな……後の祭りじゃが」

そこまで語り、ようやく村長はイリヤの方へ顔を向けた。

「巡ってきた……?」

「……ワシには孫娘が1人おつての……生きていれば、お前さんよりちと年上かのう」

「……………!」

「情けない話じゃよ……自分の周りのことになってようやく、止めたいという気持ちを思い出すんじやから」

「じゃあその……お孫さんは」

「ワシが……この手でな。それまでずっと続けていたものを、自分の孫じやからといって急に止める事はできなかった……本当に情けないのう」

「……………」

「昔……ワシが若かった頃にはの。祭に宴は無かったんじやよ」

「えっ……………」

「こんな宴は無く……ただ祈りの神子の儀式を行うだけの静かで、淡々としたもんじやった。さっき、皆もつらいと言ったじやろ?」

「この島に住む者、誰だつてつらいハズじや……選ばれた者も、肉親も、その周りの人間もな」

「……………」

「ワシが村長になってから、この宴を行うようにしたんじゃよ。祭を止められんかったワシの勝手な自己満足かもしれないが……せめて島の皆が笑ってこの日を迎えられるよう、笑って神子を送れるようにの」

「そう……だったんですか」

村長は再び、イリヤから視線を外した。
宴はまだまだ盛っているが、確実に儀式の時は近付いている。

「幻滅したじゃろ？ ……憎んでくれて、恨んでくれて構わん。それを止める権利など、ワシにはありません。何も止められなかった、情けない大人達にはの……」

「……そんなこと、ないです」

表情に出さずとも、肩を落としている村長にイリヤは声をかけた。

「ずっと昔から続いている……祭を止められないのは仕方ないです。誰も悪くなんてありません」

「じゃが……」

「村長も……大人の人達も、誰も情けなくなんてないです。私だつて……自分のことなのに、それが本当のことなんだって思うまで時間が掛かって……なんていうか、自分とは関係のないような気が、どこかでできて……」

それは、はつきりと意思を決めた者の声。先ほどまで彼女の心を支配していた恐怖は、影を潜めていた。

「だから、自分の周りのことにならないと、祭への気持ち……忘れてしまうのかもしれないと思います」

「しかし……ワシは」

「村長が……村長になってからなんでしょう？ 儀式の前に、この宴をやるようになったの……」

イリヤもまた、その視線を広場へと向けた。そこには、今もまだ笑顔が溢れている。

「こんなに賑やかで、皆が笑顔になれる宴を作ったんだから……村長は、自慢していいって思います。祭をこんなに楽しめるものにしたんだぞ……って」

「……………」

「今までの……神子として選ばれた人達のことばかりじゃありませんけど……私は嬉しいです。皆がこんなに笑顔で……しみりしてるよりも、ずっと。だから……」

隣を見ると、いつの間にか村長もこちらを見ていた。

イリヤは、彼女らしい笑顔を作り、向ける。決して消えることはない寂しさと、恐怖は隠して。今の彼女に出来る、精一杯の笑顔を。

「だから……ありがとうございます。私、立派に祈りの神子としての務め、果たしてみせます」

「……………」

その礼に、どんな想いを抱いたのか。
イリヤが推し量ることは出来ないが、村長は空を見上げた。

（ありがとう……か。悲しまれこそされ……礼など、されたことはなかったのう）

それは、自分の心なのか。
今までずっと縛り付けられていたものが、フツと解かれたような
感覚を覚えた。

（もういいじゃろ……？ もう、晴れてくれんかのう……この娘
で最後になるように……）

村長は声にも表情にも出さず、静かに遙か空へと祈りを込めた。
頭上では、今日までと何も変わらない、夜の闇に黒く染まった雲
がただただ流れている。

その時は間近に迫っていた。

5年に1度の儀式。そしてまた、幼い生命が散っていく。
誰もが、起こりえないのではと感じながらも、その奇跡に淡い期
待を寄せるしかなかった。

この宴に参加していない、3人の少年少女を除いて。

作戦、開始 1

「……なに話してんだろ」

村長とイリヤが座っている席の対面側。
宴が続く広場の隅、儀式のための祭壇がすぐそこにある草むら。
その中にひっそりと隠れ、様子を伺う2人の姿があった。

「さあね……」ここからじゃ聞こえないし」

祭の様子を探るよう頼まれたメルと、今のところやることが見つからないので彼女に合流したアルである。

「なんだかわかんないけど……あの娘が村長と笑顔で話してるってことは、いよいよ覚悟してるって思ったほうがいいわね」

「そっか……」

メルの分析に、アルは少なからずしよげる。

まもなく始まる儀式をイリヤが受け入れたのなら、彼女を救うためには何としても彼らがやろうとしている事を失敗するわけにはいかなかった。

「……っていうかアンタ、ここにいていいの？ 遺産の方にないか」

「トーマに聞いたら、なんか今は俺に出来ることないらしくてさ……イリヤの様子も気になったし」

「で、その肝心のトーマさんはどこ行ったのよ？ アタシに見張り押し付けてどっか消えてさ」

「ああ……なんか地下室に戻るとか」

「どうしても調べたい資料があつてな」

「っ!?!」

噂をすればな人物から突然背後から声をかけられ、2人は思わず叫びそうになるが、互いの口をとっさに押さえ込むことで事なきを得た。

「……何をやってるんだ2人とも」

「び、ビックリするでしょうが……! 音もなく近付かないですよ……」

「隠れて行動してるんだから静かにして当たり前だろうに」

アルも一緒にいるのだから足音で気付くだろうとトーマは考えていたが、当のアルはイリヤの様子を探るのに神経を集中させていたのが災いしたようだ。

「で、トーマ。なんか見つかったのか?」

久しぶりに目にした気がするトーマは酷く憔悴しており、両目のしたにはまたしても黒々としたくまが出来ていた。

昨日、遺産の内部に籠ってからほとんど休んでいない様子が見て

取れる。

「ああ。遺産については謎が解けた……懸念材料が消えたわけではないが」

「おお！」

「バカっ……！ 静かにしなさいよねアル……」

「あ、じめん」

「まあ……この距離なら気付かれないだろう。大人達の騒ぎ声のほうがるさいしな」

「不幸中の幸いな……っっていうかトーマ。資料を取りに行くんならアルに頼めばよかったんじゃないの？」

「アルに任せようと思ったんだが……最初に頼んだおつかいで、重要な書物をことごとく持って来るのを忘れてくれたな。おかげで、自分で向かった方が確実に効率的だと再認識出来た」

「……わりい」

「はあ……アルらしいわ。で？ これからどうするワケ？」

「僕とアルは古代の遺産に向かう。メルはこのまま祭を見張っていてくれ」

「俺も……？ なんか出来るのか？ 俺」

「それは向こうに移動しながらでも説明する」

「アタシはこのまま見張ってるって……このままだと、たいして問題なく儀式始まつちゃうわよ？ どうすんのよ」

「この場所からなら古代の遺産で何か起これば見えるだろう……もし儀式が始まるまでに何も起きる様子がなければ、なんとか儀式を遅らせてくれ」

メルは驚きと疑問を顔の表情で返した。

「……え、なに？ 儀式が始まりそうになったら、アタシが出てって暴れてぶち壊しにしろとでも言うワケ？」

「おお。メルにピツタ……ごめんなさい」

「次は前歯へし折るからね？」

「ぶち壊しにしろとまでは言わない……遅らせるだけでいい。時間さえ稼いでくれればな……」

彼の考えた作戦をメルに伝え、トーマとアルはこの場をメルに託し、音を立てぬよう古代の遺産へと向かった。

2人が、メルと別れてからしばし後。

古代の遺産に向け、森の中を走る彼らの姿があった。

「なあトーマ」

「なんだ」

「さつきメルに言ってたあれ。危くないか？ 誰かケガしたりとか……」

「そうならないよう、あらかじめ計算して仕掛けておいた……あとはメル次第、タイミング次第としか言えないな」

アルとトーマは夜の闇と森の木々に身を隠しながら、急ぎ古代の遺産へと向かう。

「一番はメルが動かなくてもいいよう、僕達が迅速かつ、失敗しないのがベストだな」

「……おっつ！」

トーマが置き去りにならない速度を維持しつつ、しばらくの間走り続けていたアルだが、遺産近くまでたどり着いたところで急ブレーキを掛けると背の高い草むらへ潜んだ。

少し遅れて、トーマもアルのもとへ到着する。

「……アル、どうだ？」

会話するための声も、互いにとってギリギリ聞き取れる程度の大きさに変えた。

アルが自慢の視力をフル活用し、前方に見える遺産の周辺を探る。

「……いるな。2人……だけみたいけど」

古代の遺産前には島の大人が2人。いつもと変わらず見張りに勤しんでいた。

いくら祭の当日とはいえ、この場所の見張りを無しにするわけにもいかないのだろう。

交代が来るまで見張りとしてこの場所に留まらなければならない時間自体は平常時より短くされているとは思うが。

「……………どうする？ 交代の見張りが来るまで待つか？」

「いや……………交代する時にここをガラ空きにするとは思えない……………それに、そんな悠長な時間はない。早く済ませられるなら、その方がいいに決まっているからな」

「んじゃあ……………俺がまた出て行って」

「それは出来ない」

「……………へ？」

「今回は僕が行く」

トーマからの意外な提案に、アルは呆気にとられた。

「なんで？ 前みたいに俺が囿になって、適当に撒けば……………」

「その時間が惜しい……………この作戦を成功させるには、文字通りお前が鍵になるからだ」

「……………？」

「……………ここで別れることになるから、今のうちに教えておいてやる」

彼は足元に墜ちていた小枝を1本手に取り、地面に図を書きつつ説明を始めた。

伝えるのは古代の遺産について判明したこと。

それらは、アルの想像の範疇を超える、こんな状況でもなければとても信じられないような内容。

トーマはアルに、自身が知った全てを教えた。

如何にして古代の遺産を使い、空の雲を晴らすのかという、その方法を。

作戦、開始 2

「……頭に入ったか？」

「むー……」

足元の地面には、トーマが説明に使用した図がいくつも描かれている。

一部始終を聞いていない他人には理解できない代物だ。

「……頑張る」

「お前に全てかかっているからな。いつものようにカラでもいから自信を持って」

いつも通りのやり取り。

そしていつも通りのため息をつくとき、トーマは立ち上がった。

「それじゃあな……任せたぞ、アル」

「……ああ。トーマも気をつけて……捕まらないようにな」

「メル程じゃないが……嘘に使える程度の頭は持っているさ」

彼の表情はまるで「大したことはない」と語っているかのように不敵で、頼もしくすら思えた。

大してズレてもいないのに、中指で眼鏡を押し上げる動作も至極いつも通りである。

「……アル」

「ん？」

そのまま見張りの元へ向かうかと思われたトーマだがその場を動かず、振り向くことなくアルの名を呼んだ。

「何度も言うが、ここから先はお前次第だ。……僕達は支えにしかない」

「……ああ」

「この場にいないメルの方まで頼んでおく……」

トーマは空を見上げた。

これから対峙する敵を見据えるかのように。

「イリヤを……助けてやってくれ。他の誰でもない、お前の力だな」

アルはすぐに言葉で返すことはせず、合図のように拳を彼の背中に突きつけた。

「まかしとけ」

見せることはなかったが、トーマの口元は微笑んでいた。

「……相変わらず根拠のない自信だが、それでこそお前だな」

いつものように皮肉を残し、彼は古代の遺産へ。禁忌とされるその場所を見張る大人達のもとへトーマは歩を進めた。

アルをその場所へ進ませるため。彼らの親友を救うために。

一方のアルは、未だ草むらに身を潜めて機を窺っていた。

トーマが見張りの大人達に話しかける姿が見えた。

アルと違い、普段の行いが物を言うのだろう。

トーマに対して警戒しているような様子はなさそうである。

内容までは聞き取れなかったが、彼らが会話を始めてから数分ほど立っただろうか。

トーマを先頭に、見張りの2人を誘導する形で、その場を離れていく。

見間違いかもしいないがトーマが一瞬、視線でちらりとこちらへ目配せをしたように感じた。

彼らの姿が見えなくなつてから、アルも古代の遺産へと駆ける。

彼にしては珍しく、落ち着いて行動することが出来ていた。

日頃の彼を知っている人間が見れば、驚くほど冷静に。

遺産の裏側へ回り込み、その中へ踏み入れる前に、彼もまた足を止め、頭上の空を見上げた。

昼と夜。明暗しか変化していない、手の届かぬ雲だけの空間。

これを晴らすことが出来たのなら、その先にあるのはどんな景色

なのだろうか。

アルの心中は期待と不安で半々だったが、強い決意で邪魔になりにえる感情を押さえ込んだ。

彼は遺産の中へと踏み込む。

中の様子は昨日とは打って変わり、そこら中に資料や書籍が乱雑に詰まれ、広げられていた。

トーマの、夜を明かしての奮迅さを感じ取れる。

アルはそれらには目もくれず、まっすぐに室内中央に設けられたそれに向かった。

(こいつか……)

室内のちょうど中央に設けられた、床から胸の高さ程度に伸びている円柱。

その台座の上には、無色透明の珠。

どうやって取り付けられているのかは分からない。

台座との繋ぎなどは見受けられず、ただそこに載せられているだけのように見える。

以前触れたときに気付いたことだが、この球体は台座にがっちり固定されていた。

円柱の部分も含めて1つの物体であるようで、この珠だけを持ち上げたり、動かすことは出来ないようだ。

「……………」

アルは台座の前に立ち、再びその球体と対峙した。

目を閉じ、足を肩幅に開き、呼吸を整える。

目の前にあるそれに触れればどうなるのかは既に身をもって知っている。しかしアルは自ら両手を伸ばし、包むようにその球体に触れた。

「っ！！」

瞬間、彼は彼にしか分からない衝撃をその身に感じた。

以前に触れたときにそうであったように、彼の両手と球体から青白い光が溢れ出す。

溢れ出た光は螺旋状の光線を作り出し、一旦室内の天井へと上った後、意思を持つ生物のように降下して彼が触れている珠の中へと流れ込んでいく。

あえて喻えるならば、光を放つ大蛇のように。

「くっっ………！！」

全身の内側から、その球体へ吸い込まれていくような感覚だ。

お前にしか出来ないんだ。

痛みや苦しみこそないものの、気を抜けば倒れてしまいそうな未知の感覚。

それに耐える彼の中で、先ほどのトーマとの会話が頭をよぎっていた。

靈子砲 1

「……れいしほー？」

古代の遺産を前に、見張りの大人達に見つからぬよう草むらに身を隠すアルとトーマ。

初めて耳にしたその言葉を、彼は復唱した。

「そうだ」

「ん……？ 古代の遺産が高射砲でれいしほー？」

「古代の遺産というのは今の時代の人々につけられたあれの呼び名。古代時代、ああいった兵器は一概に高射砲と呼ばれていて、その中でもあれは『靈子砲』れいしほっという特殊な物だ」

「……ちょ、ちょっと待ってくれ……頭こんがらがってきた」

脳の処理能力が限界に近いことを感じたアルは眉間をつまみ、しばし頭の中を必死の思いで整理した。

「つまり……えっと、あれは高射砲っていう古代の兵器で、あそこにあるアレは靈子砲っていう……なんだ、特別な物だったことか？」

アルはすぐそこにある古代の遺産を指差し、トーマが先ほど説明したことをほとんどそのまま言葉にした。

「お前にしては理解が早いな……そういうことだ」

「おう。あんま馬鹿にすんなよな？」

（火事場の馬鹿力というやつか……）

「ん？　なんか言ったか？」

「気のせいだ」

「でもさトーマ？　アレが……んと、霊子砲だとして、他の高射砲と何か違うのか？」

「ああ……前に高射砲について話したとき、簡単に言えばパチンコの玉を砲弾という鉄の塊に代えた物だと説明したな？」

「うん。それで……航空機だっけ。そいつを撃ち落とす兵器だつてのは聞いた」

「そうだ。空高くにいる航空機を撃ち落とすために砲塔の先端……あの部分だな。あそこから砲弾を発射する……それが一概に高射砲と呼ばれていた兵器だが、あの霊子砲はまさにここが違う」

「……？」

トーマはいつも通りズレていない眼鏡のフレーム中央部を中指で押し上げ、小枝で地面に図を描きながら説明を続ける。

「簡単に言うとな……霊子砲には砲弾も、その砲弾を撃ち出すのに使う火薬も無い」

「え……じゃ、じゃあ、俺たちが中に入っても、撃てないってことか？」

「いや、そういう意味じゃない……砲弾や火薬という、必要な物が足りないという意味での無いじゃなく、必要ないということだ」

「……は？」

彼の発言に、アルは啞然とした。

同時に彼の脳はオーバーヒート気味に全力稼働し、1つの結論にたどり着く。

「えっと、ちょっと待ってくれよ……それ、撃てなくね？」

「普通の高射砲であればそうだろうな。しかしあれは高射砲の1つではあるが霊子砲だ。砲弾も、それを撃ち出す火薬もない……だがこいつは撃てる。『れいじりよく霊力』を使ってな」

「……れーりよく？」

生まれて初めて聞いた言葉、その単語にアルの耳がピクリとした。

「なんだその……れーりよくってのは？」

「僕もそれを知ったのは昨日だ……古代の遺産でな」

トーマハすぐそこにある巨大な建造物を指差して答える。

「昨日、あの中で見つけた資料に、幸運にも運用方法を記した物

があつてな……それで知った」

「うんようつてのは……えっと」

「……使い方と言えば分かるだろう。要はどうやったたらあの兵器を動かすことが出来るかが書いてあつた」

「おお。さすがトーマ」

「僕は翻訳しただけだ……で、その資料から分かつたのは、あれを動かすための動力源がさっき話した霊力れいりょくという名前の力というワケだ」

「ふむむ……」

アルはあごに手を当て、いかにも考えてますという姿勢をアピールした。

「……霊力で動かすんだよな？ あれを」

「そうだ」

「でもさ……動かせたつて、肝心の砲弾とかがないんじゃない、やっぱり撃てないんじゃない……」

「言つただらう？ 砲弾や火薬は必要ない。霊力を使う、と」

「……んあ？」

「あの兵器は霊力を動力源として動かすと同時に、その霊力を砲

弾の代わりとして撃ち出すんだ。これが、あの兵器の名を靈子砲とした由縁だろうな」

古代の世界において最も後に研究され、最も謎の多い未知の力。

それが『靈力』れいりきょく。

当時の知識を用いても、この力の全てを解明するには至らなかったが、当時の人類はその力が利用できると思われるや否や、貪欲に文明へ取り込んでいった。

最終的には、兵器の分野にまで。

その中の1つが、先の大戦を経てなおこの島に現存する、あの靈子砲である。

「この靈力というものが何なのか……古代人にも解明し切れなかったんだ。今の僕達に分かるはずもない……だがな、まだ翻訳していなかった地下室の文献から、一応の説明は見つけることが出来た。簡単に言つと、『生きるもの全ての内側に宿る、生命エネルギー』といった感じらしい」

「エネルギー……」

「……本来は誰でも持っているもので、この力が最低限以上なければ、生命を維持することは出来ないぞうだ」

「ってことは……俺もトーマも、その力を持ってるってことか？」

「こつして生きているのだから、そうなのだろうな。ただ、自分

の生命を支える最低限の力しか持っていない者が大半らしい……自身の生命活動以外にそのエネルギーを注げる者でなければ、それらの霊力をエネルギーとする物は扱えない、とのことだ」

「ふーん。霊力、ねえ」

「目に見えるようなものではないらしいから、すぐに信じられないのも無理はないだろうが……」

アルは自分の手のひらを見つめてみるが、なんら変わったところは見当たらない。いつもと同じ、普段通りの自分の身体である。

「……ま、今は疑ってもしようがないもんな。信じるよ」

「信じてもらわなければ困る。特にお前にはな」

「……なんで？」

「僕が困になる理由でもあるんだ。お前が鍵になるとさっき言っただろう？」

「うん……言ったけど」

「あの霊子砲に入るのが僕ではなく、お前でなければならぬ理由でもある……お前しか、あの霊子砲を扱えないからな」

「えっ……はあ？」

トーマが言い放った、予想していなかった理由にアルは静かに驚愕した。

霊子砲 2

「やはり気付いてなかったか」

「え、いや……なんで俺？」

「さつき言った通りの……僕が古代書から解読した理論によるとだが。生きているものは皆、少なからず霊力を持っている。僕も、お前も、メルもな。だが僕達の中であれを扱えるほどの霊力を有しているのは、おそらくお前だけだ」

「俺だけ……いや、でも。どうしてそんなことがわかるんだよ？」

「昨日、初めてあそこに入った時に分かった……というか、あれが証明になるとしか考えられん」

「あれ？」

「最初、僕達が古代の遺産に入ろうとした時のことをまず思い出してみろ。出入り口らしき場所は閉まっていて、僕や……ましてや、僕達の中では一番力自慢なメルでさえ開けなかった扉が、お前が触った途端に光り始め、そして開いたんだ」

そう言われ、アルはようやくその事を思い出した。

あの時のアルは、扉を開こうとは思ったが、手で軽く触れただけ。押しても引いてもいまいどころか、まったく力など込めた覚えはないのに、その扉はアルに反応したように光を放ち、彼らの内部への探索を許した。

「それだけじゃない……中に入ってからもだ。初めは名の通り遺跡と呼べるような状態だったのに、お前があの透明な球体に触れた途端、内部の機器が反応し動き出した……あとは言わなくてもわかるな？」

アルはその時の状況も思い出した。

部屋の中央にあった球体に何気なく触れたあの時、たしかに遺産の中に灯りが点り、トーマが調べていた機器類も動き出した。

それが自分の持っている霊力とやらに反応したからだとしたら、自分はその兵器を動かすことが出来るだけの霊力を持っているという事なのか。

「そういうことだ……だから、最後にあそこにいなければならぬのは僕達じゃない。お前なんだ」

「俺が……」

「確実だとは言えない……だが確信はある。僕達ではなく、お前にしか出来ない」と

「……………」

「あくまで、出来るとすればとしか言えないが……お前にしか出来ないんだ」

「……やってやるぞ」

自分にしか出来ない。

自身を奮い立たせるのに、これ以上背中を押してくれる言葉が他にあるだろうか。

悦に入ることにはなかったが、正義を行おうとする子どものようにアルの気分は高揚していた。

「俺にしか出来ないってんなら、なおさらだ。絶対成功させてやるさ……じゃなきゃ、イリヤを助けられない」

「……ふ」

思っていた通りの反応に、トーマも少しだけ微笑んだ。

確証の持てない、見えぬ力に頼らざるを得ないことに不安を覚えない訳ではなかった。

それでもアルの心はそれまで以上に、やる気で満ち溢れていた。

「ぐ、あ……あああああつ……!!」

古代の遺産内部に、アルの静かだが強い叫びが響く。

台座の球体に触れてからおよそ数分が経った。

アルの両手はしっかりと台座の上にある珠に添えられ、そこからは依然として青白い光が溢れ出、再びその球体の中へと吸い込まれていく。

状況に明確な変化はない。アル自身の感じる、説明の難しい違和感、未知の感覚が確実に彼を苦しませ始めたということ意外は。

「ぐっ……うっ……うっ……うっ……!!」

初めてこの球体に触れたときにも彼は叫び声を上げたが、あの時は初めて体感した感覚に対する驚きと恐怖によるものが大きかった。だが今は違う。彼は既に、この球体に触れば、どういうことになるのか身をもって知っていた。知っていてなお、目的を果たすために自ら望んで手を出した。彼なりの心構え、予想は出来ていたはずである。

しかし彼の身体は悲鳴を上げずにはいらなかった。

それほどまでに、それに触れ続けることによって彼を蝕むその力は想像を超えたものであったということ。

「う……」

全身という全身から感じる、強烈な脱力感。
気を抜けば自分という存在が跡形もなくこの場から消え去ってしまふような侵蝕感。

形容し難い悪寒が身を包み、自慢の強靱な足腰は力なく震え、今にも膝から崩れてしまふような状態。

（　っ！）

それでも彼は倒れない。

倒れそうな意識を叩き起こし、再びその身体に力を込めて踏みとどまった。

（離す……かよ……）

彼の両手は未だ台座に乗る透明の球体に触れたままだった。

球体それ自体が、彼の手をを吸い込もうとするように引き寄せているのもあるが、それ以上に彼自身の強い意志が、その行動を成していた。

（離さねえ……ここまで来て……！）

彼は文字通りその珠にしがみついた。倒れそうな身体を支えるために。

それを完遂するために、折れない心で強く念じながら。

（こいつを離したら、イリヤは……！）

今の彼を支えている気迫。

それに火をともしたきっかけは、つい先ほど受けたトーマからの言葉だった。

靈子砲 3

トーマが、いよいよアルとの会話を切り上げ、別れようとした時のこと。

「……アル、別れる前にもう一つ説明しておくことがある」

「なにをさ？」

「……気付かなかったのか？ 僕はあの靈子砲という兵器が何なのか、それに使う靈力とは何かまでは話した」

「うんうん」

「それにお前だけがあの兵器を動かすだけの靈力を有しているかもしれないという、可能性の話をした。あそこに行くのが、僕やメルではなくお前でなければならぬ理由をな」

「うんうんうん」

「……お前はこれからあの中に行つて、何をどうすればいいか答えられるか？」

「うんうん……あ……」

アルはそこまで言われてようやく気付けた。自分がこれから取るべき行動について説明されていなかったことを。

自分がこの後に遺産内部に上手く入れたとして、その後はどうす

ればいいのか。

そんなアルのわかりやすい表情を見てトーマはいつも通りの呆れ顔を見せるが、その後で丁寧に説明してやるのもまた、彼らしさであった。

アルはトーマから、遺産の内部へ到着した後のこと、具体的にアル自身は何をすればいいのかを聞いた。

その説明は抽象的なもの。だがその方法は具体的だった。

遺産もとい、霊子砲を兵器として使用するとき、絶対に必要となる力。

動力としても、砲弾と火薬の代わりとしても使用する、そのほとんどが謎に満ちた力。

それが霊力。

霊子砲は、その内部に一定量以上溜め込んだ霊力の塊を、砲弾の代わりに空へ向けて撃ち出す兵器。

そこに至るまでの行程は単純だ。

一定上の霊力を持つ者が、霊子砲の内部に設置されている『霊力を溜め込むための装置』にその身を触れさせるといふもの。

「……え。そんだけ？」

「それだけだ……具体的に言うと、初めて僕達があの中に入ったとき、お前は円柱の台座に乗った球体に触っただろう。あれがそのための装置だ」

「あれが……つーことは、あの時の光が霊力ってやつか？」

「断定は出来ないが、おそらくは……あれに触れたときの感覚、覚えているか？」

「んと……なんていうか、身体の中からっていうのかな？ あの珠に、吸い込まれるようなカンジだった」

「それだ。あの時、お前はあの球体に手で触れただけだったようだが……意識せず霊子砲に霊力を注ぎ込んでいたんだろ？」

「ふーん……じゃあ、オレがまたあれに触るだけか……楽勝じゃん。もっと頭使うような難しいことしないといけないのかと思ってたよ」

「……ただし、だ」

アルが喜んだのも束の間。トーマからの言葉によって彼のはしやぎは制止された。

「あの球体に触れて、ハイおしまいではないということだ……霊子砲を撃つのに必要なだけの霊力が溜まるまでの間、触れ続ける必要がある……それがどういうことか、僕が何を言いたいのかはわかるか？」

「……………」

彼の説明を聞いてその意味を理解したとき、アルは軽く絶句してしまっただ。

初めて彼らが古代の遺産内を探索したあの日。

何気なく心惹かれ、台座に乗る珠に触れてしまったが、アルはその瞬間、自分の全身が見えない力によってその球体の中に全て吸い込まれていってしまうような錯覚を体感した。

あの時はパニックになり、どうにか助かったが、もしあの時あのまま手を離さなかったなら、自分はどうなってしまうっていたのか。正直な話、悪い方向にしか想像が働かない。

「……解消できなかった問題点がここだ。少なくともお前は、前回よりも長く……発射に必要なだけの霊力が溜まるまで、あの球体に触れ続けなければならぬ。どの程度の時間と量が必要なのか分からない上、お前にどれだけの霊力があるのか、それを使うことでお前の身体にどんな事が起こるのかも予想できない」

「……だよな。試し撃ちなんてしてないんだから」

生命を支えるエネルギーだという霊力。

とすれば、もし霊子砲を撃つために、万一にも自分の持つその力を使い切ってしまったらどうなるのか。

最悪の場合、アルが命を落とすことも考えられるのではないかと、トーマは懸念していた。

「アル……どうする?」

「どうするって……」

「今ならまだ……引き返すなら今のうちだということだ。始めてしまったら、成功か失敗か……どちらかの結果がハッキリと出るまでは止められない」

「……………」

「もちろん成功すればイリヤは助かるだろうが……最悪の場合、イリヤとお前の2人とも命を落とすということも……」

「……へっ」

目の前に並べられた、どう見ても分の悪い事実を一蹴するようにアルは小さく鼻で笑った。

「聞かなくても分かるだろ？」

「……だろうな。お前らしい返答だ」

「なんだよ。また馬鹿にしてんのか？」

「純粹に褒めているんだ……今回に限ってはな」

「はっ……どうだか」

トーマはまた眼鏡を押し上げ、アルからの予想通りの回答に口元を弛めた。

「……行くか」

「ああ」

再び古代の遺産前の様子を覗き見る。

見張りの数、様子に先ほどと変わったところはなさそうである。

となれば、後は彼らの立てた作戦に従って行動するのみ。

互いの役割は明確だ。

トーマが囮として見張りを引きつけ、その隙にアルが遺産に潜入し、霊力を込めて空にむけて雲を撃つ。

意識はしていなかったが、お互いに決意を固め合っていた。共通する、「親友を救う」という目的のために。

そうして、トーマは知識を置き土産にアルへと託し、アルは作戦通りに遺産内部へと飛び込んだ。

その会話はほんの数分前。古代の遺産近くでのこと。

「ぐあ……ああああ……！」

アルの、文字通り、命を賭しての作業は続いている。だが状況は好転の兆しを見せなかった。

停滞。

その言葉がピッタリだろう。

アルの霊力を霊子砲へ溜める努力は続いていたが、終わりが見えていなかった。

トーマから説明された、霊力が今どれほど溜まっているかを指し示す……向かいにある発光する盤面に映る針と数字。『メーター』という物らしい。

その指針が、一定を越えてからそれ以上増える気配を見せないのだ。

かといって霊子砲が発射された兆しは感じられない。
感じられるのは、アルの全身を襲う苦しさのみ。

アルは言葉にならぬ叫びを放ちながら、独りその苦行に耐え続け
ている。

しかし時間は無限にあるわけではない。そういった意味では、状
況はむしろ切迫していると言えた。

祭の前哨である宴もいよいよ閉幕し、広場では今まさに祈りの神
子の儀式が始まらんとしていたからである。

最期の言葉

アルが、古代の遺産内部に到着した頃。

広場では何ら問題なく祭が続き、前哨と言える宴の閉幕が近付いていた。

今年の祭において主役と言えるイリヤは、会場全体が見渡せる場所にある卓で、その様子を見守っていた。

広場全体を包んでいた先ほどまでの賑わいを考えると、焚き火が弱まっていくような寂しい気持ちになってしまう。

イリヤは村長と会話をする以外ではほとんど不動のまま、目の前に並ぶ料理にも手をつけることなく、まるで人形のようにただただ宴の様子を見つめ続けていた。

自分が育った思い出の場所、景色を瞳に焼き付けるように。

同じ島で同じ時間を過ごした、島の人々の顔を忘れてしまうことがないように。

「……そろそろかの」

「はい……」

村長は誰に向けてというわけでもなく、静かにつぶやくと席を立った。

祭が始まってからこの場所を動かなかった村長が広場の中央に向かうということは、その時間がやってきたのだらう。

イリヤも席を立ち、その後に行く。

「……………」

足は止めることなく前へ前へと進めていたが、彼女の視線は広場
中を泳ぐように。

その身、命を捧げることにもう迷いはなかったが、イリヤには
つだけ気がかりなことがあった。

彼女は宴の間ずっと、3人の親友達を探し続けていたのだが、彼
らの姿は広場のどこにも見当たらない。

(やっぱり……来てくれないか。そうだよね……)

自分が彼らと同じ立場だったなら、やはり参加しない。自分には
おそらく出来ないだろう。

いくら本人から「見ていて欲しい」と頼まれても、これから死に
向かう親友の姿を最期まで見守る勇氣など自分にはなさそうだし、
どんな顔をして会えばいいのかわからない。

(うん……しょうがないよね)

イリヤは彼らの姿を見納められない事に寂しさは感じていたが、
凜と前を向き、その足を止めることはしなかった。

「……あー、皆の衆」

「……………」

前方を歩いていった村長が広場の中央で止まり、右手を挙げて皆を注目させた。

事前の打ち合わせ通り、イリヤは村長の横に位置取り、周囲を見回す。

宴を楽しむ者達はその手と口をピタリと止め、皆こちらを見つめている。

神妙、誇らしげ、微笑み、酒に酔った赤い顔……その表情は様々だった。中にはイリヤの姿を見て、もう涙ぐんでいる者すらいた。

「知らん者はおらんと思うが……今年の祈りの神子として選ばれた……イリヤじゃ」

広場に集った島民達には顔見知りの者しかいないが、儀礼として村長からの紹介を受け、イリヤは丁寧に深く頭を下げる。

誰からの合図もなく、彼女たちを囲む人々は手を叩き始める。

初めは小さなその音もすぐに波のように周囲に広がっていき、やがて割れんばかりの大きさを広場全体を包んでいった。

「ではイリヤよ……祈りの神子として皆に言葉を」

「……はい」

村長からの言葉で、イリヤは頭を上げた。

視界には入りきらないほど、彼女に注目する島民達の表情が映る。

「……皆さん」

イリヤは、堂々とした佇まいたたずに見えるよう注意しつつ、言葉を紡

ぎ始める。

命あるものとしての、この島に住む者達との、別れの言葉として。

「今まで……お世話になりました。祈りの神子として選んでいただけなこと、光栄に思っています……」

自らの死を目の前にしながらも、毅然とした彼女の態度。

それを見つめる島民達は静かに驚き、またどこか誇りのようなものも感じていた。

「……10年前に私は、1度だけ星空ほしぞらを見ました。祭の日でもなんでもない、普通の日の夜でした」

イリヤのこの言葉に、島民達の中には「またか」と思う者も少なからずいた。

だが誰も嘲笑することはない。くだらない嘘だと心の底では思っている、それをこの場で表面に出す者はいなかった。

最期が迫っている者の言葉。

文字通り、最後ぐらいは好きなことを口にすればいい……内面で各々が彼女の言葉をどう感じるかは別として、反応を表には出さない見せないように努める。

ある意味では、この場所に集まった誰もが暖かい気持ちで彼女の様子を見守っていた。

「信じていただけなくても、笑っていただいてもかまいません。だけど……」

目の前にいる一人一人を見つめられるようにゆっくりと視線を動かし、周囲を見渡しながら彼女は彼女自身の想いを言葉にしていく。

自分では気付いていなかったが、群集の中にもしかしたら親友達の姿もあるのではないかと、無意識に探してもいた。

「だけど……とても綺麗だったんです。初めて見た星空は、とても綺麗でした……まるで吸い込まれてしまいそうで……上手く言えないけど、すごく感動しました」

人の心の内側、真意は読めないが、少なくとも広場にいる者達は誰も視線を逸らすことなく、時が止まったかのようにイリヤを見つめ、その言葉に耳を傾けていた。

「私の話を信じて欲しいとか、そんなことじゃないんです。ただ……」

言葉を考え少しだけうつむいたが、次に顔を上げた彼女のその表情は誇りを持ち、とても凜としていた。

「私は……皆さんにも、あの星空を見て欲しいと思います。私があの日見たのは、小さい頃から何度も言われたように、もしかしたら夢や幻だったのかもしれませんが……だけど、とても綺麗だったんです」

彼女が幼い頃、今は亡き両親とあの丘で見上げた、短い時間だけの奇跡。

彼女の親友たちを除き、誰も彼女の話を信じようとはしなかった。

しかし彼女は、その奇跡についていつしか人に話すことがなくなつてからも、それを信じ続け、思い出を捨てようとはしなかった。それは今、この場に至っても。

「私が見た星空を皆さんも目にして……それで、同じように感動してもらえたら、嬉しいです」

信じて欲しいわけではない。

今まで否定されてきたことについて謝罪を求めるわけでもない。

ただ彼女は、自分が体感した喜びと感動を、今日の前にいる人々にも訪れるようにと願い、祈る。

「すみません。話が逸れてしまったかもしれませんが……祈りの神子としてのお役目、しっかりと果たしたいと思います」

ただそう願い、祈る。そのために、自分自身が犠牲になるのだと分かっていても。

「今まで……ありがとうございました。皆さんに、祭の奇跡が訪れますように……」

彼女は彼女らしい笑顔を見せ、もう一度深々と頭を下げた。

焚き火の弾ける音だけが支配した広場。

静寂を消し去るように、少しずつ少しずつ拍手の音が彼女に向けられ、やがてそれは大きくなり、先ほどと同じように広場を包み込んだ。

（ねえ……顔は見えないけど、見てくれてる？）

人々から贈られる、拍手と激励の声。

その音を視界の外から受けていた彼女の脳裏に浮かんだのは、両親と、彼女の親友達3人の顔。

(私……頑張るよ。怖くないって言ったら嘘だけど……頑張るか
ら)

皆、この場にはいない者達だったが、彼女が祈りの巫女としての役目をしっかりと果たすその姿を、どこかで見届けてくれる。

自己満足かもしれないが、背中を押してくれるようなそんな気持ち、イリヤは感じていた。

再び顔を上げた彼女は、そのまま空を見上げた。

きつと、また皆の顔を見たら、今度こそ堪えきれずに泣いてしま
いそうだったから。

「うむ。それではこれより……」

すぐ隣で、村長が何か話し始めたが、正直なところイリヤの耳に
は入ってこなかった。

音は、どこか遠くにあるようで。

夢の中のような浮遊感。

確かに今、ここにあると感じられるのは、少しだけ肌寒い夜の風
と、自分の視界と、その遙か向こう側に映る、いつもと変わらぬ雲
の空。

見慣れた夜の空。

雲に切れ目はなく、当然ながら星も見えない。

今夜この空に、奇跡は起こるのだろうかと彼女は考えた。

自分が命を捧げることで、本当に奇跡は起こってくれるのだろうか。

だが彼女は、弱い方向きかけていた気持ちを振り払うように、それ以上考えることを止めた。

ここで挫けてしまつては元も子もない。

親友達とも、両親とも、今この場にいる人々とも、もう別れの挨拶は済ませたのだ。

(アルたち……どうしてるかな)

奇跡が起こって欲しいとは願っている。

しかし今の自分に来ることは、最期の瞬間まで毅然と振る舞い、この役目を果たすこと。

それで奇跡が起きなくとも、それ以上彼女にはどうしようもないのだから。

(……伝えておけばよかったかな)

芽生えようとした弱気。

死を怖れる恐怖。

それらの心に、彼女は蓋をした。

彼女に向けられた、大きすぎるほどの期待に応えるためにも。

(アル……)

彼女は、その感情も閉じ込めた。

心の奥に残ってしまった、小さな小さな後悔を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5599x/>

星空を、もう一度。

2011年10月28日03時05分発行